



저작자표시-비영리-변경금지 2.0 대한민국

이용자는 아래의 조건을 따르는 경우에 한하여 자유롭게

- 이 저작물을 복제, 배포, 전송, 전시, 공연 및 방송할 수 있습니다.

다음과 같은 조건을 따라야 합니다:



저작자표시. 귀하는 원저작자를 표시하여야 합니다.



비영리. 귀하는 이 저작물을 영리 목적으로 이용할 수 없습니다.



변경금지. 귀하는 이 저작물을 개작, 변형 또는 가공할 수 없습니다.

- 귀하는, 이 저작물의 재이용이나 배포의 경우, 이 저작물에 적용된 이용허락조건을 명확하게 나타내어야 합니다.
- 저작권자로부터 별도의 허가를 받으면 이러한 조건들은 적용되지 않습니다.

저작권법에 따른 이용자의 권리는 위의 내용에 의하여 영향을 받지 않습니다.

이것은 [이용허락규약\(Legal Code\)](#)을 이해하기 쉽게 요약한 것입니다.

[Disclaimer](#)

文学博士 学位論文

二音節語基派生語の意味変化に関する 通時的研究

—上代～現代日本語に見られるオノマトペの語基を中心に—



2020年 8月

釜慶大学校 大学院

日語日文学科

竹下知佳

文学博士 学位論文

二音節語基派生語の意味変化に関する 通時的研究

—上代～現代日本語に見られるオノマトペの語基を中心に—

指導教授 崔 建 植

この論文を文学博士学位論文として提出する。



2020年 8月

釜慶大学校 大学院

日語日文学科

竹下知佳

竹下知佳の文学博士学位論文を認准する。

2020年 8月



主 審 文学博士 孫 東 周 (印)

委 員 文学博士 張 相 彦 (印)

委 員 文学博士 李 京 珪 (印)

委 員 文学博士 趙 垺 熙 (印)

委 員 文学博士 崔 建 植 (印)

目 次

第1章	序論	1
1.1	はじめに	1
1.2	上代語の語形成と意味分化	6
1.3	研究対象及び研究方法	11
1.4	本研究の構成	14
第2章	理論的枠組み	18
2.1	はじめに	18
2.2	理論的枠組み—多義語の認知意味論的アプローチ	18
2.3	本研究の立場	23
第3章	語基カラ〜コロ系及びクル系派生語の意味変化	24
3.1	はじめに	24
3.2	共時的観点からの考察	25
3.3	通時的観点からの考察	31

3.3.1	上代文献に現れる各語基のコアイメージ	31
3.3.2	中古文献以降に現れる各語基派生語の意味変化	37
第4章	語基サヤ～ソヨ系及びサワ系派生語の意味変化	64
4.1	はじめに	64
4.2	共時的観点からの考察	66
4.3	通時的観点からの考察	72
4.3.1	上代文献に現れる各語基のコアイメージ	72
4.3.2	中古文献以降に現れる各語基派生語の意味変化	82
第5章	語基ハラ～ホロ系派生語の意味変化	96
5.1	はじめに	96
5.2	共時的観点からの考察	97
5.3	通時的観点からの考察	102
5.3.1	上代文献に現れる各語基のコアイメージ	102
5.3.2	中古文献以降に現れる各語基派生語の意味変化	105

第6章	語基ユラ〜ユル系派生語の意味変化	134
6.1	はじめに	134
6.2	共時的観点からの考察	135
6.3	通時的観点からの考察	139
6.3.1	上代文献に現れる各語基のコアイメージ	139
6.3.2	中古文献以降に現れる各語基派生語の意味変化	146
第7章	母音の属性と意味の派生	164
7.1	等価的交替関係にある語基のペア	164
7.2	母音の属性と意味分化の様相	169
7.3	語基と派生語、語基と語根との関係	172
第8章	結論	176
参考文献		185
付録		194

表・図 目次

<表 1> 現代語においてカラカラ・コロコロ・クルクルと共起しやすい動詞	28
<表 2> 上代文献に現れる語基カラ～コロ及びクルのコアイメージ	36
<表 3> 現代語においてサヤサヤ・ソヨソヨ・サワサワと共起しやすい動詞	67
<表 4> 上代文献に現れる語基サヤ～ソヨ及びサワのコアイメージ	81
<表 5> 現代語においてハラハラ・ホロホロと共起しやすい動詞	98
<表 6> 上代文献に現れる語基ハラ～ホロのコアイメージ	104
<表 7> 現代語においてユラユラ・ユルユルと共起しやすい動詞	135
<表 8> 上代文献に現れる語基ユラ～ユルのコアイメージ	145
<表 9> 等価的交替関係にある語基同士に見られる母音の対応関係	170
<図 1> コアイメージと三つのカテゴリーの関係	21
<図 2> カラ系派生オノマトペの<音>に関する意味変化の様相	42
<図 3> コロ系派生オノマトペの<音>に関する意味変化の様相	47
<図 4> カラ系派生語の<動き>に関する意味変化の様相(カラルの場合)	50

＜図 5＞ コロ系派生語の＜動き＞に関する意味変化の様相(中世以降) …	53
＜図 6＞ コロ系派生オノマトペの＜さま＞に関する意味変化の様相 ……	57
＜図 7＞ クル系派生語の＜動き＞に関する意味変化の様相 ……	61
＜図 8＞ クル系派生語の＜さま＞に関する意味変化の様相 ……	63
＜図 9＞ ソヨ系派生語の＜音＞に関する意味変化の様相 ……	86
＜図 10＞ サヤ～サワ系派生語の＜さま＞に関する意味変化の様相 ……	95
＜図 11＞ ハラ系派生語の＜さま＞＜音＞に関する意味変化の様相 ……	112
＜図 12＞ 落涙の＜さま＞を表すハラ～ホロ系派生語の意味変化の様相	119
＜図 13＞ ハラ系派生語の＜動き＞＜さま＞に関する意味変化の様相 …	128
＜図 14＞ ホロ系派生語の＜さま＞に関する意味変化の様相 ……	133
＜図 15＞ ユラ～ユル系派生語の[揺]に関する意味変化の様相 ……	152
＜図 16＞ ユラ系派生語の[緩]に関する意味変化の様相(中古～中世) …	158
＜図 17＞ ユル系派生語の[緩]に関する意味変化の様相(中古～現代) …	163

A diachronic study on the semantic changes
of disyllabic base derivatives
— Focusing on the bases of Onomatopoeia
in the early to modern Japanese—

TAKESHITA Chika

Department of Japanese Language and Literature,
The Graduate School,
Pukyong National University

Abstract

This study analyzes the process of semantic changes of disyllabic base derivatives. The aim here is to clarify which aspects are changing and which are not.

Specifically, this study covers the diversely formed onomatopoeia, adjectives, attributive verbs, and verbs that derive from ‘apophonic disyllabic bases’ that appear in ancient records and are still in use. Furthermore, the study examines how the core image, which commonly appears in such derivatives, influences the meanings of those different derivatives. In particular, this study takes as its main subject the pairs of bases in ‘equivalent alternations’ that have been considered in previous studies related to semantic differentiation but whose specific differences were never mentioned and examines them

from the perspective of cognitive semantics.

The results of this study suggest that the bases that are equivalent in apophony have a common core image and that they have engaged in semantic differentiation through vowel gradation, which varies depending whether it is from the auditory perspective or from the visual perspective. Moreover, this study shows that among the visual semantics, the difference between indicating the dynamic 'motion' or the static 'state' influences the semantic differentiation of the derivatives. However, the core image that the base originally has remains unchanged as it is maintained and preserved no matter what derivative the word may become.

This result provides the reason why there are words that not only seem phonologically similar but also semantically similar in modern onomatopoeia. This is because those words have a common core image at the base level.

第1章 序論

1.1 はじめに

人は生まれ、成長し、年を重ねる中で、外見的・内面的に様々な変化を経るものだが、言葉もまた生まれ、使われ、長い年月を経る中で、形態的・文法的・意味的に様々な変化を生み出している。「言葉は生き物である」という使い古されたメタファーが今なお使われ続けているのは、人も言葉も年を経る中で変化する、という共通項が基盤にあるからであろう。その一方で「三つ子の魂百まで」という諺があるように、人には年を重ねても変わらない面があると言われている。では、言葉はどうだろうか。

本研究では、言葉が生成され、年月を経る中で生じる変化と、その変化の過程を探ることで逆に立ち現れてくる不変的な側面とを明らかにすることを目的とする。具体的には上代文献に現れ、かつ現代日本語にも残るオノマトペにおける二音節の語基のうち、母音交替関係にあるペアを中心に、そこから派生した様々な形態のオノマトペ、形容(動)詞や動詞などの用言に到るまで、幅広い転成語の意味について、通時的な考察を行っていく。

なぜ二音節語基を取り上げるのか、なぜ母音交替関係にあるペアに注目するのかについて述べる前に、まず語基という用語について説明しておこう。阪倉篤義(1966)¹は上代日本語の語構成要素を大きく「語基」と「接辞」とに分類しているが、「語基」について「自身單獨で單語を形成することも可能であり、また同類のものをどうし結合して單語(複合語)を構成し、さらには、つぎの(二)(「接辞」を指す:筆者註)に分類されるものと結合して單語(派生語)を構成した場合にその基幹的な部分となるやうな類のもの」(p.197)と述べている。つまり、語基とは単独で單語にもなり、また他の語を接辞して派生語も生み出せる、という機能を持つものであることが分かる。

一方、工藤力男(1980)²はいわゆる形状言³と呼ばれる語の形態について、「形状言の<語基>の全形をくりかえす方式は<反復法>、そこに得られる語形は<反復形>」(p.23)と述べ、ウラウラニ、クレクレトのような形状言の形態的最小単位として、ウラ・クレのような二音節語基を設定している。氏は形状言を、「品詞的に未分化であることを特徴とし、多彩な用法を持っている」(同上p.22)もの、という非常にゆるやかな範疇にある語として捉えているが、要するに形状言という動詞にも形容詞にも副詞にもなりうる語のうち、形態的に最も小さな単位が二音節語基であ

¹ 阪倉篤義(1966)『語構成の研究』角川書店

² 工藤力男(1980)「形状言による副詞句の形成」『万葉』第103号

³ 形状言とは、形容詞・形容動詞の語幹と定義されるものである(『時代別国語大辞典 上代編』における凡例p.8、上代語概説p.52による)。

る、ということになる⁴。より簡潔に述べるなら、二音節語基は「派生語を生み出す際の基本単位」と置き換えることもできよう。これは、前述の阪倉氏の述べるところにも通じ、山口佳紀(1985)⁵の述べる情態性語基もこれと同様の概念であると見なすことができる⁶。

さて、或る語基が動詞にも形容詞にも副詞にもなれるということは、語基自体には動詞的なく動き>に関わる意味も、形容詞的なくさま>に関わる意味も、全て内包されているということになる。これは、現代語においてオノマトペが一語で様々な意味を含んでいることと同じ現象であると言えよう。例えばコロコロというオノマトペ一つをとっても、回転する<動き>と、丸さや軽さという<さま>に関わる意味を一つの語で表すことができる。

また形態・統語的側面を見ても、先ほど工藤氏が示したウラウラニ、クレクレトのような二音節語基反復形の形状言は「副詞ないしは副詞句を形成するはたらき」(同上p.22)を持つとされているが、これはまさに現代語において副詞に属するオノマトペの基本形態に通じると言えよう。というよりも、オノマトペの源流を辿ると上代語の二音節語基に通じる、と述べた方がいいかもしれない。オノマトペの語基は上

⁴ 工藤力男(1985)「古代日本語における量語の変遷—イトドからイトイトヘ—」による。同氏は言語研究における体系の簡素化を目指して「語基を二音節にそろえた」(p.20)と述べており、実際には「エ」のような一音節語基の存在も認めている。

⁵ 山口佳紀(1985)『古代日本語文法の成立の研究』有精堂出版

⁶ 山口氏の述べる情態性語基とは「動詞・形容詞・情態副詞などを作るもの」(p.237)であり、様々な派生語を生み出す言葉のもとしての働きを担うものとして捉えられている。

代語に見られる語基の形態面だけでなく、意味も働きも受け継いでいるのである⁷。

このことから、逆に上代語の二音節語基と現代語のオノマトペ語基とに共通して見られる語基の派生語を対照させることで、上代語から現代語に渡って、語の形態や意味がどのように変化してきたのかについて明らかにすることができると考えられる。特に、本研究で注目するのは阪倉氏が指摘した「基幹的な意義を共通にしつつ、添加された意義において差異を有する一つの形式を新たに形成する」(同上p.276)手段としての母音交替である。母音交替関係にある語同士は、基幹的な意義を共通にしつつ何らかの違いを表している、というこの説が真であれば、現代語オノマトペに見られるカラカラとコロコロのような音韻的に類似し、また意味的にも重なりのある語同士の繋がりも、基幹的な意義を共通にして派生した語同士だから、と説明できるのではないだろうか。

ただ、これまでの現代日本語オノマトペ研究における通時的考察に関しては、対象となる文献の多くが中古以降のものであり、上代文献は常に避けられている

⁷ 現代日本語オノマトペ研究においても語基という用語は度々用いられており、例えば角岡賢一(2007:49-70<第三章 語基と派生形>)は、辞書に収録されたオノマトペの見出し語から共通項＝オノマトペ語基を抜き出し、その派生の様相について検証を行っている。このオノマトペ語基抽出方法は、工藤(1985:21)が、互いに密接に関連するツバラ・ツバラカ・ツバヒラカという語から語基ツバを抽出した方法に通じる。また田守育啓,ローレンス・スコウラップ(1999)の指摘を引き合いに出すまでもなく、オノマトペ語基は「キラメク・ボロイ」のように接尾辞を伴って動詞化・形容詞化することがあるが、これも上代語の語基が接尾辞を伴って、「タワム・イタシ」のように動詞化・形容詞化する語形成の様相に重なると言える。

感があった。その理由としては、小野正弘(2015:16)⁸が述べているように、上代文献に見られるオノマトペとそれ以降の年代に見られる語との間に明確な意味的關係が見出せないこと、また研究の対象となる上代語資料が限定されている上に、オノマトペという更に限定的な語彙が調査対象であるということなどが挙げられるだろう。

確かに、上代文献は他の時代に比べて量的にも少なく、また未詳語も多いため、中古以降の文献のように現代語との間の連綿とした繋がりを把握するのは難しい。しかし或る語基から派生するオノマトペだけでなく、動詞や形容詞などその他の派生語を幅広く集め、それらの語が共通に有する意味(阪倉氏の言う「基幹的な意義」)を見出すことができれば、それを頼りに、上代語と現代語との繋がりを明らかにすることができるのではないだろうか。

本研究ではこのような考え方にに基づき、上代語から現代語に至るまで用いられ続けている母音交替関係にある二音節語基派生語、即ちオノマトペの二音節語基を中心に、そこから派生した動詞・形容詞・形容動詞、またそれを繰り返した反復形オノマトペや、助詞「と」「に」を接続した副詞まで、様々な派生語を対象とし、派生語の意味から語基の「基幹的な意義」を抽出した後、それぞれの語基派生語がどのように新たな意味を派生させていくのかについて考察する。

⁸ 小野正弘(2015)『感じる言葉 オノマトペ』KADOKAWA

1.2 上代語の語形成と意味分化

本節では、本研究で扱う語基を選定するための予備知識として、上代語の語形成と意味の派生に関する先行研究について紹介する。

まず整理しなければならないのは、上代語において語の派生の一端を担っていたとされる母音交替と意味との関係である。日本語の母音が本来八音あったことを最初に示唆したのは近世の国学者、本居宣長だが、その後の研究によって日本語には/a//i//u//e//o/の他に、/i//ë//ö/という三つの母音があったということが指摘され、それらは各々五母音(の中にi//u//o/の甲類三母音を含む)、乙類三母音などと呼び分けられて、長らく定説とされてきた。

その中で、泉井久之助(1956)⁹はこの八つの母音を男性母音/a//o//u/を中心とした領域Aと、それと明確な対立を示す/ë//ö/を中心とした領域Bとに区分し¹⁰、この両域にまたがって起こる母音交替現象(氏は「遞音」と称する)に意義的範疇の対立が見られると述べている(pp.1005-1006)。氏はこの「意義的範疇」について具

⁹ 泉井久之助(1956)「上代日本語における母音組織と母音交替」『京都大学文学部研究紀要』第4号

¹⁰ この区分はいわゆる「有坂・池上法則」と呼ばれる、上代語の母音調和の法則に関わる母音の分類に基づく。有坂秀世は、「古代日本語に於ける音節結合の法則」なる論文(『国語と国文学』1934年1月号)において、「ア列音(a)ウ列音(u)及び甲類のオ列音(o)に對應する古代母音が陽性、乙類のオ列音(ö)に對應する古代母音が陰性であつたことはいふまでもない。甲類のイ列音(i)の祖先が中性であつたことも略間違ひは無からう。」(1957:115)と記しており、/a//u//o/と/ë//ö/の対立構造について言及している。因みに、陽性母音・陰性母音という用語は、男性母音・女性母音と呼ばれることもある。

体的に言及していないが、列挙された例を俯瞰すると、例えば、具体的な深淺の程度を述べる/asa/に対して、考えの「浅さ」という抽象的表現においては/wösö/を用い、空に浮かぶ「月」(/tukī/)に対して、月日の移ろいとしての「時」(/töki/)という語が生じるなど、母音交替により「具象／抽象」のような視点の違いが表されることが確認できる。

同様に、森山隆(1964)¹¹もその例が少ないとしながらも、/ö/～/u/対応関係について下記のような例を挙げ、意味的対応関係を見出している。

/ö/	/u/
öku (置)	uku (浮)
kömu (籠)	kumu (隠)
nöku (除)	nuku (抜)
ötö (音)	uta (歌)
tömö (伴)	tuma (配偶)

氏によると、浮く(/uku/)は水の上に置く(/öku/)さま、配偶者(/tuma/)は婚姻関係にある友(=伴/tömö/)という具合に、母音交替に伴い意味分化がなされており、

¹¹ 森山隆(1964)「上代に残存するö-u対応について—意味の分化に関する一試論—」『国語学』通巻第56号

対となる語同士の関係について「両語はもともと同義であり、同一の現象を二面から分担して意義の分化をきたしたものであらう。」(p.6)と述べている。

確かに森山氏の述べるように/öku/と/uku/とを考えた場合、「水の上にオク(置)状態をウク(浮)と称することができる」(p.5)ため、両者は同じ意味範疇にあると捉えることができる。しかしそれは同一の現象を二面から分担したというよりも、オクという漠然とした動きが、「水の上」という具体的な場所の指示を得て具体化された、と見るべきではないだろうか。即ち、抽象的・概念的な状態を指す/ö/系統の語の中から或る事例を取り立て、より具体的に述べたものが/u/系統の語であると考えることが可能なのである。

これらのことから母音交替、特に/a/-/ö/交替や/u/-/ö/交替による新たな語の派生は、具象⇔抽象のように何らかの状況を別の意味領域に転化する、いわばメタファーによる意味分化の役割を担っていたのではないか、という仮説を立てることができる。

新たな語の派生については阪倉氏(1966)も、上代日本語において新たな語を作り出す手段として、接辞による派生を指す「外的派生」と、母音交替をはじめとする音韻変化による派生を指す「内的派生」という二つの造語法が取られていたと述べ、派生についての体系的な整理を試みている。氏の述べるところの「外的派生」とは、語基アカ(明)に動詞化接尾辞ル・スや形容詞化接尾辞シを接辞すること

で、「アカル・アカス・アカシ」のように異なる品詞を派生させるような機能的変化を指す。これに対して内的派生とは「イトーイと」(筆者註:平仮名表記は乙類を示す、以下同じ。)のように語末、或いは「クム-コム-こもル」のように語頭・語中の部分を母音交替させることによって、「基幹的な意義を共通にしながら、添加された意義において差異を有する一つの形式を、あらたに形成する」(p.276)ものとされている。氏はここで意味の添加と表現されているが、これは先の泉井・森山両氏の論考でも指摘した通り、視点の違いによる意味の新たな発現と考えた方が良いであろう。つまり、或る一つの基幹的な意義を、それまでとは異なる意味領域にシフトさせる、或いはそれまでとは別の面から切り取ることで生じるのが新たな意味であり、元の語の意味と派生した語の意味は、根の部分では同じだということである。

母音交替に関しては、山口佳紀(1985)も先の阪倉氏の論などにに基づき、語構成的観点からの考察を行なっている。氏は母音交替を二つの類型に分類し、「母音交替によって被覆形・露出形という、語の文法的機能の転換が見られるものを『異価的交替』と称するならば、u-o₂・a-o₂などに多く見られるように、そのような機能の転換が見られないものを『等価的交替』と呼ぶことができる。」(p.303)と述べているが、先に見た/a/-/ö/, /u/-/ü/交替や「クム-コム-こもル」などはまさにこの等価的交替に該当すると言える。そしてこのような等価的母音交替が、意味の分化を担うものであり得ることは同氏も否定しておられない。

以上、先行研究の検討から、上代日本語においては或る語の母音を交替させることによって新たな語を派生させる、内的派生という手段が取られており、特に等価的交替関係にある語同士は基幹的な意義を同じくしていた、という点は明白な事実と言えるであろう。問題は、そのような母音交替関係にある語の基幹的な意義をどのように把握すべきか、そして内的派生によってその基幹的な意義からどのように新たな意味が分化していくのか、という点にある。また、母音交替関係にある語基のペアを広く集めた場合、各母音が担う意味には何らかの規則的な傾向が見られるのか、というところも着目すべきポイントであろう。

本研究では、これまで「意味の分化があり得る」とされつつ、その実態が明らかではなかった等価的母音交替による新たな意味の派生の様相、そしてその語基の担う本来の意味と、語基を基盤として生じた派生語の意味との関係について、認知意味論の方法を援用して明らかにしたいと考える。特に本研究では国広哲弥(1994)¹²の現象素などに基づく認知的多義の考え方を援用し、ネットワーク・モデルと現象素に基づき認知的多義を統合した靱山洋介(2001)¹³の「統合的モデル」を参考にした記述を試みる。理論的枠組みについての詳細は次章に譲るとして、次節では本研究の研究対象となる語基の選定、及び研究方法について述べる。

¹² 国広哲弥(1994)「認知的多義論—現象素の提唱—」『言語研究』106号

¹³ 靱山洋介(2001)「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喻」山梨正明他編『認知言語学論考No.1』所収 ひつじ書房

1.3 研究対象及び研究方法

山口仲美(2012:162)¹⁴が収集した上代文献に現れる65種類のオノマトペは以下の通りである(番号は氏の記載の通り)。

①い ②うつらうつら ③うらうらに ④かか ⑤かくしもがもと ⑥かわら ⑦くる
るに ⑧くれくれと ⑨けやに ⑩ここ ⑪こごと ⑫こむ ⑬ころくと ⑭こをろこ
をろに ⑮さば ⑯さやに ⑰さやさや ⑱さらさらに ⑲さわさわに ⑳さゐさ
ゐ ㉑さゑさゑ ㉒しのに ㉓しののに ㉔しほほに ㉕しみみに ㉖しみらに
㉗すくすくと ㉘すぶすぶ ㉙そそ ㉚そよと・そよに ㉛たしだしに ㉜たゆた
に ㉝たゆらに ㉞たよらに ㉟たわたわ ㊱つばらに ㊲つばらつばらに
㊳つらつらに ㊴つららに ㊵ときすぎにけり ㊶とどと ㊷とどろに ㊸とををと
ををに ㊹とををに ㊺にふぶに ㊻はだらに ㊼はつはつに ㊽はららに
㊾ひしと ㊿びしびしに ①ひひ ②ぶ ③ふつに ④ほどろに ⑤ほどろ
ほどろに ⑥ほらほら ⑦ほろに ⑧もそろもそろに ⑨もゆらに ⑩ゆくゆく
と ⑪ゆくらゆくらに ⑫ゆたに ⑬ゆらに ⑭ゆららに ⑮ゑらゑらに

¹⁴ 山口仲美(2012)「奈良時代の擬音語・擬声語」『明治大学国際日本学研究』第4巻第1号

これらのうち、現代まで残る16種のおノマトペをベースに、本研究では工藤力男(1980)¹⁵や鈴木泰(1994)¹⁶を参照し、語基同士に等価的交替関係が認められる4組10語基を研究対象とする。具体的には以下の語基である。

カラ～コロ及びクル¹⁷、サヤ～ソヨ及びサワ、ハラ～ホロ、ユラ～ユル

山口氏の調査結果を見ると、上記のペア以外にも、等価的交替関係にあると考えられるペアが複数見受けられるが、それらは一部が現代語にまで残らずに消えてしまっており、上記に挙げた語基とはその様相を異にしている。よってそれらについては第七章で別途扱うことにする。

用例分析に先立ち、各章では第一節で各語基の意味派生などに関する先行研究の概要を示し、第二節で共時的観点からの考察を行う。具体的には各語基の有するコアイメージを保っていると考えられる語基派生おノマトペの代表的な形態、反復形おノマトペを取り上げ、辞書上の意味の確認、及びコロケーション調査を行う。そしてこの共時的観点からの意味分析を通じて得られた大まかなアウトラインを、第三節の古典文献の分析における指標として用いることにする。

¹⁵ 工藤力男(1980)「形状言による副詞句の形成」『万葉』第103号

¹⁶ 鈴木泰(1994)「擬声語・擬態語」『古代文学講座7 ことばの神話学』勉誠社

¹⁷ 上代語研究においては、母音交替関係にある語同士をしばしば「ー」或いは「～」で結ぶ。本研究では「～」を採択し、以後この記号を用いて二語が母音交替関係にあることを示す。

各語基の持つ意味については認知言語学的な観点からの分析を行う。まず上代文献に現れる語基の意味に関しては、派生語を元にコアイメージ(現象素)を抽出し、その中に含まれる諸々のイメージをカテゴリー別に分類する。ここでいう派生語とは、先にも述べた通り、対象となる二音節語基から派生する多様な形態のオノマトペ、動詞・形容詞・形容動詞、助詞「と」「に」を接続した副詞など、様々な語を指すが、これらのコアイメージに含まれるイメージをカテゴリー毎に分類することで、母音交替関係にある語基同士の意味の類似点・相違点について可視化できると考えられる。また中古文献以降の意味変化の様相については、ベースとプロフィールという概念を用いて説明し、イメージ・スキーマを介した意味拡張の様相についても考察する。詳しくは次章で説明する。

文献資料については、上代～近世文献については主に国文学研究資料館ホームページ内の岩波書店『日本古典文学大系』本文データベースを元に、辞書類なども随時参考にしながら用例を収集する。近代文献については新潮社『新潮文庫・明治の文豪』及び『新潮文庫・大正の文豪』CD-ROM版に所蔵されている各々40冊、計80冊を取り上げつつ、青空文庫も引用して幅広い収集を行う。また現代文献については国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス(以下、BCCWJとする)』¹⁸より用例を抽出し、各語の意味は日本語オノマトペ辞典などで

¹⁸ 『現代日本語書き言葉均衡コーパス(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese: BCCWJ)は、国立国語研究所(以下、国語研)が現代日本語の書き言葉の全

確認する。更に、NINJAL-LWP for BCCWJ(以下、NLBとする)¹⁹によるコロケーション調査なども施す。

1.4 本研究の構成

以下で本研究の構成を紹介する。

まず、第一章では本研究の導入部としての序論、及び研究対象となる語基選定のための予備知識として、上代語の語形成と意味分化に関する諸研究を紹介する。

第二章では理論的枠組みとなる認知意味論の考え方に関する諸研究の紹介を行う。そして本研究における認知意味論の理論の援用方法を示し、本研究の立場について明らかにする。

第三章では語基カラ～コロ系及びクル系派生語について論じる。語基カラ～コロ系及びクル系派生オノマトペは現代語において「回転」の意味において重なりが見られるが、上代文献においてはカラとコロが「固いものの触れ合う音」という意

体像を把握するために構築したコーパスのこと。 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>

¹⁹ BCCWJを検索するために、国語研とLago言語研究所が共同開発したオンライン検索システムのこと。 <http://nlb.ninjal.ac.jp/>

味で共通しており、その一方で語基コロとクルとの間には[回転]のイメージを介した繋がりが見出だせる。つまり上代語においては語基カラとクルとの間には直接的な共通項は見出せず、コロを介して繋がりがあ、という程度でしかなかった。これらの語基が共に「回転」の意味を有するようになったのはいつからか、また[回転]のイメージで共通する三語基に見られる差異は何かについて、派生語の意味の系統を辿りつつ考察する。

第四章では語基サヤ～ソヨ系及びサワ系派生語について論じる。現代語において「何らかの軽いものが触れ合って生じる音やさま」を表すサヤサヤ・ソヨソヨ・サワサワの語基サヤ・ソヨ・サワは、いずれも上代語において[清]というコアイメージを有していたと考えられる。しかしこの[清]というイメージは、現代語における清廉なイメージのみを表すわけではない。これは、サワサワの濁音形ザワザワが「騒々しい音」という、[清]とは全く異なったイメージを有している理由にも繋がっていくのだが、この章では語基サヤ～ソヨ及びサワの持つ[清]というコアイメージの実体と派生語に残るイメージの抽出・対比によって、各語基の意味派生の様相を辿る。

第五章では語基ハラ～ホロ系派生語について論じる。現代語において「軽く小さなものの落ちるさま」を表すハラハラ・ホロホロだが、これらの意味の核となるイメージは[散]である。特に語基ハラ系派生語は上代語において聴覚的な意味を有すると言われているが、実際の用例を通してその実情を明らかにしていく。また語

基ホロ系派生語に関しては、上代文献には用例が一例残るのみであり、中古文献においてもその意味用法はハラとほとんど変わらない。そのような中であって、語基ハラ～ホロの意味の違いを明らかにしていくためには、オノマトペ以外の派生語や、濁音形・半濁音形の派生語を含めた考察が必要になると考えられる。第五章ではこのような点を鑑み、幅広い分析を行っていく。

第六章では語基ユラ～ユル系派生語について論じる。現代語においてユラユラと類似する意味を持つ母音交替関係にある語といえばヨロヨロの方が思い浮かび、ユラユラとユルユルの間には共通点が見出しにくい。しかし、上代文献に現れる両語基の派生語の意味分析によって、これらに[緩]というコアイメージがあることが明らかになる。ただし[緩]というコアイメージ自体の抽象度の高さ、またユラの[緩]以外のイメージによって、両語基は派生語を生み出す中でその意味の乖離が激しくなり、現代語においては共通するイメージを見出しにくくなったと考えられる。上代語において派生語の多いユラ～ユルの意味について、第六章で詳細な分析を行っていく。

第七章では、本研究の本論(第三章～第六章)で考察した上代文献に現れる二音節語基派生語の様相を広く見渡し、上代語における母音の属性と意味との関わりについて考察する。上代文献には、これらの各章で扱った各語基以外にも母音交替関係にある語基のペアがいくつか抽出できる。しかしそれらのペアは一方が消滅して現代語では使われなくなり、交替関係にある語基がどちらも残るという

本論で扱った語基とは様相が異なっている。両者の違いはどこにあるのかという点について筆者の考えをまとめ、語基と派生語の意味の関連性についても考察する。また今後の研究課題についても述べる。

第八章は結論である。



第2章 理論的枠組み

2.1 はじめに

本章では、次章以降で扱う語基派生語と意味との関係を考える上で必要となる、基幹的な意義(コアイメージ)と、そこから生まれる派生的意味について考察する際の指標となる認知意味論の考え方・方法論について、先行研究を元にまとめる。本研究で取り扱う各語基の先行研究については、次章以降、各章のはじめにて触れているが、本章では個々の研究に縛られない、より包括的な研究について検討し、これに立脚して本研究の立場を明らかにしておきたい。

2.2 理論的枠組み—多義語の認知意味論的アプローチ

松本曜(2009)²⁰が指摘しているように、一般語彙においては「概念的な中心的意味は、歴史的観点から認定されるものと、いつも一致するわけではなく」(p.92)、

²⁰ 松本曜(2009)「多義語における中心的意味とその典型性:概念的の中心性と機能的の中心性 (Syntax and Semantics)」『Sophia linguistica:working papers in linguistics』57

その歴史的原義が失われることもある。1300年あまり前の上代文献に現れる語であれば、なおのことであろう。

だが前述の山口仲美(2012)が指摘しているように、上代文献に現れる65種のオノマトペに関しては現代語にまで残るものが16種もあり、「生まれてはすぐ消えと言われる擬音語・擬態語なのに、長寿の語が存在することは記憶されるべき」(pp.160-159)であろう。しかも「基幹的な意義」を共有するとされる、母音交替関係にある語基から派生したオノマトペ同士が、1300余年の歳月を経ても統合・吸収されず共存しているということは、各々の語基が互いに相容れない固有の意味を有している、ということに他ならない。

ところで、先ほどから何度も現れる「基幹的な意義」という語は、認知意味論的な立場からいうと国広哲弥(1994)の「現象素」やG.レイコフ(1993)²¹の「意義の自然なカテゴリー」(p.515)、或いは田中茂範(1987)²²の「コア」などのような語に置き換えることができる。これらはいずれも語の意味範囲を緩やかな概念として捉えており、また多義語における個々の具体的な意味は、或る概念のどこを焦点とするかによって異なる、としている点で共通している。そしてこれらの考え方を基盤に、プラシャント・パルデシ、今村泰也(2015)²³においては語の意味を「コアイメージ」

²¹ G.Lakoff, (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作他訳(1993)『認知意味論』紀伊国屋書店)

²² 田中茂範(1987)「多義語の分析:コアとプロトタイプ」『茨城大学教養部紀要』第19号

²³ プラシャント・パルデシ、今村泰也(2015)「<共同研究プロジェクト紹介>基幹型:述語構

(p.41)として図式化されている。この図で示されたイメージは非常に単純明快であり、また一つの語から様々な意味が生み出されることが予測されるものとなっていて、この図こそが多義語の意味範囲における中心的な意味、即ち「基幹的な意義」と考えられる。よって本研究では、語基派生語に共通して存在する概念としてのイメージを以下、コアイメージと称することにする。

このコアイメージは図示されたイメージであると同時に、多義語の個々の具体的な意味を結び付ける概念でもあるが、語基の意味としてこのコアイメージを提示するだけでは、あまりにも漠然とし過ぎる。そのため、コアイメージの内容をカテゴリー別に記述する作業が必要となるであろう。本研究では呂佳蓉(2003)²⁴が行ったオノマトペの多義性の分析に用いた試みに倣い、認知言語学的見地から対象となる語基の意味記述を行おうと考える。呂氏はコロコロを例に、その多義性を解明するため「ころころ転がるイベント」(p.87)のスクリプト²⁵を想定し、コロコロのICM(理想化認知モデル: Idealized Cognitive Model)の諸側面を以下のように記述している(p.89)。

造の意味範疇の普遍性と多様性 日本語と諸言語の対照研究から見えてくるもの—プロジェクトの理論的・応用的な研究成果—『国語研プロジェクトレビュー』第6巻 第2号

²⁴ 呂佳蓉(2003)「オノマトペの多義性に関するスキーマ的分析」『言語科学論集』第9号

²⁵ スクリプトとは、認知意味論におけるフレームの中でも、出来事が連続的に生じることに関する知識を言う(町田健編『認知意味論のしくみ』研究社 p.29、2002年)。

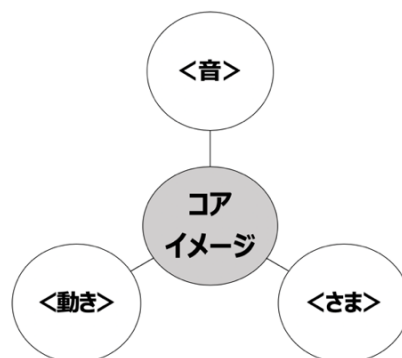
<事態の音>:摩擦音

<trのかたち>:丸みのあるもの、小さくて軽いもの

<trの動作>:移動あり

<trの様態>:回転、地面との接触、速度(速い)、連続的

本研究でも氏の分類に倣い、語基のコアイメージのカテゴリーを<音><かたち><動作><様態>の四つに区分することを考えたが、語基の中には必ずしも<かたち>あるものを描写するわけではない場合がある。また<かたち>と<様態>は<動作>という動的な視覚的意味に相對する、静的な視覚的意味を担うと捉えることが可能であるため、本研究では<かたち>及び<様態>という静的な視覚的意味を<さま>というカテゴリーにまとめ、それと対応する動的な視覚的意味である<動作>を<動き>と表記することにする。コアイメージと三つのカテゴリーの関係を図式化すると、以下ようになる。



<図 1> コアイメージと三つのカテゴリーの関係

先に、語基は動詞にも形容詞にも副詞にもなり得ると述べたが、これを上の<図 1>に重ねて解釈すると、コアイメージの<動き>の側面を焦点化して表すのが動詞、<さま>の側面を記述するのが形容詞やオノマトペの擬態的用法、<音>の側面を焦点化したものがオノマトペの擬音的用法であると言える。

さて、オノマトペの意味展開の様相については、大澤(伊藤)理英(2007)²⁶や井上加壽子(2008)²⁷らが意味拡張のプロセスを図式化しているが、特に井上氏の「統合的モデル」によるアプローチは靱山洋介(2001)の方法論を援用したものであり、本研究における意味分析及び派生の様相の検討において示唆するところの多いものである。ただし氏の視点はあくまでも共時的であり、その点では角岡賢一(2003)²⁸の述べる「『語基』からの『派生』として定義されたのは書誌的に検証される歴史的現実という意味ではなく、共時的に共通性を有する語彙項目をグループにまとめるという考え方」(p.23)に近い。では、通時的な観点からこのような図でもって意味派生の様相を包括的に示したものはあるかという、管見の限り見当たらないのが現状である。

²⁶ 大澤(伊藤)理英(2007)「オノマトペの意味拡張の事例に基づく共感覚的比喻表現の一方方向性における反例と考察」『日本認知言語学会論文集』第7号

²⁷ 井上加壽子(2008)「文脈依存オノマトペの意味拡張に関する一考察—『統合的モデル』によるアプローチ」『日本語用論学会大会発表論文集』第4号

²⁸ 角岡賢一(2003)「日本語オノマトペ語基の多義性について」『龍谷大学国際センター研究年報』第12号

2.3 本研究の立場

本研究では、これまで行われてこなかった通時的観点に基づく意味派生の様相を、認知意味論的立場から分析し、統合的モデルを援用して図式化を試みる。

具体的には上代文献に現れ、現代日本語においても用いられる語基のコアイメージを上代文献の語基派生語に広く共通するイメージから求め、それが内的拡張(母音交替・清濁交替)、或いは外的拡張(接辞・オノマトペ標識の接続)に伴い変化していく過程を明らかにする。

各語基の有するコアイメージについては、先に述べた三つのカテゴリー、即ち<音><動き><さま>に区分し表で示す。また意味変化の様相は図式化するが、これにより各々の意味の相違が、或る特定の現象のどこに焦点を当てて捉えているかという事象の捉え方の違いを明らかにできると考える。また、語の意味がどのようなスキーマを介して展開するかといったメタファーによる意味拡張や、メトニミー、接辞による意味変化など、様々なパターンが可視化されるため、他の語基派生語の意味拡張においても同様の現象が見られるのか否か、という意味派生の全体的な傾向を把握することも可能になるだろう。

第3章 語基カラ～コロ系及びクル系派生語の 意味変化

3.1 はじめに

第三章では上代文献に現れ、現代語にまで残るオノマトペのうち、コヲロコヲロの語基コロとその母音交替形カラ、そしてこれらと密接な関係の認められる語基クル派生語を考察対象として扱う。

今、筆者は「コヲロコヲロの語基コロ」と述べたが、実は上代の形状言の語構成的見地から、コヲロを語基コヲに接尾辞ロが接続したものと見る説があり(工藤力男 1980:29など)、コロを語基とすることの妥当性が問われる恐れがある。まずこの点について説明を加えておくと、このコヲロコヲロは小学館『日本古語大辞典』に「コロコロを伸べてコーロコーロとしたのであろう。」と記されており、『岩波古語辞典』においてもコヲロの項に「液体をかきまわして、凝り固まらせる時の音。ごろごろ。」とある。これらの意味記述は現代語のコロコロに通じ、山口仲美(2012)がコヲロコヲロを現代まで生き延びた語として扱ったのも、コヲロを語基コロから派生した語と考えることに無理はないと考えたからだと推測される。

一方、同氏は、コフロの母音交替形カワラも上代に現れるオノマトペとして挙げておられるが、こちらは現代まで生き延びた語のリストからは除外されている。しかし、このカワラも『岩波古語辞典』に「《コフロの母音交替形》固いもののふれあう音。からから。がらがら。」との記載があり、カワラがコフロの母音交替形、かつ現代語のガラガラ(カラカラの濁音形)の意味を有することが認められるため、これも語基カラ系派生語として想定することに問題はないだろう。

以上のことから、本章ではカワラ～コフロを語基カラ～コロより派生(カ・コの長音化)したオノマトペであると見なして論を進めることにする。因みに上代文献に現れるクルルは語構成の面から見ても語基クル派生語(反復形オノマトペ、クルクルの縮約形)であることは明らかであり、山口氏も現代まで生き延びた語として扱っておられることから、本研究ではこれも調査対象に含めることにする。

3.2 共時的観点からの考察

現代語における語基カラ～コロ系派生語のうち、カラカラ及びガラガラの意味については小野正弘(2015:50-66)に詳細な記述がある。氏はカラカラに①水分が失われた様子、②高く軽やかに響く音、の二通りの意味があることを指摘しておられ、特に②の意味、即ち現代語にも通じるカラカラの＜高く軽やかに響く音＞とい

う意味について重点的に述べられている²⁹。

氏によるとカラカラの「高く軽やかに響く音」という意味は中古文献から見られ、これに対応するガラガラ「低く重く響く音」という意味も『日葡辞書』に認められると言う³⁰。更に、中世頃からカラカラに「明るく爽やかな笑い声」を意味する例が見受けられるようになるとも述べられているが、この中古の＜音＞と中世の＜笑い声＞との関係については特に言及がない。これは氏の考察が通時的な変化に重きを置いたものであることによる限界であるとも考えられるが、認知意味論的な立場から論じること、二つの意味の関係性について明らかにできると予測される。もちろん、そのためには上代文献にまで踏み込んで語基のコアイメージを抽出しなければならぬであろう。

ところで笑い声を表すカラカラについては、中里理子(2007)³¹でも触れられており、「からからは『平家物語』の用例を初め、他の軍記物語、御伽草子等に多く

²⁹ 小野氏は①について「枯る」と関わりのある可能性について指摘されておられるが(p.50)、『日本古語大辞典』でカラを引くと「原義は幹、稈」で「空」「殻」「軽」などの諸義が生じたとある。また古事記歌謡47番歌「本つるき 末振ゆ。冬木如 すからが下樹の さやさや」における「(ス)カラ」の解釈として、直前の「冬木如」を受け「乾燥した木の枝(葉)」と見る説が多く、『日本古語大辞典』カリテの項にも「カラテの転呼…(中略)…カラ(乾)テ(手)の意で、カライヒ(枯飯)」の表記も見られることから、「幹」と「枯(乾)」とを関連づけることは可能である。ただし、オノマトペとしてのカラカラが「乾燥」の意味で現れるようになるのは近世以降であり、小野氏もまたこの意味については深く言及していないため、本研究でも「乾燥」の意味のカラカラについては特に扱うことはしない。

³⁰ 『日葡辞書』における「Guaraguarato. グワラグワラト (ぐわらぐわらと) 副詞. 石の山が崩れ落ちるさま、または、雷などの鳴る形容. 例, Caminariga guaraguarato nar u.(雷がぐわらぐわらと鳴る)」(p.314)の記述に拠ったか。

³¹ 中里理子(2007)「笑いを描写するオノマトペの変遷—中古から近代にかけて」『上越教育大学研究紀要』第26巻

見られたもので、大声で笑う声を表すオノマトペとして広く用いられていた様子がかがえる。」(p.3)とある。しかし中里氏の論考における中心的論点は<笑い声>であり、<音>と<笑い声>の関係についての記述はやはり見られない。

以上、これまでの先行研究の問題点を明らかにしたところで、語基カラ〜コロ系派生オノマトペの辞書的意味を確認してみよう。カラカラ・コロコロ・クルクルについて辞書を引くと、いずれも「回転」という意味を有している点では共通している³²。しかしカラカラ・コロコロには<音>と<さま>の両方の意味が含まれているのに対し、クルクルには<音>に関する記述がない。また<さま>に注目すると、コロコロ・クルクルには共に「丸いさま」という形状に言及した記述が見られるが、カラカラにはそのような記述は見られない。更に<動き>に関してはコロコロに「転がる」、クルクルに「回る」という意味記述があり、両語は共に「回転」という<動き>を表しながらも、その動きに微妙な差異が認められる。他方、カラカラには「乾燥」という「回転」とは別の意味が現れるが、コロコロ・クルクルにはそれに関連する意味は見られないため、これは語基カラ〜コロ・クルの本来の意味から外れるものであると考えられる。

さて、ここでNLBを用いて、現代語文献において各オノマトペと共起しやすい動詞の傾向を確認し、上記で確認した辞書的意味の記述が、現代語におけるカ

³² オノマトペ及び二音節語基派生語の辞書的意味については付録を参照されたい。以下同じ。

ラカラ・コロコロ・クルクルと共起する動詞の分布と重なることを示したい。

<表 1> 現代語においてカラカラ・コロコロ・クルクルと共起しやすい動詞³³

カラカラ			コロコロ			クルクル		
∅	～と	～に	∅	～と	～に	∅	～と	～に
(乾燥)	笑う	乾く	変わる	笑う	切る	回る	回る	なる
鳴る	鳴る	なる	する	転がる	焼ける	回す	巻く	包む
笑う	回る 音がする 音を立てる 音がする	渴く 干からびる	転がる	変わる		する	回す	
音がする		干上がる する かわく	変える	転がす		巻く	回転する	
			転がす	変える		変わる	丸める	

カラカラ～コロコロ及びクルクルはいずれも助詞の接続しない独立した形で用いられる用法の他、助詞「と」に接続する場合、助詞「に」に接続する場合の三つのパターンがあるが、<表 1>を見るといずれも「回る(回す)・転がる(転がす)」という回転に関わる動詞と共起していることが分かる。ただし辞書の記述にもあったように、コロコロは(2)「転がる(転がす)」という動詞と共起しやすく、クルクルは(3)

³³ NLBで共起しやすい動詞として提示される項目には、補助動詞も一つのカテゴリーとして設定されているが、本研究では動詞のアスペクトなどは特に問題としていないため、これを除外した。また、オノマトペが単独で出現する用例も除外している。次章以降も同様である。

「回る(回す)」という動詞と共起しやすいという点で異なっている。

(1)³⁴ マルーシュは、機織り機から顔をあげて、耳をすませた。どこからか、カラカラと、なにかを回しているような音が聞こえる。(ヴィシュバ・ノール変異譚)

(2) 床は斜めになっているので丸い物を置くとコロコロと転がっていってしまう。

(ザ・フィリピンパブ 嘘)

(3) 独楽が立ち上がってクルクルと回るさまは、生きものとしての魂の存在を感じさせてくれる。(円相の芸術工学)

(1)のカラカラは「回す」という動詞と共起してはいるが、直接係るのは「音が聞こえる」の方である。〈表 1〉を見ても分かるようにカラカラは下記の(4)「笑う」や「鳴る・音がする」といった〈音〉に関わる動詞と共起する頻度が高い。同様に、コロコロも(5)のように助詞「と」が接続する場合は「笑う」と共起する頻度が高くなる。ただしこれらの用例は、時代物の小説に多く見られる点が特徴的であり、やや擬古的な用法であると考えられる。

³⁴ 用例は各章毎に番号を振り直す。また用例における下線は筆者が施したものである。実線は該当の二音節語基及び派生語、波線はそれと意味上関わりを持つ(共起する)語、或いは句・文を指す(以下同様)。出典は、例文の後の()に示す。

(4) からからと笑う爲憲を無視して、秀郷は彼方に川口の川原を望んだ。(平将門)

(5) ころころと笑いながら、肴を置いた若い女ー吉平の母が、客に挨拶を送った。(陰陽ノ京)

他方、コロコロには「変わる・変える」と共起する例が多く見られ、クルクルにもそのような例が一部見られるが、カラカラにはそのような用例は見当たらない。

(6) それというのも人の真実はくるくる変わるもので、他人にはなかなか見当がつかないからだ。(失われた時を求めて)

(7) 「砂丘みなどが犯人だと主張してるのは、朝日さん、あなたなんですよ。そうころころいうことを変えちやいかんですなあ」(迷犬ルパンの大活劇)

以上のことから、現代語においてカラ～コロ系及びクル系派生オノマトペは、音に関わる意味や変化に関わる語との共起に関しては、その頻度に違いが見られるが、三語とも「回転」の意味を共有している点では共通していると言える。特に『日本語オノマトペ辞典』の「ものが回転するようす」に関するコラム(p.50)には、上記

三語の濁音形オノマトペであるガラガラ、ゴロゴロ、グルグルの使い分けについての言及が見られ、また語基カラ・コロ・クル派生動詞は、カラム(絡む)、コロブ(転ぶ)、クルム(包む)がいずれも「回る」動作を伴うことを鑑みても、これら三つの語基と「回転」の意味との結びつきは強いと言えよう。

では、この＜回転＞のイメージは上代文献から各々に見られるものなのだろうか。見られるとすれば、これらの語基派生語の意味は各々どのような点に違いがあるのだろうか。次節では古典文献の資料を抽出し、これら三つの語基から派生するオノマトペ及び、その派生語の意味変化について考察していく。

3.3 通時的観点からの考察

3.3.1 上代文献に現れる各語基のコアイメージ

上代文献に現れるカワラとコフロは母音交替関係にあり、かつ文法的機能の転換も見られないため等価的交替関係にあると考えられる。しかしながら、これまでの先行研究において示されたカワラとコフロの意味記述を見ると、両語に共通する意味を見出すことが難しく、両者を同じコアイメージを有する関係にあると捉えて良いのかという疑問が生じる。次の例を見てみよう。

(8) 故、鉤を以ちて其の沈みし處を探れば、其の衣の甲に繋かりて、訶和羅と

鳴りき。(古事記・中巻[大山守命])

(9) 鹽許々袁々呂々邇此の七字は音を以ゐよ。畫^かき^な鳴し (古事記・上巻[国土の修理
固成])

従来の研究によると、(8)のカワラは「訶和羅とは、甲に鉤の触て鳴たる音を云なり、…」(『古事記伝』三十三之巻³⁵)、「大山守王の屍を川から引き上げる時、鉤が其甲にかかつてカワラと音した…」(『日本古語大辞典』)など「固い物の触れ合う音」という意味を有するとされている。これは下記(10)の琴歌譜に現れるカワラにおいても同様である。

(10) 天人の 作りし田の石田は いなゑ 石田は 己男作れば かわらとゆらと

鳴る… (琴歌譜・雑歌)

一方、(9)のコロコロは記伝の「彼ノ矛以て迦伎賜ふに随ひて、潮の漸々に凝ゆく状なり」という解釈の影響を受けてか、「潮をコロコロと攪き廻して、凝り固ま

³⁵ 『古事記伝』については大野晋『本居宣長全集』を参照(三十三之巻は第十一巻所収)。

らせる意」(次田潤1927:28)³⁶、「擬声語で海水を攪きまはす時の音」(倉野憲司1974:83)³⁷のように「海水をかき回し、凝り固まらせるさまやその音」という意味に解釈されてきた。確かにこの語は後続する「画き鳴す(搔き鳴らす)」という動詞から、〈音〉を表す語であると想定されるが、海水という液体をかき回す際に立つ音をコロコロで写すこと自体に違和感があり、ましてそれが次田(同上)の述べる「恰も葛粉に熱湯を注いで、攪きまぜて葛湯を作る時などの所作を連想した」(p.28)ものであれば、なおさらコロコロという音からかけ離れてしまう。むしろ、カワラの「固いもの」という意味との重なりも認められない。一体コロコロは何を表すのだろうか。

これに関しては、荻原浅男(1977)³⁸の考察が興味深い示唆を与えてくれている。氏は、瀬戸内海にある家島(オノゴロ島であるという説がある)で発見された師楽式土器による製塩の工程における、「藻塩から作った濃い鹹水をこの土器の中で、棒状のものを使ってかき回しながら煎つめて結晶させる。その時に発する鹹水の擬声語」(p.6)がコロコロではないかと述べている。つまり(9)のコロコロは「土器の中でかき混ぜられた固い塩の結晶が触れ合って生じる音」を表しており、語基コロは「固いもの同士が接触して生じる音」という意味を介してカラとの間に共

³⁶ 次田潤(1927)『古事記新講(増訂九版)』明治書院

³⁷ 倉野憲司(1974)『古事記全註釈 第二巻』三省堂

³⁸ 荻原浅男(1977)『『塩こをろこをろに』考—『古事記』の旅から—』『駒沢短大文』vol.7

通するコアイメージを抽出できるのである。

ところで上代文献には、コヲロと同じく語基コロから派生した動詞として(11)コロロクという語が見られる。

- (11) …宇士多加禮許呂呂岐^弓、此の十字は音を以ぬよ。(うじたかれころろきて、古事記・上巻〔黄泉国〕)

(11)は「蛆が集まり声がむせびふさがっての意」(大系本『古事記 祝詞』p.64)、「膿などが流れて、ごろごろになつて居る様」(次田1927:59)、「コロコロと転がりうごめいている様子」(新編全集本『古事記』p.45)など様々な解釈がなされている。しかし先に見たように、コヲロコヲロが「土器の中でかき混ぜられた固い塩の結晶が触れ合って生じる音」だとすると、同じ語基から派生したコロロクは、音が生じる原因となる動きを焦点化したものでありながら、その背景にある物の形状などをも表しているのではないか。つまり認知領域におけるベースとプロファイルの関係が、動詞化において見られると言えるのである。

更に踏み込んで述べるのなら、語基カラ～コロは固いもの同士の〔接触〕という共通するイメージを有しつつ、その焦点となる面が元から異なっていたとも考えられる。即ち、聴覚的側面をプロファイルしたカラと、視覚的側面をプロファイルした

コロのように、母音交替による意味の分化がなされていたということである。いずれにせよ語基コロは「固いものが触れ合う音」という聴覚的意味の他に、＜動き＞としての「接触」(反復形とすることで「回転して触れ合う」という接触に至る動きまで表す)や「小さな粒状のもの」という＜さま＞まで内包した語基であると言うことができる。

ところで、この語基カラ〜コロと母音交替関係にある語基クルは、次の(12)のようにクルルという形で現れる。

- (12) 乎謀苦留留爾、其の左の髻に纏かせる五百箇の統の瓊の綸を解き（緒も回くるるに³⁹…、日本書紀・卷第一〔神代上〕）

クルルは語基クル反復形クルクルの縮約形⁴⁰と見られるが、「纏かせる」という語と共起することから「回転」の意味を有すると想定でき、語基コロ反復形コヲロコロやコロロクの表す「回転」という視覚的意味との繋がりが認められる。しかしクルはコロのように[接触]を前提としておらず、専ら回転する動きを記述するのに用いられている点に違いがあると言えよう。

³⁹ 新編全集本『日本書紀①』(p.88; 頭注4)における訓みによる。

⁴⁰ クルルのようないわゆる上代形状言のABB型は、反復形ABABの縮約形、或いはBのみが重なる一部重複形と見るのが一般的である。

以上、上代文献に現れる語基カラ～コロ系及びクル系派生語の用例を通じて抽出した各語基の意味を認知領域別にまとめると、以下のようになる。

＜表 2＞ 上代文献に現れる語基カラ～コロ及びクルのコアイメージ

	カラ	コロ	クル
コアイメージ	[接触]		[回転]
音	接触音		—
動き	接触する ←	→ 回る ← → 卷く(=回る)	
さま	固いもの	固くて小さく、丸みのあるもの	長いもの

＜表 2＞の最も大きな特徴は、語基カラ～コロのコアイメージは元来[回転]ではなかった、という点であろう。これまでの先行研究では語基カラとコロは母音交替関係にあり、しかも現代語においてはいずれも「回転」の意味を有しているため、どちらも上代文献からそのイメージを有していたと想定しているものが多い。しかし、上代文献における語基カラ～コロの中心的概念は固いもの同士の[接触]であり、それ故＜音＞と＜動き＞、即ち聴覚・視覚双方の意味を内包しうるものであった。

この点が、上代文献より[回転]というコアイメージを有し、＜音＞に関する意味を持たず、専ら視覚的意味を描写していた語基クルとの違いであると言える。

ただし、語基コロに関しては、反復形コロコロにおいて「回転」という＜動き＞によって小さく丸い形状の物同士が「接触」する、という一連のスク립トが想定され、この「回転」という意味を軸にしてクルとの間に重なりが見られる。

以上のことを踏まえ、次項では上記＜表 2＞において示された各語基の意味が現代語における各語の意味を獲得していく様相について、中古文献以降の資料を調査して明らかにすることにする。

3.3.2 中古文献以降に現れる各語基派生語の意味変化

3.3.2.1 聴覚的側面

3.3.2.1.1 語基カラ系派生語—接触音と笑い声との関係

一般的に、何かが音を立てる時には物と物との接触がなければならない。語基カラ～コロは上代文献において[接触]というコアイメージを有しているため、基本的に＜音＞の側面を表す素地を持っていたと言えるが、その意味はどのように変化していくのであろうか。まずは語基カラ系派生語の用例から見てみることにする。

(13) …馬ノ走テ行 鐙ノ、人モ不乗 音ニテカラカヲト聞ヘケレバ、…

(今昔物語集・卷第二十五)

(14) 正念次第に失しかば、矢をばかりとすて、馬より逆に落かかりたれ共、

矢にはなれてしばらく落ず。(保元物語・中〔白川殿へ義朝夜討ちに寄せらるる事〕)

(15) 鋏をかりと投げすてて頭を。地にふせ涙をながし。(用明天王職人鑑・

第二)

(16) …夢中に成った渠等の傍で、駅員が一名、密と寄って、中にもめ組の横

腹の辺で唐突にがんからん、がんからん、がんからん。(巢立の鷹・六十二)

上記はそれぞれ中古～近代文献のカラ系派生オノマトペの例であり、(13)馬の鐙を鳴らす音から(16)駅で電車の出発を知らせる鐘の音まで、いずれも固いものが何かに触れて立てる音を示す。これ以外にもカラ系派生オノマトペは様々なものの立てる音⁴¹を描写するが、常に＜固いもののぶつかって生じる音＞というイメージは保持されている。しかし中古文献には、上代文献から継承される単純な接

⁴¹ 「おしあけ方の月影に、法師ばらの関伽たてまつるとて、からからと鳴らしつつ、…」(源氏物語・賢木)、「こめをうちくくみて、ことに齒音よげに、からからとくひけり。」(古今著聞集・卷第六)、「措きをれと算盤追取り庭へくわらりと投捨てたり。」(心中天の網島・中之巻)など、各時代に語基カラ系派生オノマトペが見られる。しかも中世軍記物では矢や刀などが投げ捨てられて立てる音としてカラカラが多く用いられていたのに対し、近世文献においては鋏の音や算盤を投げ捨てた時の音などにカラリが多用されており、時代的背景を反映して音を立てる対象物の様相も推移していることが見て取れる。

触音だけではなく、[回転]によって何度も接触し続ける動きを想起させる例が既に見られる。

(17) 御くるまの装束をさながらたてさまひて、…(中略)…とりあへずとをしひら

かば、からからと、人ももふれぬさきにさしいださんがれうと、おもしろくお

ぼしめしよりたる事ぞかし。(大鏡・第三卷一)

(18) …此兄ト弟ト、俄ニ取組テ、カラカト上ニ成リ下ニ成リ爲ルヲ、…(今昔物語集・卷第二十七〔第十三〕)

カラ系派生オノマトペが車輪の音として用いられる例は『大鏡』の用例(17)をはじめ中古～現代文献にまで見られるが⁴²、車輪と地面との接触という点では上代の語基カラのコアイメージである[接触]を受け継ぎ、そこに＜動き＞として語基コロの有していた[回転]のイメージが取り込まれている。また用例(18)も、大系本に「今のボタンボタンに類する擬態語」(『今昔物語集四』p.494; 頭注60)とあるが、兄弟が取っ組み合ってもつれ「上になり下になりする」描写にはやはり[回転]のイ

⁴²「ドレちつと障子をあげよふト、表のしやうじをがらりと開、何心なく手すりへ手をかけ見おろす往来、…」(春色梅児誉美・初編卷の三)の戸車の音も、「もう十間と云う位の所まで来た時車はがらがらと音を立てて砂利道を動きはじめた。」(或る女・後編三十九)の車の音も、回転する車輪と地面との接触による音を表す。現代語においても「その車輪が回る。カラカラと乾いた音を立てて回る。逃げなければ。」(オバケヤシキ)、「私の体は、何やらベッドらしきものの上に横たえられて、ガラガラと車輪のきしむ音と共に運ばれて行く。」(華麗なる探偵たち)などに同様の例が見られる。

メージが伴っており、中古文献における語基カラ派生語には上代文献には見られなかった[回転]のイメージが添加されていることが確認できる。

ところが、語基カラ系派生オノマトペの聴覚的意味には＜笑い声＞という、[接触]や[回転]のイメージから想起されない意味もある。特に中世文献に見られるカラカラは、そのほとんどが「笑い声」を描写するものとして現れるが⁴³、『日葡辞書』でカラ系派生オノマトペを引くと、以下のように記載されている。

Caracara. カラカラ(からから) 副詞. 大笑いするさま.

Caracarato. カラカラト(からからと) 同上. ¶ Caracarato varō. (からからと笑ふ) 大笑いをする.

Garagarato. ガラガラト(がらがらと) 副詞. 振鈴, 鈴, 将棋の駒, 胡桃 (くるみ) などの鳴る音の形容.

これらを見ると、濁音形ガラガラが中古以前にカラカラが有していた「接触音」の意味を担う一方、清音形カラカラは専ら「笑い声」として用いられ、清濁により意味の棲み分けが成立していることが確認できる。では、カラカラが本来有していた「接触音」は、いかにして「笑い声」へと変化したのであろうか。

⁴³ 「快実^は是ヲ見テカラカラト打笑テ、…」(太平記・巻第二)など。

鍵となるのは、中里理子(2007)の指摘する、中世のカラカラは<象徴度の高いオノマトペ>であるという指摘であろう⁴⁴。即ち、中古までのカラカラは「固いもの同士」の接触による音」を意味していたが、その<高らかに響く>というスキーマを介して、物音が人の笑い声に転用され、「高らかな笑い声」という象徴的な笑い声を表すようになったと考えられるのである。カラカラという笑い声が中世文献において、主に威勢のいい男性的な笑い声として用いられている点も、<高らかに響く>がスキーマとして働いていることを裏付けるものとなっている。

この「笑い声」を表すカラカラは近世・近代文献にも見られるが、特に浄瑠璃の脚本などにおいては(19)カンラカンラ、(20)カッラカッラなど撥音や促音が挿入された新たな形態が現れる。このような形態変化が生じるということは、「カラカラ＝笑い声」という語と意味との結びつきがそれだけ強かったということであろう。

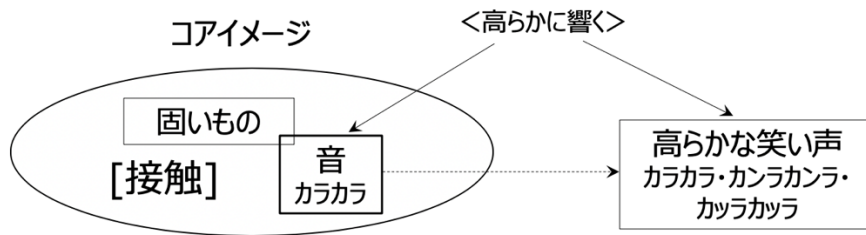
(19) はつたと睨んで申さるれば。十蔵かんらかんらと笑ひ。(出世景清・第四)

(20) 深山も裂けてほらがひの 海に入るかと恐ろし。怒れる聲にてかっらか

つらと笑ひ。(用明天王職人鑑・職人づくし)

⁴⁴ 中里理子(2007:3)は、笑い声を表すオノマトペにはその声を忠実に言語音に写そうとした<模写に近いオノマトペ>と、類似の言語音に聞きなした<象徴度の高いオノマトペ>があり、中世のカラカラは後者に該当すると述べている。

以上、語基カラの「接触音」が「笑い声」へと転化する仕組みを図式化すると、
以下ようになる。



<図 2> カラ系派生オノマトペの＜音＞に関する意味変化の様相

因みに中世～近世の歌謡や狂言の台詞には、「接触音」を表現する語として
(21)(22)のようにカラリコロリという形態が度々見られる。中世は能や狂言・歌謡の
ような舞台芸能が整備され、それに関連する口語資料も数多く残されているが、そ
の特徴として、例えば母音交替関係にある語基を重ねることで語のリズムを生かし
たり、オノマトペ標識「リ」の付加された形態が文中にて効果的に用いられたりとい
った、聴覚的に印象に残るような言い回しの多いことが挙げられる。下記の例も、
そのような表現技法の一つと言えるであろう。

(21) …島蔭よりも、櫓の音がからりころり、からりころりと、漕ぎ出して、釣りする

ところに、…（聾狂言〔船渡聲〕）

(22) ちよこちよこ打つは鍛冶屋艇子の衆、からりころりちんちんからりの槌の

意、…(松の葉・第二巻七 木やり)

また、カラリコロリは現代語では下駄の軽快な足音⁴⁵を表す語として用いられるが、そのような意味用法は(23)のように、近代文献に初出する比較的新しいものである。

(23) 私はめずらしく日本の駒下駄の音を聞きつけた。あのカラコロ、カラコロ

いう音を実に私は何年振りで聞いたろうとさえ思った。(故郷を見るまで・十

三)

以上、語基カラ系派生オノマトペの「接触音」という聴覚的意味は、音を立てる対象物こそ変化する、基本的な意味は上代からほとんど変わっていないことが明らかになった⁴⁶。ただし、中世頃からは＜高らかに響く＞というスキーマを媒体に、「接触音」から「笑い声」への意味拡張が見られる点に特徴があると言えるだろう。

⁴⁵ カラコロは『日本語オノマトペ辞典』において「多く下駄の音についていう。」とされている。

⁴⁶ 近代文献には「枯れ葉が明るい障子に飛鳥のような影を見せながら、カラカラと音を立ててかわいた髪にぶつかった。」(或る女・後編二十八)、「それから垣根の朝顔が、茶色に枯れて、引っ張るとがらがら鳴る時分、…」(二百十日・一)のように、枯れ葉の立てる音という＜固いもののぶつかり合う音＞のイメージとは異なる用法がいくつか見られる。これらは、本研究では考察の対象から外したカラ系派生語の＜乾燥＞の意味が関わっているものと考えられる。

3.3.2.1.2 語基コロ系派生語—＜音＞とそれに伴う＜動き＞

語基コロは上代文献において、＜音＞と＜動き＞とを表す複合的な用法を有していたが、中古・中世文献においては上代文献に見られるような＜音＞を表す用例がほとんど抽出できなかった⁴⁷。これは、語基コロが＜さま＞や＜動き＞など視覚的側面を担う傾向の強い語であったことの反証であるとも考えられるが、それは論を進める中で確認することにし、ここではコロ系派生語が＜音＞を表す近世文献の用例を見てみることにする。

(24) 谷の川瀬にからり。ころり。ころころと。鳴るはかじかの鳴く聲⁴⁸か。小石

流れて行く音か。いや水の泡散る。(出世景清・第三)

(25) 予は猶そこにとどまりけるに、ころころと屋根はしる音、ひしひしと庭につ

ぶる聲、よすがら落もやまず。(風俗文選・落柿舎記)

(26) 鈴をコロコロ振立ても、小男鹿の八ツの御耳所か、…(浮世風呂・四編

卷之上)

(27) 心にかかるは咽の痰のころころとなるのみ(父の終焉日記)

⁴⁷ 『角川古語大辞典』コロコロの項には中世文献『犬筑波集』の「山の奥には何笑ふらん／谷川の小石ながれてころころと」という例が見える。小石の流れてぶつかり合う音は「固く丸いものがぶつかり合って生じる音」という上代文献の意味が継承されたものであり、それに「笑い声」としてのコロコロが掛けられた表現であろう。

⁴⁸ かじかはカジカガエルのことで、高く美しい鳴き声の特徴である。

(24)(25)は近世初期の作品に見られる用例だが、(24)は蛙の鳴き声と小石の押し流されて転がりぶつかり合う音とを掛けた語、(25)は屋根に落ちた柿の転がる音を表す語であり、どちらも[接触]及び[回転]のイメージを有している。これに対して、(26)(27)はいずれも1800年代初頭の文献、即ち近世後期の作品だが、(26)鈴の音のコロコロには[接触]のイメージが残る一方、小林一茶の俳句(27)に現れる痰の絡む音からは[接触]どころか[回転]のスク립トから派生するような意味すら想定しにくく、これまでの例とはその意味を異にしているように感じられる。このような[接触]及び[回転]のイメージから乖離した意味用法を示す例は、特に『東海道中膝栗毛』に多く見られる。

(28) アイタタタタ、むしやうに腹がごろごろなる。(東海道中膝栗毛・五編追加)

(29) 時ならぬかみなり、弥次郎のうへにて「ごろごろごろごろ…」(東海道中膝栗毛・八編下)

(30) …女中がたをころころと、おもしろがらせることがゑてものでござりやす。
(東海道中膝栗毛・八編下)

(28)(29)の濁音ゴロゴロは、いずれも現代語においても見られる用法であり、どちらも腹や雲の中で鳴り響く、くぐもった音を表すという点で共通している。これはゴロゴロの語頭子音[g]が咽の奥で強い震えを持って発される音＝軟口蓋有声破裂音であることとも関係すると考えられ、よって近世文献においてゴロゴロはく奥で響くくぐもった音＞を表していたと想定できる。とすると、前述(27)の痰の絡む音も実はゴロゴロと表されていたものを、一茶が故意に清音化したと考えることもできるのではないだろうか⁴⁹。一茶が作句の際、意図的にオノマトペの清濁を交替させることがあるという事実を鑑みても、その可能性は否定できないであろう。

これに対し、女中がたの笑い声を表す(30)のコロコロは、まさしくく鈴を転がしたような＞というメタファーによる意味変化であり、辞書に記載されているようなく明るく美しい笑い声＞という象徴度の高い意味を表すと言える。「コロコロ笑う」については「やや違和感を感じる日本語母語話者もいる」(呂2003:88)という指摘もあるが、近・現代文学には往々にして見られる用法である⁵⁰。

⁴⁹ 竹下知佳(2016:18)ではツバメの鳴き声を「ペチャクチャ・ベチャクチャ」に聞きなした二つの句を例として、同じツバメの鳴き声でも聞き手側の心理に合わせて故意に音韻交替させ、書き分けていることを指摘している。

⁵⁰ 現代文学の用例については(5)参照。近代文学に見られる「笑い声」を表すコロコロには「それは穏やかな罪のない眠で、夢とも現ともなく、舷側を叩く水の音の、その柔らかな私語くような節々はコロコロコロと笑うようなのを…」(鹿狩)、「今度は三吉も、力のはいらない信之の笑い声に合わせて、喉ぼとけのあたりで、ころころと笑った。」(多情仏心・後編)などがある。後者の例は直前に「喉ぼとけのあたりで」という記述があり、ここから「喉の奥の方で響く音」を指すゴロゴロを清音化させることで、小さな音というイメージを持たせたものであると考えることもできる。

以上、語基コロの有する聴覚的意味が、＜音＞から＜声＞へと転化する様相を図式化すると、以下のようになる。



＜図 3＞ コロ系派生オノマトペの＜音＞に関する意味変化の様相

上の図からも分かるように、接触音としてのコロコロは回転による「接触」の意味を残しているが、＜鈴を転がしたような高い音＞というスキーマを介して「笑い声」へと意味が拡張することで、「接触」の意味は消滅する。また濁音ゴロゴロは[g]音の影響を受けて「くぐもった音」というニュアンスを獲得している。

3.3.2.2 視覚的側面

3.3.2.2.1 カラ系派生語－＜動き＞をプロフィール

語基カラは元来[接触]における＜音＞の側面をプロフィールした語であったと考えられるため、＜動き＞を描写する用例はあまり見られない。しかし中古文献以降、語基カラが[回転]のイメージを取り込んでからは、＜動き＞を表す用法もいく

つか見られるようになる。

(31) …善次が揚巻かいつかみ弓手へからりと打倒し、首をふつつと掻き落し、

… (頼光跡目論・第二)

(32) 手の腹に突立て右手へくわらりと引廻し。(心中宵庚申)

(33) 我朝ひらけはじまりて、天の逆鉾づんとさしこみ、からからとさがし給ふそ

のさきより出る雫が國となる。(鹿の巻筆・第五)

上記はいずれも近世文献の例であるが、(31)(32)のカラリはコロリと交替させることができ、意味としては「一回性の回転(=転倒)」を表す。また(33)は前述の(9)「国土の修理固成」条のパロディーであるが、本来コロロコロと表記されていたものをカラカラと書き改めている(=置き換えている)ことから、両者を同義と捉えていたと考えられる。即ち近世の頃には、語基カラは<動き>として「回転」の意味がより強くなっていたということになる。

ところでカラ系派生オノマトペのうち、リ接続形は近世文献において「あける」と共起する例が見られる。

(34) はるの夜のみじかく、ほどなく夜はからりとあける。(傾城買四十八手)

(35) おまへは、見なんせんからでおざんす。とふにからりと、明んした。(遊子
方言・更の体)

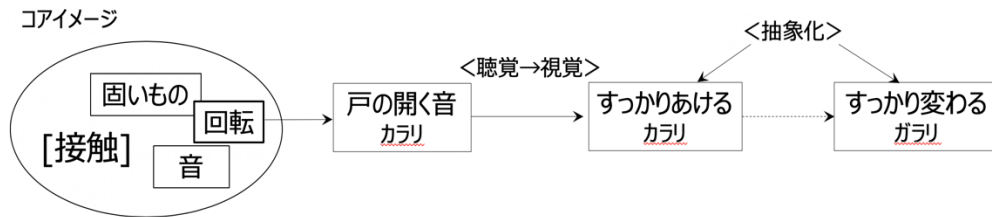
(34)(35)は「すっかり」という意味で用いられているが⁵¹、これは近世文献に多く見られる「戸をカラリとあける」という聴覚的な意味を「すっかり開ける」という視覚的な意味に捉え直す、メトニミーによる意味拡張が行われた後、更に夜が明けるさまに重ねられるという、メタファーによる意味拡張がなされた結果と考えられる。このカラリは近代文献以降、(36)のように「変わる」という動詞と共起するようになるが、現代語において「すっかり変化する」という意味を担うのは(36)カラリではなく、(37)のようなガラリのみである。他方、カラリは専ら「あける」などと共起しており、ここに清濁の相違による意味の分化が現れている。

(36) すると弟の目の色がからりと変って、晴やかに、さも嬉しそうになりました。
(高瀬舟)

(37) そう云い出した時には、態度から顔つきから口の利きようまで、がらりとう
って変った生真面目さで、…(多情仏心)

⁵¹ 近世文献では「五百両なら私が買いましよ。今がらりに渡さふ程に。」(新版歌祭文・下の巻〔油屋の段〕)、「きのふも申通り、こなたは乳ぶくろもよいによつて、がらりに八拾五匁、四度御仕着せまで。」(世間胸算用・巻三)のように、ガラリも「すっかり全部」という意味で用いられている。

以上、語基カラ派生語の＜動き＞に関する意味変化の様相を図式化すると、以下のようになる。



＜図 4＞ カラ系派生語の＜動き＞に関する意味変化の様相(カラリの場合)

語基カラは元々聴覚的な意味合いが強かったため、「戸をあける」イベントにおいても接触による＜音＞という聴覚的意味を担っていたが、その後視覚的意味へと視点移って「すっかりあける」という意味を獲得し、更にそれが抽象化して「すっかり変化した」という意味に至ったことが確認できる。

3.3.2.2.2 コロ系派生語—＜動き＞をプロフィール

前述の通り、コロ系派生オノマトペは中古文献には見られないが、中世文献においては(38)(39)のように回りながら移動する＜動き＞を表す語として現れる。

(38) …投げあげたれば、一たまりもたまず、ころころと轉び落ち、雨落ちの

石のたたきにどうど落つ。(義経記・卷第三)

(39) たとえば板屋のあられ環のはしなきがごとく、ころりころりところぶほどに、
はるかの谷にころび着く。(大名狂言・文蔵)

上代文献にも見られた語基コロの[回転]というイメージは、中世において[移動]のイメージが重なることで、様々な動詞と共起するようになる。特に、反復形コロコロはその<連続性>を背景に「転ぶ」という語と共起しやすく、リ接続形コロリは<一回性>という意味を反映して「転ぶ」の他、「こける・落つ」などと共起することが多い。更に近世文献においては<縦になっていたものが横になる>というスキーマを介し、(40)のような「寝転ぶ＝寝る」という意味へと繋がっていく。

(40) 火鉢の側へ行て、鍔瓶の湯をついでひと口のみ、横にころりと倒れて寝る。(春色辰巳園・三編巻の八)

このコロリの「寝る(寝る)」動作は、近代文献以降、語基ゴロが担うようになる。例えば(41)のように「長い時間寝転ぶさま」を表していたゴロゴロが、(42)のように「何日も何もしないで無駄に時間を過ごすさま」を表すようになり、(43)「仕事もせずに無為に過ごすさま」を表す動詞ゴロツクや、そのように過ごす人を表す名詞(44)ゴロツキという語をも生み出す。これらがいずれもコロ系ではなくゴロ系派生語で表さ

れるのは、濁音の持つマイナスイメージが、この行動に対する否定的な感覚と合致しているという背景もあると考えられる。

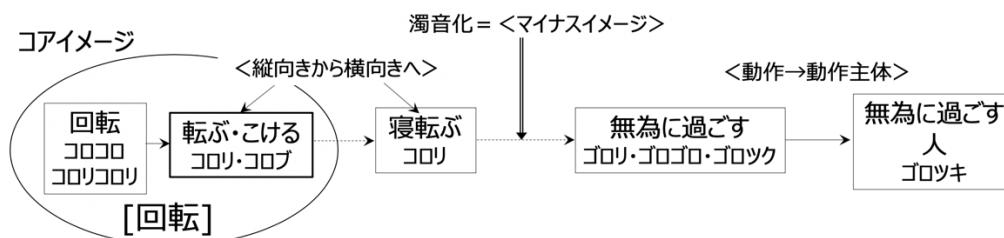
(41) うとうと熟睡することも出来ないで輾転^{ごろごろ}して長い夜を漸く明した。(土・二)

(42) その頃従兄の家には、私の二番目の兄がごろごろしていた。(硝子戸の中・十七)

(43) 女がまだ商売をしている頃から、兄はその市へ来て、何も為ることなしに、宿屋にごろついていたり、居週の温泉場に遊んでいたりにしているうちに、…(あらくれ・四十八)

(44) それにしても、あの荒川というやつは、ほんとに、ごろつきのように振舞った。(果心居士のはなし)

コロ系派生語の＜動き＞に関する意味変化の様相を図式化すると、以下のようなになる。



<図 5> コロ系派生語の<動き>に関する意味変化の様相(中世以降)

3.3.2.2.3 語基コロ系派生語—<さま>をプロフィール

先に検討したコロ系派生語の<動き>は視覚的側面の一部であるが、ここで述べる<さま>も<動き>と同じく視覚的意味を担い、実際には<動き>と不可分である場合が多い。例えば前述の(25)′(39)′などは<動き>を表しつつ、<さま>をも想起させる例だと言える。

(25)′ 予は猶そこにとどまりけるに、ころころと屋根はしる音、ひしひしと庭につ

ぶるる聲、よすがら落もやまず。(風俗文選・落柿舎記)

(39)′ たとえば板屋のあられ環のはしなきがごとく、ころりころりところぶほどに、

はるか谷にころび着く。(大名狂言・文蔵)

上記二例は「転がる際の音や動き」を表すと述べたが、それと同時に(25)′のコ

ロコロは「柿」の、(39)'のコロリコロリは「あられ」「環(丸い輪)」の丸い形状⁵²も表しており、これらの語が単に＜音＞や＜動き＞だけではなく、その＜さま＞も想起させることが分かる。逆に、以下の例文などは＜さま＞をプロフィールした用法となっており、＜音＞や＜動き＞の方が背景化している。

(45) あしにころころとなんだかひつかかるゆへ、さぐりて見れば、ほとけさまの

ごくはうなり。(東海道中膝栗毛・二編下)

(46) いぬに爰へ來よとや蟬の聲 (おらが春)

(47) 刑場は丁度墓原に隣った、石ころの多い空き地である。(おぎん)

(45)は足に引っかかるものの形状(＝丸いもの)を表す語としてコロコロが用いられており、転がる＜動き＞のイメージはさほど強くない。また近世以降の文献には(46)(47)のように名詞に接続する接尾辞的な役割へと転化したコロの例も見られるが、これは丸い＜さま＞のイメージを担うものであって、＜動き＞はほとんど想起されない。ハイコ・ナロック(2005)⁵³では文法化の規則の一つとして接尾辞化現象を挙げているが、(46)(47)もまた接尾辞化の例であり、その意味は非常に限定さ

⁵² 大系本『狂言集上』(p.200; 頭注16)に「板葺の屋根の霰のように、また円い輪がめぐりめぐってきわまることがないように…」と形状に言及する部分がある。

⁵³ ハイコ・ナロック(2005)「日本語の文法化の形態論的側面」『日本語の研究』第1巻 3号

れていると言えよう。

さて、先にコロリの持っていた「寝転ぶさま」は、近代以降語基ゴロに譲られたと述べたが、コロ自体はくさま>を中心に抽象的な意味を獲得している。下記(48)は近世文献の用例である。

- (48) こなたが今までいたづらで娘をころりとおとしたと。首をころりとおとすとは
雲泥萬里と恥ぢしむる。(嬬山姥・第二)

ここでいう「首をコロリとおとす」のコロリは、中世文献にも見られる「丸いものの転がり落ちる動き」という具象的な状況の描写である。それに対して「娘をコロリとおとす」というのは「娘を容易に手中に落とす、とりこにさせる」という抽象的な意味だが、「落ちる」の意味が抽象化されていると同時に、コロリもく力を入れずに簡単に>というスキーマを介して「あっけなさ」を表すと考えられる。近世文献のコロリには、このような例が他にも見受けられる。

- (49) 又当たればただ一服にて物の見事にころりと死ぬる妙薬。(傾城禁摺本・
三之巻 第三)

- (50) 百兩の松もころりとやけの哉 (文化句帳補遺・江戸の大火)

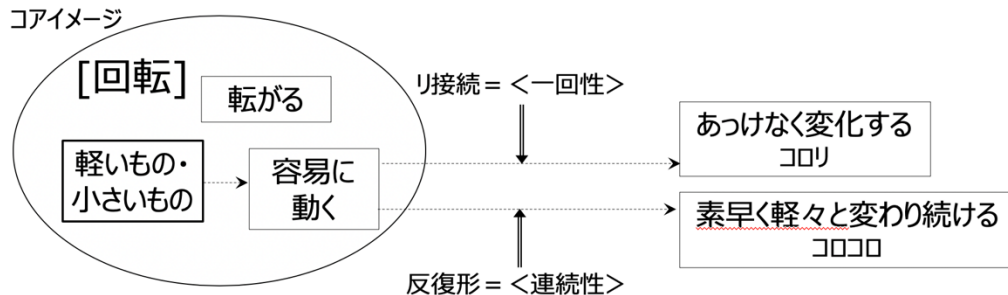
(49)はコロリの持つ「転ぶ・倒れる」のイメージが「死」へと結びついたものであるが⁵⁴、＜容易＞というイメージが、その死の「あっけなさ」を表すようになったと考えられる。また(50)は江戸の大火にあって百両の松⁵⁵が大火によって焼け野原になってしまったことを詠んだ一茶の句だが、やはりコロリに「あっけない」という意味が託されている。つまり、これらは回転の具体的な＜動き＞よりも、その動作に伴う＜軽さ＞や＜速さ＞、更にはオノマトペ標識「リ」の持つ＜一回性・瞬時性＞という特性も加わって、「あっけない」という意味を獲得したのだと言えよう。他方、(51)の場合は反復形であるため＜スピード感＞や＜軽さ＞に加えて＜連続性＞というイメージが付加され、「素早く軽々と変わり続ける」という意味を表している。

(51) たしかにね、言うことがコロコロ変わって、北歐がダメならスペインにしろとか。(添乗員世界遺産旅がらす)

以上、語基コロ系派生語の＜さま＞に関する意味変化の様相について、図式化すると以下ようになる。

⁵⁴ 現代文献にも「人は誰でもびんぴんころりと終わりたいのだ。ころりとした死には、保険医療の介入する余地はない。」(老いてこそ、始める)などに、死と結びついたコロリの例が見られる。

⁵⁵ 大系本『蕪村集 一茶集』(p.504; 頭注16)に「豪華な邸宅・仏閣のさまを象徴し得ている。」とある。



<図 6> コロ系派生オノマトペの<さま>に関する意味変化の様相

3.3.2.2.4 語基クル系派生語—<動き>から<さま>へ

現代語におけるクルクルは、回転する<動き>を描写する点でコロ系派生オノマトペと意味的に重なる。このクル系派生オノマトペは、上代文献においては「巻く」という動詞と共起していたが、中古文献においては(52)～(54)のようにクルベク(クルメク)という動詞化した用法が多く見られるようになる。特に中古～中世文献においては(54)のように「目」と共起して、「目が回る」という意味で度々用いられている。

(52) …寂照ガ前ナル鉢、俄ニ狛鷲ノ如ク^{クルベキ}クルクルト^{クルベキ}轉テ、… (今昔物語集・卷第十九〔第二〕)。

(53) …鉢こまつぶりのやうにくるめきて、唐の僧の鉢よりもはやく飛て、物をうけて歸ぬ。(宇治拾遺物語・一七二)

(54) その事に候。目くるめき、枝危きほどは、己恐れ侍れば申さず。(徒然草・

第百九段)

(54)の(メ)クルメクは、具象的なく動き>を示すのではなく、「めまいがする」という象徴的な意味を持ち、意味の抽象化が行われている。またこの語は、現代語に至ってメクルメクという一つの動詞として定着している⁵⁶。

さて、<動き>をプロファイルして記述するクル系派生オノマトペは、近世文献に至っても上代文献で見たように(55)～(58)「巻く」「包む」という語と共起する例が目立つ。特に「巻く」との共起性は強く、(57)「グルグル巻キ」のような複合名詞も形成されている。

(55) したり御馳走伊丹酒。御辞義なしにと樽のはた。ぐるりと巻し長物共。(鎌

倉三代記・第三)

(56) 始終つまらぬ五十兩くるくると引包み。(冥途の飛脚・上)

(57) ついにふたりを、ぐるぐるまきにしばりたるに、弥次郎いつこうがてんゆか

ず。(東海道中膝栗毛・六編下)

⁵⁶ メクルメクは『日本国語大辞典 第二版』に「目がくらむ。めまいがする。めくるべく。めくらめく。」と記載されているが、「恐竜の末裔が語ったのは、めくるめく変転、滅亡、死、再生、復活、混合、変容、さらなる進化、…(中略)…の物語だった。」(タイムリーパー)のような場合は、変化や展開の早さをも示す。これは、語基クルの<動き>に伴う<さま>から派生したと考えられる(詳細は後述する)。

(58) かねて相圖の小屋の者。十手提げくるくると追取巻き。(博多小女郎浪枕・下之巻)

(55)のグルリは酒樽の周りを大酒飲みが「取り囲むさま」⁵⁷を、(58)のクルクルは十手を提げた御用聞きが犯人の周りを「取り巻くさま」を表すが、これらの用例から語基クルの表す[回転]において最も核となる部分は＜何かを中心(軸)にして＞という部分ではないかと推測される。

更にこのイメージは＜周辺的である＞ことと裏表の関係にある。よってクル系派生オノマトペのうち、リ接続形グルリは(59)～(61)のように名詞化して「周り」という意味で用いられるようになる。

(59) 太神樂ぐるりはみんな油蟲 (誹風柳多留・初篇)

(60) 実際自分が眼を上げて、囲炉裏のぐるりに胡坐をかいて並んだ連中を見渡した時には、… (坑夫)

(61) 人々は運動場の南隅に、たった一つ掲げられた委員の提灯を中心にして、ぐるりを幾重にも取り捲いた。(鉄拳制裁・六)

⁵⁷ 大系本『浄瑠璃集下』(p.204; 頭注6)によると長物は蛇を指し、ここでは大酒飲みのことを指す。つまり(55)は蛇が酒樽に巻きつくように、大酒飲みが酒樽を取り囲むという二重の意味を持つものと考えられる。

この周辺の視線は回転するものの軌道を捉え、(62)のような「丸い形状」や(63)「周囲にそって巡る動き」、ひいてはスタート地点からあちこち立ち寄ってまた元に戻ってくるという(64)「回帰」の意味にまで拡張する。

(62) これを号て、でも醫者とてあたまぐるりの長羽織、見えと座なり計にて、薬

の事は陳皮もしらず。(天狗髑髏鑑定縁起)

(63) トキニお暇にして、向川岸をぐるりと廻らふ。(小袖曾我薊色縫)

(64) 色の上下の境町、見るも殊更京町から、新町より河岸の邊まで、ぐるりと

廻りてすみ町は、遊びの時を江戸町と、… (風流志道軒伝・卷之三)

以上、＜動き＞から＜さま＞への意味拡張の様相を示した。これ以外にも語基クルには「変化」を表す用法も有しているが、これも、先の＜何かを中心(軸)とした回転＞というイメージから派生していると考えられる。即ち、(65)のような「物を一回転させるさま」や、(66)のような体の向きなどを「反転させる」という具体的な動きは、対象物を見ている側の視点に立てば「表が裏へと変化した」と受け止められ得るのであり、これが抽象化されて(67)のように変化を表す用法へと拡張したのである。特に(67)反復形クルクルの場合、「反転が繰り返される」という意味から「変化が繰

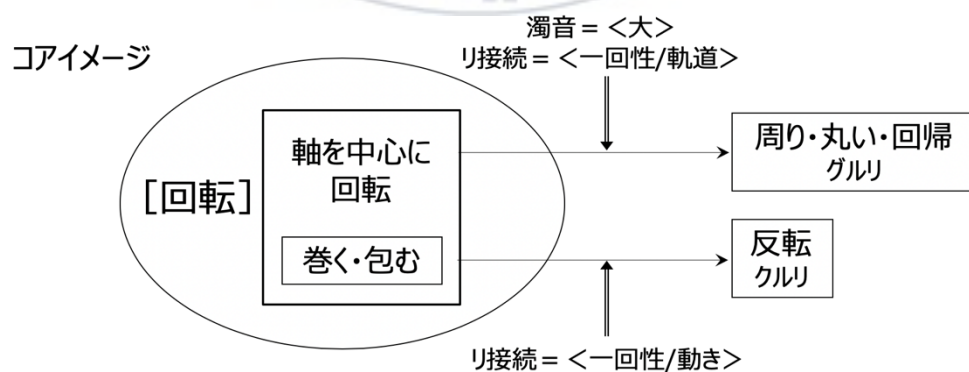
り返されるさま」を描写しており、更に語基クルのベースにある＜素早さ＞が影響
 することで、その変化が絶えず、めまぐるしく行われていることが示されている。

(65) …真個に、人死が出来ようも知れぬぜな」と襟の処で、塗盆をくると廻
す。(歌行燈・九)

(66) 野々宮さんは何とも云わなかった。くると後を向いた。(三四郎・八)

(67) 大人と少年が同居しているようにクルクル変わる表情は、どれも生き生き
 としていて、目を奪われそうだ。(ラインに乗って会いに来て)

語基クル系派生語の＜動き＞からの意味拡張においては、語基クルが上代か
 ら専らく軸を基準とした回転＞というベースを持っていたため、意味の拡張もそれ
 に沿ったものとなっていることが分かる。これを図式化すると、以下ようになる。



<図 7> クル系派生語の＜動き＞に関する意味変化の様相

3.3.2.2.5 語基クル系派生語—くさま>をプロフィール

語基クルには語基コロが有していたような「接触音」という意味はなく、専ら回転する<動き>を叙述する役割を果たす。しかし、<動き>には具象的な動きに付随する<速度>や<滑らかさ>など様々な要素が伴うものであり、クル系派生語においても付随する要素を中心に、抽象的意味が獲得されている例が見られる。

例えば中古文献に現れる用例(68)のクルクルは「滞りのないさま」という意味であるが、これは語基クルの持つ回転の「勢いよく回るさま」という<速さ>の側面から拡張したものと推測される。

(68) 返す返すおなじ所をよむに、法師はことわり、男も女も、くるくるとやすらかに讀みたるこそ、… (枕草子・一五八)

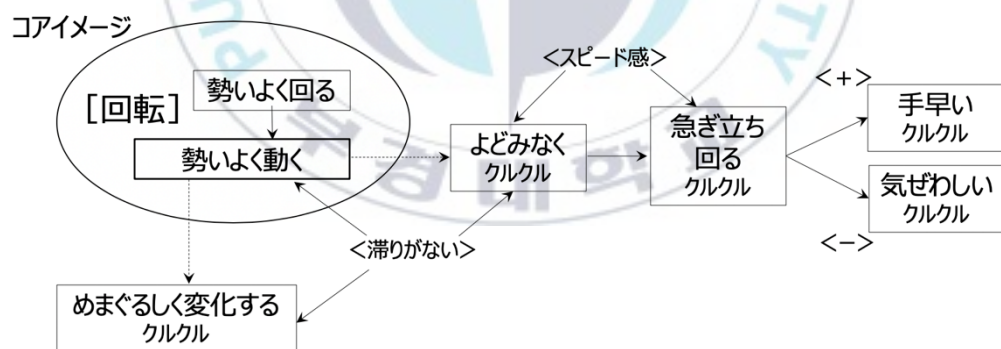
また中世文献には、用例(69)のようにクルメクが「急ぎ立ち回るさま」を表す用例も見られるが、これは(68)の「滞りのないさま」という意味から派生したものと考えられる。この「急ぎ立ち回るさま」は文脈によって(70)「手早く行うさま」というプラスの意味にも、(71)「慌ただしく、せわしくふるまうさま」というマイナスの意味にも転じる。

(69) この女、暁たんまうけなどもしにやりて、いそぎくるめくがいとほしければ、… (宇治拾遺物語・一〇八)

(70) 「其は易ひ事で御座候。是へ下されよ」とて、くるくるひきむしり、毛をばをしよせて、… (きのふはけふの物語・上)

(71) 始終忙しそうに、くるくる働いている川西は、夜は宵の口から二階へあがって、臥床に就いたが、… (あらくれ・八十二)

クル系派生語の<さま>に関する意味変化の様相を図式化すると、以下のようになる。



< 図 8 > クル系派生語の<さま>に関する意味変化の様相

第4章 語基サヤ～ソヨ系及びサワ系派生語の 意味変化

4.1 はじめに

第一章で触れた山口仲美(2012)の調査にて抽出された、上代文献に見られ現代語まで生き延びているオノマトペ16種を見ると「さや、さやさや、さらさら、さわさわ、すくすく、そよ」のように語頭がサ行のオノマトペが多い。中でもサヤとソヨが母音交替関係にあること、またサワサワが『日本古語大辞典』において「サヤサヤの転呼」とされていることから、語基サヤ～ソヨ・サワの間には意味の上で何らかの共通するコアイメージが存在することが想定される。

語基サヤ～ソヨ系及びサワ系派生語については、古く春日和男(1950)⁵⁸に詳細な記述が見られるが、氏はここで「擬音擬態が意識の上からも混交しているのは、サヤサヤの系統にある語が、擬音より擬態へ変化しつつあつた証拠」(p.64)であると述べている。しかし、語基の意味を一つのイメージとして捉える認知意味論的な立場から見ると、擬音語・擬態語が意識の上で混交しているのは、至極当然のこと

⁵⁸ 春日和男(1950)「古事記の擬音語」『福岡商大論叢』第1巻 第3号

だと言えよう。なぜなら語基の意味というのは<音>も<さま>も包括したイメージの総体であり、擬音語も擬態語もそのイメージから同時発生的に現れたものと考えられるからである。よって<音>と<さま>の混交を、擬音語より擬態語への変化の過程と捉えるのは語基の意味の実態に即したものとは言えず、ここで問題にすべきは、混交している<音>と<さま>に相通じるコアイメージは何か、という点であると言える。

ところで、春日氏の他、山口仲美(1982)⁵⁹や伊藤理英(2005)⁶⁰でも語基サヤ～ソヨ系派生語の意味についての考察が見られるが、山口氏は源氏物語に現れるソヨソヨが「小さいけれど美的でない物音」という「マイナスの意味で使用されている。」(p.315)と述べている。また伊藤氏は、中古文献に現れる語基ソヨ派生動詞ソヨメクについて「第1の意味拡張として、風や衣擦れなどが《そよそよと音がする》という意味から、《そよそよという音を立てて揺れ動く》という意味に転じる。…(中略)…第2に、複数の人がソヨメクと言う場合に《にぎやかな》動作が表される。」(p.307)と述べており、中古においてソヨ系派生語には「マイナスイメージ」や「にぎやかさ」という意味が存在していたと推定しておられる。しかし現代語のソヨソヨには、「にぎやかで騒がしい」イメージはなく、またマイナスイメージも感じられない。

⁵⁹ 山口仲美(1982)「源氏物語の語彙—象徴詞を中心に」『講座日本語の語彙 第3巻—古代の語彙』所収

⁶⁰ 伊藤理英(2005)「中古『～メク』におけるオノマトペの比喩による意味拡張について」『人間文化論叢』第7巻

むしろ現代語においてそのような意味を担っているのはサワ系濁音オノマトペのザワザワの方であり、中世以降ソヨソヨの意味がサワサワ、ひいてはザワザワの方へ転移したと推測される。しかし、これほどかけ離れた意味を持つ両語の間に共通するコアイメージがあるとは考えにくい。

以上のような古典文献と現代文献との間における意味の乖離を解消すべく、まず次節で共時的観点からこれらの語基派生語の意味を概観し、第三節以降の上代～現代文献分析のための指標を立てることとする。

4.2 共時的観点からの考察

本章で扱う語基サヤ～ソヨ系及びサワ系派生反復形オノマトペ、サヤサヤ・ソヨソヨ・サワサワを辞書で引くと、三語には「何らかの軽いものが触れ合って生じる音やそのさま」という共通の意味が存在することが確認できる。

しかし、ソヨソヨ・サワサワの意味が「風の吹く音やさま」に及んでいるのに対し、サヤサヤは「音を立てている側」の＜動き＞と＜音＞に関わる意味が記述されているのみであり、「音を立たせる側」に関する言及がない。ここから三つの語に関して「サヤサヤ⇔ソヨソヨ・サワサワ」という対立関係を想定することができるだろう。

ただし、サヤサヤに「清澄な音」、サワサワに「さわやかに風が吹くさまや音」を表すという意味があるところを見ると、サヤサヤのみを特異な語として取り扱うのは早計である。「清澄でさわやか」というイメージを有しているという点では、サヤサヤとサワサワの方が近く、逆にソヨソヨにはそのような意味は見られないため、「サヤサヤ・サワサワ⇔ソヨソヨ」という対立関係が成立すると考えられる。つまり、サワサワは「サヤサヤ⇔ソヨソヨ」の意味的対立関係の間で、或る条件下ではサヤサヤ寄りの意味を有し、また或る時はソヨソヨ寄りの意味を持つという形を取っていると見られるのである。

では実際の用例を確認しよう。現代文献においてサヤサヤ・ソヨソヨ・サワサワが各々どのような用法を持ち、どのような語と共起しやすいかを検討するため、NLBを用いて上記三語のコロケーション調査を行った。以下に、その結果を示す。

<表 3> 現代語においてサヤサヤ・ソヨソヨ・サワサワと共起しやすい動詞

サヤサヤ		ソヨソヨ		サワサワ	
∅	～と	∅	～と	∅	～と
うたう 吹く 揺らぐ	揺らす	揺れる	吹く	揺れる	音を立てる
	そよぐ 音を立てる 振る 澄む	する 吹く	なびく ならす 包む 流れる	する 撫でる	鳴る 揺れる 動く 渡る

サヤサヤ～ソヨソヨは出現頻度自体がそれほど高くないため、共起する動詞も限定されているが、抽出された用例を俯瞰すると共起する動詞云々よりもまず、名詞「風」との結びつきの強さの方が注目される。

- (1) 心地よい微風が道路沿いの樹木をさやさやと揺らす。(ガンパレード・マーチ 5121小隊九州撤退戦)
- (2) 梅が咲くとその香りが部屋の中にも漂ってくるし、風が吹くと竹がさやさやとそよぐ音が聞こえてくる。(知的生活・楽しみのヒント)
- (3) 吹雪に凍てついた体をポカポカのオンドルで温めながら、菌のしびれるような冷麺を食べれば、五臓六腑は冷蔵庫のようでも腹の中にはそよそよと春風が吹く。(コムギの食文化を知る事典)
- (4) 宏遠な夏木立をたゆたう風が、そよそよとアヤニを包む。(真夏の夜の夢)
- (5) 風が葉を揺らす音だけがさわさわと響く。(カーマロカ)
- (6) それがこの屋敷を目にしたとき、心にさわさわと風が流れるような気がしたのだ。(神様がくれたプレゼント)

上の例はいずれも「風」と共起する例であり、動詞も「揺らす・そよぐ・吹く」のように風の動きやそれに伴う作用を示すものが多い。特にソヨソヨは、NLBにおいて

抽出されたほとんどの用例が「風」と共起しており、用例(4)で本来風の作用との関連性が薄い「包む」という動詞と共起しうるのも、名詞「風」との結びつきの強さがあるってこそのものだと考えられる。またソヨソヨは、サヤサヤやサワサワほど擬音的ではなく、風(或いは風によって動かされる対象物)の動きの柔らかさを、擬態的に表す意味合いの方が強いようである。

他方、サヤサヤは軽いものが動いて立つ音そのものを表す側面が強い。よって「風」との共起性はそこまで強くはなく、下記(7)のように音を立てる主体が簾であっても用いることができる。また(8)サヤグという派生動詞が音を立てる意味を表すことから、サヤが聴覚的側面を担う語基であったことが推測できる。他方、辞書に記述のあった「清澄な」という意味を有する(9)は、歌集に収められているという点が注目される。(8)のサヤグもBCCWJの調査では韻文レジスターにて抽出されており、全体的に韻文的なイメージを有する語であると考えられる。

(7) …うしろ簾がさやさやと巻きあげられると、内から玉藻の白い顔があらわれ

た。(玉藻の前)

(8) 雪溪のさやぐ音のみ小屋泊まり (増補現代俳句大系)

(9) かかる矜持のつまらなさ屋さくら湯はさやさやと澄み (増補版現代短歌全集)

では、サワサワはどうであろうか。サワサワの用例の多くは、上記(5)(6)のように「風で物が揺れるさま」を表すが、風によって動き、音を立てる側に焦点が置かれている点でサヤサヤに近い。そのため「音を立てる、鳴る」というような音を表す動詞と共起することが多いが、中でも「響く」という動詞との共起は他の二語には見られないことから、サワサワは他の二語より大きな音を表すと考えられる。更にサワサワの濁音形ザワザワや、語基サワ派生動詞サワグの用例から、この語基に「大きな音」という意味があることが、より明確になるであろう。

(10) アレキサンドリアの街が近づく、バスの中もざわざわしはじめた。(砂の子)

(11) 三十分ほど経ってであろうか、甲板の人たちが騒ぐ方を見ると、いたいた！アザラシである。(北ドイツ＝海の街の物語)

その一方で、サワサワには(12)のように「不安や落ち着かない心情により鳥肌の立つさま」を表す用例が見られる。このような意味用法も、他の語基には見られない特徴的なものであると言える。

(12) その赫と青の組み合わせは、人の体内を走る静脈と動脈を思わせて、

辻圭子の横腹あたりの肌をさわさわと粟立たせた。(赫い月照)

以上、共時的観点から三つの語基派生語の意味を大まかに捉えたと、まず、語基サヤ～ソヨ系及びサワ系派生語はいずれも「風」と共起しやすい傾向があるが、中でもソヨは風との共起性が強く、「風の吹くさま」を表す語として定着している。これに対して、語基サヤ・サワはどちらも聴覚的意味の方が強く、特にサワはサワグという派生動詞からも分かるように、サヤより大きな音を表すと考えられる。ただし、サワには不安で落ち着かない心情を表すサワサワという用例もあり、必ずしも聴覚的意味のみを担うとは言えない。またサヤサヤに見られる「清澄な音」という意味もサワサワには見られず、この点にも両者の違いが現れている。

次節では上代文献に見られる各語基派生語を元に、語基サヤ～ソヨ及びサワの有するコアイメージを求めることにする。

4.3 通時的観点からの考察

4.3.1 上代文献に現れる各語基のコアイメージ

前節で検討したサヤサヤ・ソヨソヨ・サワサワの意味用法の違いを踏まえ、本節では時系列に沿って、サヤ～ソヨ系及びサワ系派生語それぞれの意味の変遷を辿る。本節におけるポイントは、先に確認したサヤサヤ⇔ソヨソヨという母音交替形の対立関係と、その間で揺れるサワサワの位置であるが、上代文献においては記紀と万葉集においてサヤと対応する語基が異なるため、文献毎に項を立ててその対応関係を考察し、最後に上代文献における三語基の関係の全体像をまとめることにする。

4.3.1.1 記紀に見られる語基サヤ～サワ系派生語の対応関係

ここではまず記紀に現れる用例について検討する。

(13) 本つるき 末振ゆ。冬木如 すからが下樹の さやさや (古事記・中巻、歌謡47番歌)

(14) 觸れ立つ 漬の木の さやさや (日本書紀・巻第十、歌謡41番歌)

上記(13)(14)のサヤサヤは、古くから多々の研究者によって様々な解釈がなされているが、それらはおおそ三つに大別される。即ち、葉擦れの音、(視覚的・聴覚的)清爽感、揺れ動くさま、の三つである。例えば『古事記伝』三十三之巻では「○佐夜佐夜は、清々なり、【上句よりのつゞきは、木葉のさわぐ音、歌の意は、清々にて、意別なり、】」(p.493)として、(13)のサヤサヤを木の葉擦れの「騒」がしい音と、大刀の鋭利で「清」爽なさまとを掛けた語と解釈している。この説は広く支持されたようだが、土橋寛(1972)『古代歌謡全注釈 古事記編』⁶¹では「この語は一般的には、擬声語、または音や色のさわやかな形容であるが、ここは刀の鞘や下木の揺れ動くさまを形容した擬態語と見るべきである。」(p.212)と述べ、上の解釈を否定している。用例(14)についても、同上(1976)『古代歌謡全注釈 日本書紀編』⁶²では「前半の琴の音の形容としては清亮の意であるが、同時に後半のナヅの木のゆらゆらと揺れ動く形容でもある。」(p.152)とし、「音の清澄さ」と「揺れ動くさま」という擬態的意味を兼ねたものと解釈しているが、これを騒ぐ音の擬音的表現と見る説⁶³もある。他方、風俗歌に現れる(15)サヤは「見る」と共起しており、サヤが視覚的な意味を有していたことを示唆している。

⁶¹ 土橋寛(1972)『古代歌謡全注釈 古事記編』角川書店

⁶² 土橋寛(1976)『古代歌謡全注釈 日本書紀編』角川書店

⁶³ 大系本『日本書紀上』(p.378; 頭注6)には「サヤサヤは、音の大きく立つ意。擬声語。」とある。

(15) 甲斐が嶺を さやにも見しか や 心なく 心なく 横ほり立てる さやの中
山 (風俗歌・甲斐)

このように見ると、語基サヤ派生語は「清澄なさま」であったり、「騒がしいさま」であったり、「揺れ動くさま」であったりと、その解釈が研究者毎、文脈毎に異なっていて定まらない⁶⁴。ただ、春日氏(1950)が、古事記に現れるサヤサヤの例を「擬音擬態の兩意義を有する象徴語を以て修辭法に利用した」(p.66)のものであると述べているように、オノマトペがその特性上、視覚的・聴覚的に強い結びつきを有していることを考えると、上記の用例はいずれも語基サヤの持つコアイメージを、文脈によって聴覚的、或いは視覚的に切り取ったに過ぎないと捉えることができる。これは、語基サヤ派生動詞サヤグ(四段)とサヤム(下二段)の意味の現れ方の違いからも推定できる。

(16) 栲衾 さやぐが下に 沫雪の (古事記・上巻、歌謡5番歌)

⁶⁴ 他にも大系本『古代歌謡集』古事記歌謡補注においては、(13)を「このサヤサヤは恐らく、冬の木の下木が揺れ動く形容」(p.166)と視覚的に解釈している。(14)についても『日本書紀通釈 第三冊』には「佐柳佐柳は。亮々にて。此琴の音の鏗鏘なるを云へるなり。…(中略)…浸漬之木の潮に触れてさわく音なり。」(p.2072)とあるが、新編日本古典文学全集『日本書紀①』では「サヤは冴さユユで、視覚的な清澄感を表す語。聴覚のユユと視覚のサヤの合一した爽快感を歌う。」(p.494; 頭注17)とされている。

(17) 豊葦原之千秋長五百秋之水穗国は、伊多久佐夜芸弓 此の七字は音を以ゐよ。

(古事記・上巻〔葦原中国の平定〕)

(18) 是先身を潔^{さやめ}て稍に神に近づく所なり (日本書紀・卷第二十九〔天武天皇〕)

サヤグは(16)のようにサヤの聴覚的側面を動詞化(音→音を立てること)したものと考えられ、その騒がしさは(17)のように「世間が騒がしく、平穏でないさま」をも表す。一方で(18)サヤムは視覚的な「清澄さ」を表すのみで、聴覚的な意味は示していない。それでも(16)～(18)は全て語基サヤから派生した動詞であり、上記の例から、同一語基から派生した全く異なる意味を持つと考えられる動詞のペアも、その語基の持つコアイメージの捉え方の相違によって区別されたに過ぎないと考えることができる。

では、語基サヤの有するコアイメージとは何か。これについて検討する前に、記紀においてサヤサヤのように「清」と「騒」の意味を掛けたものと解されている、もう一つの語、サワサワの用例について見てみよう。

(19) …千尋繩打ち延へ、釣為し海人の、口大の、尾翼鱸、佐和佐和邇、控き

依せ騰げて… (古事記・上巻〔大国主神の国譲り〕)

(20) …木楸持ち 打ちし大根 さわさわに 汝がいへせこそ… (古事記・下巻、
歌謡63番歌)

『古事記伝』三十六之巻⁶⁵を見ると「和と夜と通ひて、佐和々々は、佐夜々々と同じ、さて其を喧擾の意に取て、…(中略)…清々と喧擾とを通はして続けたる例」(p.111)とあり、サワサワが「清々」と「喧擾」という同音異義の掛詞であるとされている⁶⁶。これはまさにサヤサヤを「清」と「騒」の二つの意味で捉える解釈に通じ、このことから、記紀においてサヤサヤと等価的交替関係を成すのはサワサワであったと想定できる⁶⁷。

なお『時代別国語大辞典 上代編』及び『古事記注釈』第四巻(p.174)では用例(19)(20)を労働歌と見て、大根掘りの女たち、或いは漁師らが「騒々しく立ち働いているさま」としてと解釈している。また(20)のサワサワを「大きな鱸を引き寄せる

⁶⁵ 『本居宣長全集 第十二巻』所収

⁶⁶ 土橋寛(1972)『古代歌謡全注釈 古事記編』ではこの一文に関し、「サワサワニに清々(サヤサヤ)の意と喧擾(サワガシイ)の意とがあつて、その二つの意味を掛けたものというのか、それともサヤサヤは清々、サワサワは喧擾の意で、その二つの語を掛詞としたものかどうかははっきりしないが、どちらも認めてよい説である。」(p.253)と述べている。

⁶⁷ 山口(1985)が「子音の部分が入れ換わるならば、語彙的同一性が保証されにくくなる。」(p.164)と述べているように、語彙的同一性を支えるのは基本的には子音構造である。語基サヤ～サワはj～w/という半母音交替関係にあり、厳密には母音交替関係にあるとは言えないが、両語基が共通の意味を持ち、またサヤグ～サワグのように同じ意味内で動詞化する点でも語彙的同一性が保たれていると考えられ、等価的交替関係にあると言えることができる。

時に生じるザワザワという音」と見る説もあり⁶⁸、サワサワはサヤサヤより聴覚的な意味合いが強調された語、或いは大きな音を表す語であったとも考えられる。これは、前節で見た現代語におけるサヤサヤとサワサワの相違に通じるものと言えるだろう。

以上のように、記紀においては語基サヤ～サワ系派生語が「清」と「騒」の意味を掛けた語として用いられていたと捉えられているが、この二つの意味にどのような繋がりがあるのか、単なる同音異義語なのかという点に疑問が残る。これについては次項の万葉集における語の意味の分析を通して、検討する。

4.3.1.2 万葉集に見られる語基サヤ～ソヨ系派生語の対応関係

ここでは万葉集に現れる用例について検討する。まず記紀にも見られる語基サヤ派生語から見ていく。

(21) わたつみの 豊旗雲に 入日見し 今夜の月夜 さやに照りこそ (万葉集・卷一15)

(22) 小竹の葉は み山もさやに 乱るとも 我は妹思ふ 別れ来ぬれば (万葉集・卷二133)

(23) 蘆辺なる 荻の葉佐夜芸 秋風の吹き来るなへに 雁鳴き渡る (万葉集・

⁶⁸ 大系本『古事記 祝詞』(p.125)及び新編全集本『古事記』(p.113)参照。

用例(21)(22)ではサヤが「清」の訓として用いられているが、(21)サヤがはっきり明るく照る月あかりを表現しているのに対し、(22)は「山もざわめくばかりに」と解釈されており⁶⁹、「清」の持つ意味合いとはかけ離れているように感じられる。逆に(23)サヤグ(四段)は「荻の葉音のするさまを描写したもの」という聴覚的意味で解釈されているが、秋風により立つ葉音が必ずしも「清らか」であるとは限らない。

それ故、と言うべきか『万葉辞典』においてサヤは「さや(清)」と「さや(さや)」の二つの見出し語が掲載されており(p.265)、また山口佳紀(1985)でも「清」と「騒」の二つの漢字が当てられ、別項目として扱われている(p.237)。前節の記紀の解釈においても、サヤサヤを「清」と「騒」の掛詞とする解釈が見られたが、万葉集に現れる語基サヤ派生語に関しても、やはりこれを二つの異なる語(同音異義語)と捉える立場に立つものが一定数見られる。

しかし、(21)に見られる[清]の「はっきりしている」という視覚的イメージを、聴覚的な面から捉えなおしてみると、(22)の[清]は「(本来あまり聞こえないはずの)山の葉の触れ合う音が、はつきりと聞こえるほど」という意味となり、これもまた[清]のイメージに含めることができるのではないだろうか。即ち、語基サヤのコアイメージ

⁶⁹ 大系本『万葉集一』補注(p.341)参照。

を[清]と想定することで、視覚的であれ聴覚的であれ、或る状況に対する受け手の主観的な[清]のイメージがそこに託されと考えられるのである。

サヤのコアイメージ＝[清]であるとすれば、記紀に見られた(13)のサヤサヤも「清」と「騒」という同音異義語の掛詞ではなく、サヤサヤという一つの語の持つ[清]というイメージが「刀」と「葉擦れの音」の二つの言葉に掛かる、いわば一語二役⁷⁰の用法として捉えることが可能である。同様に、記紀においてサヤと等価的交替関係にあったサワサワの(20)の例もまた、[清]の視覚的側面(＝大根の白さ)と聴覚的側面(＝大根の葉同士の触れるはっきりとした音)を表すと言えるだろう。

ところが万葉集においては、このような意味でサワサワというオノマトペが用いられる例が見当たらない。万葉集でサワサワに代わり[清]の聴覚的イメージを担うのは、サヤと母音交替関係にある語基ソヨ派生語である。

(24) 旗薄 本葉もそよに 秋風の 吹き来る夕に (万葉集・巻十2089)

(25) さ夜ふけて 妹を思ひ出 敷栲の 枕もそよに 嘆きつるかも (万葉集・巻

十二2885)

⁷⁰ 尼ヶ崎彬(1988)は、柿本人麻呂の「足曳の山鳥の尾のしだり尾のながながし夜を独りかも寝む」を引き合いに、「ながながし」のような「同じ語に二つの役(ここでは空間と時間の長さを指す:筆者註)を演じさせる」(p.134)ものを「一語二役」と呼んでいる。

語基ソヨがサヤ同様[清]というコアイメージを有しているとする、用例(24)は「旗薄」(旗のように穂が風になびいているススキ)の葉音が「はっきりと聞こえるほど」という意味として捉えることができる。用例(25)も枕の動く音だけがはっきり聞えると詠むことで、侘しい一人寝の静けさが一層引き立つと言えよう。つまり万葉集に見られるソヨも、静寂の中で際立つ、小さくてもはっきり聞える音としての[清]のイメージに収斂されるのである。

因みに万葉集には、語基サワ派生動詞サワクが度々現れるが、(26)サワクは鳥の声がはっきりと聞こえる、と解釈できる。だが、(27)は天の川の「清けし」音に対する波の音の騒々しい音、(28)は狩人らの「ざわざわと入り乱れるさま」を表しており、これらは「はっきり聞こえる音」をマイナスに捉えた「騒々しい音の立つさま」という意味を担う用法となっている。

(26) み吉野の 象山のまの 木末には ここだもさわく 鳥の聲かも (万葉集・卷六924)

(27) 天の川音清けし彦星の秋漕ぐ船の波のさわきか (万葉集・卷第十2047)

(28) あしひきの 山にも野にも 御狩人 得物矢手挟み 散動^{さわ}きたり見ゆ (万葉集・卷六927)

以上のことから、上代文献に見られる語基サヤ～ソヨ・サワはいずれも[清]というコアイメージを有し、視覚的側面から見ると「ある物が明るく澄んでいて、輪郭がはっきりしたさま」を、聴覚的側面から見ると「清澄な音」或いは「はっきりと聞こえる音」を表すと言えるであろう。また、その聴覚的側面を記紀では主にサワ(サワサワ)が担い、万葉集では主にソヨが担うという位相差が見られる点にも特徴がある。更にサワクという動詞的用法には、「はっきり聞こえる音」から転じた「騒々しい音」という意味合いが既に上代文献から見られることも明らかになった。

以上、本項での考察をまとめると、上代における語基サヤ～ソヨ・サワの意味は、以下のようになると考えられる。

<表 4> 上代文献に現れる語基サヤ～ソヨ及びサワのコアイメージ

	サヤ	ソヨ(万葉集)	サワ(記紀)
コアイメージ	[清]		
音	はっきり聞こえる音		
動き	揺れ動くことで 触れ合う動き	葉の擦れ合う動き	騒がしい音を出す・ 大勢で動く
さま	はっきりとして 明るく澄むさま	—	明るく清々しいさま・ 騒々しさ

さて、本項で考察した上代文献に現れる三つの語基の意味は、前節で確認した現代文献の用法とかけ離れていると言わざるを得ない。なぜなら、現代語において例えばサヤサヤは「かすかな音」を表すものであり、視覚的な[清]のイメージは担っておらず、また語基ソヨ派生語も「風」との結びつきが強いため、それ以外の物音にはほとんど用いられないからである。このような意味の限定とも言うべき変化は、いつ頃から現れるのであろうか。次項では中古以降の文献に現れる各語基派生語について考察していく。

4.3.2 中古文献以降に現れる各語基派生語の意味変化

前項で検討した各語基の意味の相違を踏まえ、本項では[清]という共通のコアイメージを有するサヤ～ソヨ系及びサワ系派生語が、中古以降どのような意味変化の過程を辿ったかについて考察していく。

4.3.2.1 聴覚的側面

4.3.2.1.1 語基ソヨと「風」との結びつき

ここではまず、聴覚的側面を担う語のうち、現代語において「風」との結びつきが強い語基ソヨ派生語について考察する。先に語基ソヨは上代文献において[清]

の聴覚的側面を描写すると述べたが、中古時代にはその意味用法が定着したため、様々な形態的バリエーションを持ちうるようになったと考えられる。中古文献以降の用例を下記に示す。

(29) ひとりしていかにせましとわびつればそよとも前の萩ぞこたふる (大和物語・百四十八)

(30) 西ノ臺ノ塗籠ヲ開テ、人ノソヨメキテ参ル気色ノ有ケレバ、… (今昔物語集・卷第二十七〔第二〕)

(31) そよそよとさうぞき、汗衫著たる人、いと若う清げなる、十餘人ばかり物語して、… (落窪物語・卷之二)

(32) ものはいはで、御簾をもたげてそよろとさし入る、呉竹なりけり。(枕草子・一三七)

(33) 藪ノ中ニ者ノソヨリソヨリト鳴テ動ケルヲ見テ、夫立留テ、… (今昔物語集・卷第二十六〔第二十一〕)

特にソヨは(29)に見られるように和歌の修辞法の一つとして、感動詞「然よ(そうだ)」⁷¹に掛けて、稲葉や薄、萩の葉などが「ソヨといふ／こたふる」という擬人法の

⁷¹ 「そよ(然よ)」における「そ(然)」は「さ(然)」の転。

形で繰り返し用いられており、この影響によって「ソヨ＝風による葉擦れの音」という意味が定着したと推察される。

他方、(30)に見える派生動詞ソヨメク以下、(31)の「さうぞく(装束ク)」に伴う衣擦れの音をはじめ、(32)の御簾の内に差し入れられた呉竹の葉擦れの音、(33)の何かが藪の中でカサコソと動く音など、語基ソヨには風による働きかけのない状況で生じる音を表す例も見受けられる。(32)(33)は「葉擦れの音」を表す点で上の(29)に通じ、(30)(31)は山口氏(1982)が源氏物語に現れるソヨソヨについて指摘していた「小さいけれど美的でない音」(p.315)という意味に通じると考えられる。これは、上代文献に見られた語基サワ派生語サワク同様、「はっきり聞こえる音」が否定的に捉えられたものと考えてよいであろう。ただし、ソヨソヨのこのような用例は中世以降ほとんど見られなくなり、専ら「風」と共起する用法へと収斂されていく。

特に中世以降の文献を見ると、『日葡辞書』においてはソヨ・ソヨソヨが「風の柔らかかに、心地よい音を立てながら吹くさま」を描写する語であるとされており⁷²、風との共起性の強さが伺える。ただし同辞書では、ソヨ・ソヨソヨが風の吹く＜音＞だけではなくソヨと音を立てるような風の吹き方、即ち、柔らかかに風の吹く＜さま＞をも表すと記されており、＜音→音を立てるものの動くさま＞へと意味がシフトしている

⁷² Soyoto. ソヨト(そよと) 副詞。例, Soyoto fuqu.(そよと吹く) 風が軟らかに、気持ちのよい音を立てて吹く。

Soyosoyoto. ソヨソヨト(そよそよと) 副詞。例, Cajega soyosoyoto fuqu.(風がそよそよと吹く) 風が草木を揺り動かして、音を立てながら軟らかに吹く。

ことが分かる。近世以降の用例に見られる(36)「そよそよと寒し」や(37)「そよそよと風が渡る」という表現なども「風」の聴覚的な側面ではなく、その吹き方を表す用法である。

(34) アマリニセン方ナキママニ、媒スベキ人ヲ尋出シテ、ソヨトバカリヲシラス

ベキ、風ノ便ノ下萩ノ穂ニ出マデハナクトモテ、… (太平記・巻第二十)

(35) 物あやしきことかぎりなく。いか様変化の業ならんと昼夜をわかつてとの

みの武士。そよと物音風音に火鉢の白炭の動くをも。(平家女護嶋・第四〔舟路の道行〕)

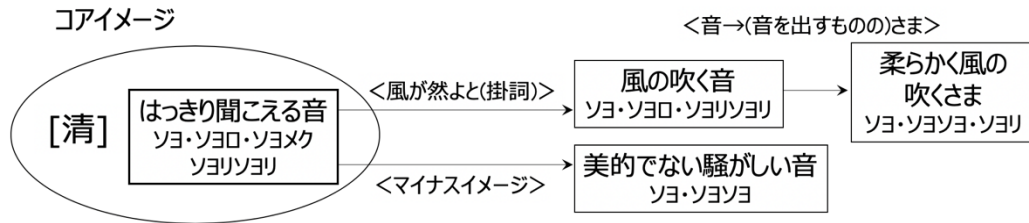
(36) みみをたれて是を聴けば、其むし聲をなして、秋のかぜそよそよと寒し。

(蓑蟲説跋)

(37) 朝涼の内に支度が出来て、そよそよと風が渡る、袖がひたひたと腕に靡

いて、引緊った白の衣紋着。(婦系図)

以上、上代文献において[清]の聴覚的側面を担っていた語基ソヨ派生語は、中古文献において葉擦れの音として定着し、中世以降はその葉擦れの音を立てさせる「風」と共起する例が多くなって現代に至ると言える。以下に語基ソヨの聴覚的意味の変遷の様相について図式化したものを示す。



<図 9> ソヨ系派生語の<音>に関する意味変化の様相

4.3.2.1.2 騒がしい音＝語基ザワの発生

さて、聴覚と関わる語基ソヨと母音交替関係にある語基サヤ派生語だが、こちらは中古以降、語基ソヨ派生語に見られたような多様な形態変化は見られず、語基形サヤと語基反復形サヤサヤが見られるのみである。

(38) 秋ふかみ山かたぞひに家居せし鹿のねさやになけばかなしも (大納言

経信集〔山家聞鹿〕)

(39) とくさの狩衣に青袴きたるが、いところうはしく、さやさやとなりて、… (宇

治拾遺物語・一八一)

(40) 日やや傾きて、物凄しく風吹たち、桧原杉むらさやさやと鳴とよむ。(春

雨物語・樊噲(上))

語基形サヤが聴覚的意味を示す例はほとんど見られないが⁷³、用例(38)を見ると、上代語に見られた[清]の「はっきりとした音」という意味が引き継がれていることが分かる。これに対して用例(39)(40)に現れる反復形オノマトペのサヤサヤは、いずれも動詞「鳴る」と共起して具象的な音を表し、音を立てる主体は笹や葦の葉のような軽いもの、且つ群生しているもの、或いは衣(衣擦れの音)が中心である。ただし(39)さやさは「うるはしく(麗しく)」という直前の語から肯定的なイメージを持つ語であることが推測され、この点で前述のソヨソヨとは異なるイメージを有すると言える。一方、近世文献の(40)サヤサヤは物凄しく風が吹き立って鳴る音であることから、大きな騒がしい音を表すと想定されるが、これは、近世文献においてソヨソヨが有していた「柔らかに風の吹くさま」という意味との対比により生じたものと考えられる。つまり、サヤサヤの聴覚的イメージは常にソヨソヨとの対比によって、その意味が変化していると捉えることができるのである。

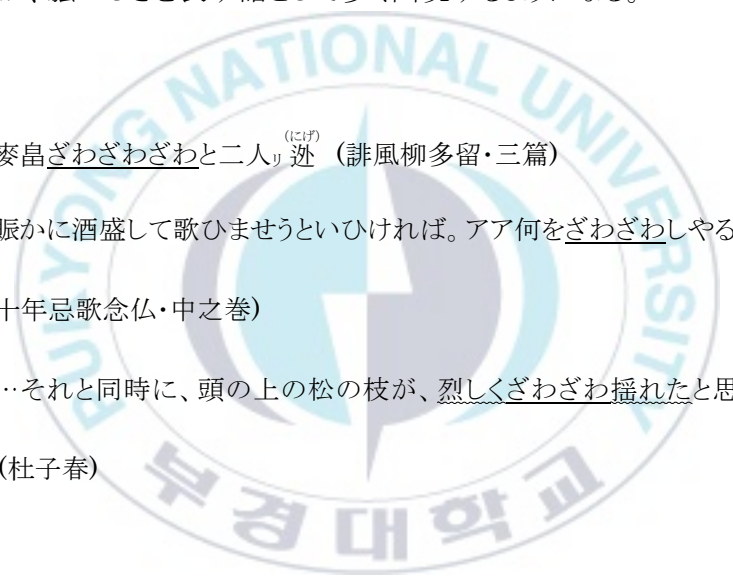
これに対し、記紀において語基サヤと等価的交替関係にあったサワ系派生語は、中古・中世文献にはほとんど現れない⁷⁴。これは上代に語基サワが、聴覚的意味を内包した動詞サワク(中古以降はサワグと濁る)を派生し、視覚的意味も次

⁷³ 「あしの葉は沢べもさやにおく霜の寒き夜な夜な氷しにけり」(金槐和歌集・卷之上〔冬部〕)のサヤも聴覚的意味を有しているが、これは前述の用例(23)をモチーフにしたものである。また「槇ながすあなしの川に風ふきてこの夕ぐれぞ波さやにたつ」(古今著聞集・巻第五〔和歌第六178〕)は視覚と聴覚の両方に係るものである。

⁷⁴ 中世文献に多く見られるサワ系派生オノマトペは、いずれも聴覚的な意味ではなく視覚的側面から派生した意味を持つ。これについては後述することにする。

項で述べる形容動詞に譲ったことにより、敢えてオノマトペとして残る必要がなくなつたためだと考えられる。更に類義語であるソヨ系派生オノマトペが、聴覚面を広くカバーする語として定着していたことも、サワ系派生オノマトペが用いられなくなつた一因と言えるだろう。

しかし近世になると、サワの反復形オノマトペであるサワサワから派生した濁音形ザワザワが、騒々しさを表す語として多く出現するようになる。

- 
- (41) 麦畑ざわざわと二人^(にげ)リ 逃 (誹風柳多留・三篇)
- (42) 賑かに酒盛して歌ひませうといひければ。アア何をざわざわしやるぞい。
(五十年忌歌念仏・中之巻)
- (43) …それと同時に、頭の上の松の枝が、烈しくざわざわ揺れたと思ふと、
… (杜子春)

用例(41)は麦畑を慌しく逃げていく二人の立てる騒がしい音が表され、(42)も「賑かに」という描写からその騒がしさを表していることが分かる。(43)は濁音化されることで、サワサワよりも更に激しい動きによって生じる音を表すと言えるだろう。つまり中古文献でソヨソヨが担っていた「美的でない音」という意味は、近世頃にはザワザワが受け持つようになっていたということである。

これに対して清音サワサワの方は、近世文献以降(44)(45)のように「心の落ち着かないさま」を表す用例が見られる点でザワザワとの間に相違がある。

(44) ハアア人事いはば席敷け徳兵衛様さうなと。聞くより胸もさわさわと。飛びも下りたき心なり。(重井筒・中之巻)

(45) 机に向っても、妙に、頭の中が力が入らず、軽くさわさわして感じる。(日記〔08 一九二二年<大正十一年>〕)

用例自体が少ないため、サワサワとザワザワの対応関係を「心の騒がしさ」と「具象的な騒がしさ」の違いであると見なすことは難しいが、近世文献においてサワ系派生語が「騒がしさ」を担う語であったことは間違いないであろう。

4.3.2.2 視覚的側面

4.3.2.2.1 語基サヤ系派生語—<さま>をプロフィール

中古文献以降、[清]の聴覚的イメージは主にサヤサヤ及びソヨ系派生オノマトペに引き継がれたが、視覚的イメージは中古文献における、サヤ系派生語が受け継いだようである。

(46) あききぬとめにはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる（古

今和歌集・卷第四〔秋歌上〕)

(47) 待たるる月の心もとなきに、星の光ばかりさやけく、まつのこずゑ吹く風

のおと、心ぼそくて、…（源氏物語・末摘花）

(48) きのみまで冬ごもれりしくらぶ山けさは春べと峰もさやけみ（好忠集〔春

十〕)

上記の例を見ると中古文献では(46)形容動詞サヤカの連用形サヤカニ、(47)形容詞サヤケシの連用形サヤケク、(48)形容詞の語幹サヤケに接尾語ミが接続したサヤケミが、いずれも[清]の視覚的意味を担っている。特に(46)サヤカは「はつきり」という意味が中心となっているが、(47)(48)は「はつきり見えるさま」を表すと同時にその「清澄さ」をも想起させる語となっており、語基サヤの[清]の持つ複合的な意味が表されている例であると言えよう。

ところで語基サヤ系派生語は、万葉集の頃から用例(21)'に見られるように「月夜」をはじめ、「月の光・月影・月」などの語と度々共起しているが、夜空に浮かぶ月は「はつきり見える」ものであり、且つ人々がその「清澄さ」に惹かれたため、用例(49)～(51)のように和歌や謡曲に用いられたのではないだろうか。

(21) わたつみの 豊旗雲に 入日見し 今夜の月夜 さやに照りこそ (万葉集・卷一15)

(49) 瑠璃の浄土は潔し、月の光はさやかにて 像法轉ずる末の世に、遍く照らせば底も無し (梁塵秘抄・卷第二〔佛歌廿四首〕)

(50) 月影もさやには見えずかきくらす心の闇の晴れし (金槐和歌集・卷之中〔恋之部〕)

(51) 寺井に澄める、月ぞさやけき、月ぞさやけき (井筒9)

特に近代文献ではサヤカに用例(52)～(54)のような漢字が当てられているが、これらの用例にもサヤの「清明さ」の意味がよく表されていると考えられる。

(52) 一年夏の半、驟雨後の月影^{さや}やかに照して、… (妖怪年代記)

(53) 昨日こそ誰乎彼の黯黹にて、分明^{さやか}に面貌を弁ぜざりしが、… (金色夜叉)

(54) 頃は夏の最中、月影^さ鮮やかなる夜であった。(少年の悲哀)

以上、語基サヤの視覚的な[清]のイメージは、語基派生形容(動)詞において保たれてきたことを確認した。ただしサヤカという形容動詞は現代語では用いられ

ておらず、その意味は以下で扱うサワ系派生語の方に転移していることに注意しなければならない。

4.3.2.2.2 語基サワ系派生語—<さま>をプロフィール

現代語においては聴覚的イメージの強いサワ系派生語だが、中世文献においてはむしろ視覚的イメージを表す用法の方が中心であったようである。サワ系派生語の視覚的イメージは、語基サヤのそれとどのような点で異なるのであろうか。中世文献を確認する前に、中古文献に現れる語基サワ系派生語についてまず触れておく。

(55) 知らざりしさまをも、さわさわとは、えあきらめ給はで、… (源氏物語・総角)

(56) おもしと見れど、さわやぎ給ふひまもありてなむ、… (源氏物語・夕霧)

(57) 「いかにぞや、さわやかになり給ひたりや」とてうち笑みたるも、… (枕草子・一本二三)

(58) いと恥づかしうて、さわやかにもいはぬに、面を見かはして立てり。(落窪物語・卷之二)

用例(55)のサワサワは「きれいさっぱり」、用例(56)のサワヤグ及び(57)サワヤカは「気分がすっきり」、用例(58)のサワヤカは「すらすらと滞りなく」という意味である。一見何の関連もないように感じられるこれらの意味だが、実は全て＜滞りやわだかまりのないさま＞というスキーマを介した意味拡張であると考えられる。そしてこの＜滞りやわだかまりのないさま＞は、語基サヤの持つ「清澄さ」の裏にある「曇りがない」という意味に起因しているに他ならない。つまりサワとサヤは[清]を介して、表裏一体の関係にあると言えるのである。

この語基サワの＜曇り(滞りやわだかまり)のないさま＞というイメージは、中世文献においては用例(59)～(60)のようにサワサワというオノマトペに引き継がれる。

(59) 人代ノハジメ成務マデ、サワサワト皇子皇子ツガセ給テ正法トミエタリ。

(愚管抄・巻第三)

(60) 時ノ君ヲオモイアナヅリマイラスル心ノサワサワトナクテ、…(愚管抄・巻第七)

(61) …馬の前には草一把もおかず。さわさわとはかせてぞありける。

(古今著聞集・巻第十〔馬芸第十四〕)

(59)はすらすらと皇子達が皇位を継承された⁷⁵、即ち「滞りないさま」を表しており、(60)(61)は上記(55)同様「きれいさっぱり」という意味であると考えられる。しかし、このような[清]の視覚的イメージを担うサワサワは、近世以降にサワヤカという形容動詞が台頭するようになるにつれ徐々に用いられなくなる。

(62) 司馬將軍吳三桂鎧甲さわやかに出で立ちて。(国姓爺合戦・第一)

(63) …梅は香を吐出す、鳥の囀さわやかに、東風吹空の長閑なるを、…

(風流志道軒伝・卷之二)

(64) 理髪店の店さきには、朝日の光がさわやかに、万年青の鉢を洗つてゐる。

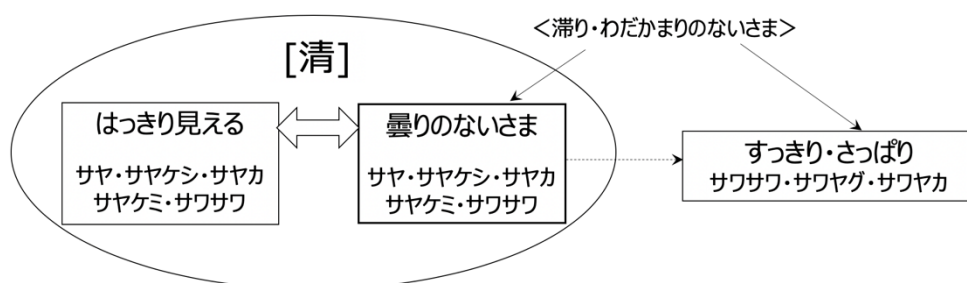
(動物園)

用例(62)～(64)の例からも分かるように、このサワヤカは「曇りのないさま」というよりは、従来語基サヤが担ってきた「清澄さ」の意に近い。これはサヤカという語が用いられなくなってきたこととも関連があると推察される。

以上、先に見た語基サヤ派生語及び本項で扱った語基サワ派生語の＜さま＞に関する意味変化を図式化すると、以下のようになる。

⁷⁵ 大系本『愚管抄』(p.135; 頭注13)参照。

コアイメージ



＜図 10＞ サヤ～サワ系派生語の＜さま＞に関する意味変化の様相



第5章 語基ハラ～ホロ系派生語の意味変化

5.1 はじめに

本章で考察する語基ハラ～ホロ系派生語については、장진영(2006)⁷⁶がハラ系オノマトペ、ハラハラの意味用法の変化について考察している。氏はハラハラ・バラバラ・パラパラの意味を比較し、これらが完全に対応しているわけではないと述べ、その理由をハ行頭子音の変化と関連付けて論述しておられる。しかし、氏の考察は現代語における意味を中心に行っているため、意味の定義が狭い。例えば古語のハラハラが擬音語として用いられていたという点に言及していないため、濁点・半濁点の発生により突如擬音語的意味が生じたように感じられる。また「ハラハラ落ちる」という状況は物が複数であるということを暗示しており、通時的に見るとこれをスキーマとしたメタファー的意味変化も現れるのだが、この点についての言及もなされていないようである。これらの問題点から、より包括的な考察のためには古典文献における意味用法について検討する必要があると言えるだろう。

⁷⁶ 장진영(2006)「ハ행음의 변화와『하러하러』의 의미·용법 분화」『언어과학연구』제36집

とは言え、濁音に加え半濁音という内的派生形態をも持つ語基ハラ派生語について考察している先行研究は限られており、氏の試みは非常に意欲的なものであると言える。よって本章でも氏の考察に倣い、清音形だけでなく、濁音・半濁音形も含めた幅広い考察を行っていこうと考える。

5.2 共時的観点からの考察

語基ハラ～ホロの現代語における意味を把握するため、両語基の反復形オノマトペ、ハラハラ・ホロホロの辞書上の意味を確認すると、両語は①木の葉や涙などが落ちるさま、②物が欠けたり、割れたり、破れたりするさまを表すという点で共通し、また、聴覚的な意味を有している点も同じである。ただ、両語とも集団の動きを描写する用法を持っているが、ハラハラは「たくさんのものが一斉に」動くことが意味の中心となっているのに対し、ホロホロは「ちりぢりに」分かれることに焦点があるなど、微妙な違いが見受けられる。また、ハラハラには心配や不安を表す用法があるが、ホロホロにはこのような用法がないなど、両語は互いに共通した意味を有しつつ、微妙な差異の認められる関係にあると考えられる。では、コロケーション調査ではどのような結果が現れるであろうか。NLBによるコロケーション調査の結果を以下に示す。

＜表 5＞ 現代語においてハラハラ・ホロホロと共起しやすい動詞

ハラハラ		ホロホロ	
∅	～と	∅	～と
する	散る	こぼす こぼれる 泣く 溶ける	崩れる 流す
ドキドキする	流す		こぼす 酒を飲む 酔う
崩れる 散る 泣く 流れる	落涙する		
	こぼす		
	落とす		

上の表を俯瞰すると、ハラハラにおいて最も多用されているのは、「ハラハラする」「ハラハラドキドキする」という心的描写を担う用法である。

- (1) 見学が終了した時点で、ここならという就学先を一校に絞ることができ、ドキドキハラハラしていた心が落ち着いた。(たったひとつのたからもの)

このような用法はホロホロには見られないが、逆に両語に共通して現れるのは(2)(3)「(涙が)流れる・こぼれる」という「涙の流れるさま」を表す動詞と共起する例である。

(2) ふだんとまったく変わらない表情で、ただ、涙だけが、はらはら流れては

落ちていくのだ。(きみのためにできること)

(3) その足音を聞きながら、田村は何かわからないが涙がほろほろこぼれた。

(異質の光)

(4) そんなところへ実にタイミングよくお手紙をいただいたので、不覚にもほろ

りとしてしまいました。お恥ずかしい。(象と耳鳴り)

ただし、ハラハラが「涙の流れるさま」を表すのに対し、ホロホロは「こぼれる」と共起する例が目立つ。特にホロ系派生オノマトペのうちり接続形(4)ホロリは「ホロリとする」の形で「泣く(或いは心に染み入り泣きそうになる)さま」を描写しうる点で、ハラハラとの間に明らかな相違が見られると言える。

また、両語基派生語には(5)(6)のように「崩れ落ちるさま」を表す動詞と共起する例も見られるが、ハラ系派生語に関しては(5)清音形ハラハラより(6)濁音形バラバラの方が聴覚的な意味合いが強く感じられる。これに対して、ホロ系派生オノマトペには聴覚的な意味合いは特に感じられず、(7)のように食感を描写する用例や(8)濁音形ボロボロの破れかぶれな様子など、＜さま＞に関わる側面に焦点が当たっていることが確認できる。

- (5) しばらくのあいだかたちを維持しては、人に洞察・目標・価値などと呼ばれ
ることになるパターンたちが、陽にさらされて白く色あせ、はらはらと剥離す
る。(旅のはざま)
- (6) …炭じん爆発を抑制するほど多量に岩粉が坑道の壁からバラバラと崩れ
落ちれば、岩層の斜坑はとうの昔に崩壊しているはずである。(三池炭鉱)
- (7) 口に刺さるように固く、歯応えよく焼き上がる日本式パイより、ほろほろと
もろく、口の中で溶けていくフランス式のほうが繊細な食感に優れ…(焼き
菓子の秘訣)
- (8) 逆に言えば、この国がどんなにぼろぼろになってもポーランドのポーラン
ドが社会に在る限り僕の最愛の国は変わらないってことだ。(チェシチー
うねるポーランドへ)

(7)食感を表すホロホロの用法については、渡辺知恵美・中村聡史(2015:
342)⁷⁷の考察においても「崩れる」との共起性が強い語として紹介されており、そ
の点で(5)(6)と意味的に重なるものとして捉えることができる。

以上、辞書的意味の検討及びNLBによるコロケーション調査によって、現代語
における語基ハラ～ホロ系派生オノマトペの意味を大まかに把握した。簡単にまと

⁷⁷ 渡辺知恵美・中村聡史(2015)「オノマトペロリ:味覚や食感を表すオノマトペによる料理
レシピのランキング」『人工知能学会論文誌』30巻 1号

めると、両語基派生語とも「落涙するさま」や「崩れるさま」を表す語との共起性は強いが、ハラハラには「心の落ち着かないさま」を表す意味用法があるのに対し、ホロ系派生語にはそのような意味が含まれていない点に差異が認められる。また、ここでは用例を挙げていないが、語基バラがバラスやバラツク・バラケルのように動詞化する場合が多いのに対し、ボロはボロイ・ボロッチイのように形容詞化することから、本来バラは＜動き＞を、ボロは＜さま＞を表していたのではないか、という仮説を立てることもできる⁷⁸。

以上を踏まえ、次に本調査による語基ハラ～ホロ系派生語の全体像を示し、その傾向について検討する。

⁷⁸ ホロホロには他に「大酒家の文左衛門も、この兄事する天野の前では静かに盃を傾け、ほろほろと酔った。」(元禄御畳奉行の日記)のように、「酒を飲む・酔う」といった飲酒に関連する語と共起する例が見受けられる。特に「酔う」は「ホロ酔い」という複合名詞を形成することから、現代語においてホロと結びつきの強い語として定着していると言える。しかし、このような意味用法は語基ハラ系派生語との関連性が希薄であり、そのルーツは本研究で扱う語基ホロとは異なるものとして捉えた方がよいであろう。即ちこの場合のホロは、「かすかなさま」を表すホノの音韻変化によって生じたものと考えられるため、本研究ではこの意味用法は考察対象から外すこととする。

5.3 通時的観点からの考察

5.3.1 上代文献に現れる各語基のコアイメージ

上代文献には語基ハラ系派生語として(9)ハララ、(10)(11)ハララカスという語が現れる一方、語基ホロ系派生語は(12)語基形が見られるのみである。

(9) 海原見れば 白波の 八重折るが上に 海人小舟 はららに 浮きて 大御
食に 仕へ奉ると 遠近に 漁り釣りけり (万葉集・卷二十4360)

(10) 堅庭を踏みて股に陥き、沫雪の若くに蹴散し、蹴散、此をば但穢穢運運箇須と云ふ。(日
本書紀・卷第一〔神代上〕)

(11) 劔刀 磨ぎし心を 天雲に 思ひはららかし 展轉び (万葉集・卷十三
3326)

(12) 天雲を ほろに踏みあだし 鳴神も 今日に益りて 畏けめやも (万葉集・
卷十九4235)

上代文献に現れるホロ系派生語の用例は(12)一例のみであるため意味の特定は難しいが、『時代別国語大辞典 上代編』では「はらはらと、などの意味か」という

ように、語基ハラとの関わりからその意味が推し量られている。ではその語基ハラの意味はというと、(9)～(10)は同辞書においていずれも擬音語ハララより派生したとされてはいるが⁷⁹、副詞的用法である(9)は「あちらこちらに散らばる」という静的な視覚的意味を表し、派生動詞(10)クエハララカスは「蹴って散らす」という具体的な行動について表している。また(11)ハララカスは、「思い」がハララカス、つまり心が散らばるという抽象的な描写であるとされており、具象表現が抽象的な意味にまで転用されていたことが分かる。

因みに語基ハラはハラフ(四段・下二段)という動詞も生み出している。

(13) 梓弓 欲良の山邊の 繁かくに 妹ろを立てて さ寝處拂ふも (万葉集・
卷十四3489)

(14) 中臣の 太祝詞 言ひ祓へ 贖ふ命も 誰がために汝 (万葉集・卷十七
4031)

(13)のハラフは現代語の「払う」同様、塵などを払いのけることを指し、(14)はお祓い、即ち塵ではなく災いなどを払うために祈ることを指す。どちらにも共通する

⁷⁹ 『時代別国語大辞典 上代編』ハララカス及びハララニの項参照。この辞書における擬音語という用語は、往々にして擬音語・擬態語の総称、即ちオノマトペという意味で用いられており、この例もそれに該当するであろう。

のは「邪魔なものを払って遠ざける」という一連の動きであり、上記(9)～(11)と合わせて鑑みると、語基ハラにはく遠くに払って散らす>スクリプトを想定することができるのではないだろうか。(9)で語基ハラが「散」の訓として用いられていることから、ここでは[散]を語基ハラのコアイメージとして据えることにする。

これにより、ハララという[散]の状態はハラフという動きの結果としてのくさま>であり、視覚的に小さなものを描写し、ハララカスはハララという状態にする、即ち散った状態にする<動き>を表すと考えることができる。また、等価的交替関係にある(12)ホロもハラと同様、散らばった状態を表すと考えられる。

以上を踏まえて、語基ハラ～ホロのコアイメージ及びそのカテゴリー別意味を記述すると、下記のようになると考えられる。

<表 6> 上代文献に現れる語基ハラ～ホロのコアイメージ

	ハラ	ホロ
コアイメージ	[散]	
音	—	
動き	遠くに払う・散らす	—
さま	遠くに散らばったさま・ 小さいもの・多量	散らばったさま

本研究においては、上代文献におけるハラ～ホロ両語基には特に音に関わる意味は見当たらず、これらは何かをく遠くに払って散らす>というく動き>やその結果であるくさま>を中心とした、視覚的意味合いの強い語基だったことが想定される。しかし現代語においてはハラ系濁音形オノマトペ、バラバラに聴覚的なイメージが伴っており、必ずしも視覚的側面のみを描写するとは言えない。また、語基ホロの意味もハラからの類推でしかないため、両語基の意味の相違は未だ不明瞭である。これらの諸問題は、中古文献以降の派生語の意味展開の様相を注視することで明らかになると考えられ、次項からは中古文献以降の語基ハラ～ホロ系派生語の意味変化の様相について考察していく。

5.3.2 中古文献以降に現れる各語基派生語の意味変化

5.3.2.1 聴覚的側面

5.3.2.1.1 語基ハラ系派生語—くさま>とく音>との関係

先に述べたように、上代文献における語基ハラ～ホロ系派生語には聴覚的側面についての描写は特に現れないが、中古文献には小さなものの散り落ちて立てる音を描写する例がいくつか見受けられる。

(15) なげきの蔭も、ほかよりは枝繁ければにや、心もとなげに所々より漏り出る影、心づくしに見ゆるに、はらはらと吹き払ふ木の下風の音も、…(狭衣物語・卷三)

(16) 僧都ハ虚寝ヲシタリケレバ、打任テ被交テ後、寝延ビヲ為ル様ニ打ウムメテ足ヲ交ミケレバ、ハツノ胡桃一度ニハラハト砕ニケリ。(今昔物語集・卷二十三〔第十九〕)

(17) 海の面は、ふすまを張りたらむように光満ちて、神、鳴りひらめく。落ちかかる心地して辛うじて、たどり来て…(中略)…まどふに、なほ止まず鳴りみちて、雨の足、あたるどころ通りぬべく、はらめき落つ。(源氏物語・須磨)

上記はそれぞれ(15)木の葉の散り落ちる音、(16)胡桃の散り落ちる音を示すと考えられる。これは、木の葉や胡桃の散る<さま>に伴って地面との接触が生じ、そこから<音>の意味が想起されたものと考えられる。この時、ハラの有していた[散]のイメージは、単に散らばっている<さま>ではなく、散乱に至るまでの「落ちて散らばる動き」まで包括したものとなっており、それ故(17)ハラメクも、雨の散り落ちる<動き>を描写する語となり得たと推測できる。ただし、中古文献の語基ハラ派生語は(15)(16)で見たように<音>を想起させるものとして用いられているため、(17)ハラメクも「神、鳴りひらめく」という状況における、「音がするほど激しい雨

脚」を描写するものと考えることができよう。即ち、中古文献においては語基ハラ系派生語に＜さま＞に至る「落下」という具体的な＜動き＞の側面が伴うことにより、聴覚的意味も表しうるようになったと考えられるのである。

ところが中世文献においては、濁音形バラバラが＜音＞を表す語として用いられるようになり、清音形ハラハラの聴覚的意味が失われていることが『日葡辞書』の記述から確認できる。

Farafarato. ハラハルト(はらはらと) 副詞. 雨の降るさま, または, 涙の流れ落ちるさま, または, 敵勢を多く打ち倒して斬るさま. 例, *Teqio farafarato qirifuxete, &c.*(敵をはらはらと斬り伏せて, 云々) 敵を斬り倒して.

Barabara. バラバラ(ばらばら) 雨やこれに似たものが地面に落ちる時, たとえば, 栗の木からその実が落ちるとか, 穀物がこぼれ落ちるとかする場合に立てるような響きを意味する副詞. ¶ *Fitoga barabarato tatçu.*(人がばらばらと立つ) 大勢の人が順序もなく音を立てて座を立つ.

実際の用例を見ると、中世初期の文献における(18)ハラハラなどは(19)バラバラ同様、聴覚的意味を表すものとして捉えることができ、中世の始め頃はまだ聴覚的意味においてハラハラとバラバラの区別は明確でなかったと考えられる。しかし

現代語においては専らバラバラが聴覚的側面を描写しており、中世以降、徐々にハラハラとバラバラの意味の棲み分けがなされてきたということであろう。

(18) しばし斗ありて、やをばかりなる猪のししの出できて、石をはらはらとくだ
けば、火きらきらいづ。毛をいらかして、走てかかる。(宇治拾遺物語・一
〇六)

(19) をしごめをとらせ給て、まいるよしして、御口のほどにあてて、にぎりくだ
かせたまひければ、御うへのきぬのうへに、ばらばらとちりかかりけるを、…
(古今著聞集・卷十八〔六二三〕)

ところで、上の『日葡辞書』の記述に見える、ハラハラの「敵勢の多くを」「大勢の人が」という量的なイメージは、中古文献にも既に見受けられる。

(20) 中納言殿の北方、中將殿のおりぬさきにとて、皆歩みのぼる程に、かれ、
はたいと儀式ことに、そよそよはらはらと査すりて、帶刀さきに立て、道なる
人々払ふ。(落窪物語・卷之二)

一般的に(20)ハラハラは装束などの擦れ合う音を表すとされているが、ここでは

ただ純粹に＜音＞のみを表すわけではなく、「多くのものが立てる音」という＜量＞に関わる意味も背景にあるのではないかと考えられる。なぜなら[散]という状況には、前提として「量が多いこと」が想定されているからである。オノマトペにおいて清濁が各々担うべき「量の多(＝濁音)・寡(＝清音)」というニュアンスの差は、中世以前、つまり形態的な清濁分化が行われる前の時代には表すことができなかった。それ故、清音ハラハラが濁音バラバラの意味合いもあわせ持ち⁸⁰、「量的多さ」という意味を内包していた可能性も十分に考えられる。『源氏物語』にも(20)に類似する(21)のような用例が見られるが、この衣擦れの音を表すハラハラも、やはり「若き声ども」の主である多数の人の立てる音として用いられている。

(21) 思ひあがれる気色に、ききおき給へる女なれば、ゆかしくて、耳とどめ給へるに、この西おもてにぞ、人のけはひする。衣の音なひはらはらとして、若き声ども、にくからず。(源氏物語・帚木)

さて中世以降の文献においては前述の通り、ハラハラの聴覚的意味を濁音形バラバラが担うようになるが、それと同時に(22)～(24)のように、バラバラがたくさんの人が散り散りに動く、その統一感のない＜動き＞を表す語として機能する例も

⁸⁰ 或いは表記としては清音で表されていたが、実際の音は濁音であったのかもしれない。

多く見受けられる。これは語基ハラの有する「散らばっているさま」と「たくさん」という量的な側面を背景とした「散り散りに動く人々」という意味から生じる、＜音→音の所有者の動き＞というメトニミーによる意味変化の例と考えられる。

(22) 小法師二三十人トモシテ此堂ニ入ヌ。「小法師ドモ、庭ニ出テアソベ」ト

云へバ、バラバヲ打ツレテ出ヌ。(沙石集・巻七20)

(23) 庄屋が方に扣へよと 下知にハアツ侍中 皆ばらばらと立て行。(鎌倉三代記・第七)

(24) なあ聞いとくれ信さん、去年も己れが処の末弟の奴と正太郎組の短小野郎と万燈のたたき合ひから始まつて、それといふと奴の中間がばらばらと飛出しやあがつて、… (たけくらべ・二)

ところで近代文献には「大勢」を表すバラバラと対峙する形態として、(25)のように「わずかな物が不揃いに置かれているさま」がバラリという語で表されている例が見受けられる。

(25) 靴紐や靴墨、刷毛が店頭の前通りに並び、棚に製品がばらりと飾ってあ

ったが、父親はまだ繻帯も取れず、土間の仕事場で靴の底をつけていた。

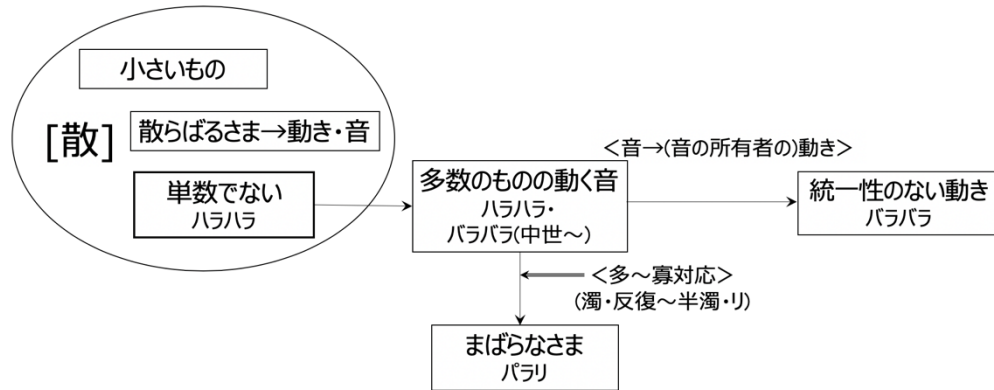
(縮図〔素描 十二〕)

語基バラに対応する語基がハラではなくパラとなっている点も注目すべきところだが⁸¹、パラリにこのような意味用法が生じるのは、語基ハラに「多量・多勢(大勢)」という側面が内包されているためだと言えるだろう。

以上、中古以降、聴覚的意味を示していた語基ハラ系派生語が、視覚的意味を担うようになる過程について考察した。中古文献においてハラが表していた「小さなものの落ちて散らばる音」という聴覚的意味は、中世文献以降、濁音形バラバラが担うようになる。それに対して、語基ハラの内包する「小さく固い粒状の物が多量にある」という意味のうち<多量にあるさま>がプロファイルされ、ハラハラは「多くの人が動く時に立てる音」という意味を獲得するようになる。この量的な意味合いはその後「散り散りに動くさま」を表す濁音形バラバラの背景と化すが、その一方でこの濁音形に対応する形で、半濁音形パラ系派生語が量の「寡」の側面を表すようになる。以下に意味変化の様相について図で示す。

⁸¹ ハ行子音の音価が[p]>[ɸ]>[h]と変化したため、現代日本語のハ行音の清濁は[h]~[b]のように対立する。しかし中世、安土桃山時代頃に漢語や和語における促音便などの発音変化により[p]が再び発生(復活)したことで、ハ行では意味上、清音対濁音([h]~[b])に加えて、半濁音対濁音([p]~[b])の対立関係をも成すようになる。

コアイメージ



＜図 1 1＞ ハラ系派生語の＜さま＞＜音＞に関する意味変化の様相

5.3.2.1.2 語基ホロ系派生語—＜音＞をプロフィール

中古～中世文献において音を表す語基ホロ系派生語には雉の鳴き声を描写する用例なども見られるが⁸²、下記(26)のように語基ハラ系派生語同様、固いものを砕く描写も現れる。

(26) (女房らが)二人して、栗やなどやうのものにや、ほろほろと食ふも、聞き知

らぬ心地には… (源氏物語・宿木)

⁸² 「(矢鳥を)ふところにさしいれて、冷泉院の山にはなちたりしかば、ほろほろととびてこそいにしか。」(大鏡・巻三〔兼道〕)

(27)「我も、おくれたてまつらじ」と、まどふさまども、限りなし。御修法ども、壇

こぼち、僧なども、さるべき限りこそまかでね、ほろほろとさわぐを、見たまふ

に、…(源氏物語・若菜下)

(28) 火針ヲ赤ク焼テ、頬ヲトヲシタレバ、米ノホロホロトコボレテケリ。(沙石集・

卷三〔二〕)

(26)は大系本『源氏物語五』に「ぼりぼりと音を立てて食べるのも、そのような音を聞いた事もない高貴な生活の薫の気持ちには、…」(p.123; 頭注24)とあり、固いものを(食べて)砕く際に発生する<音>とされている。これは、前述の(18)ハラハラが「純粋な意味での写音」(大系本『今昔物語集五』補注p.480)、即ち現代語のバリバリという<音>に該当するとされていることに類似している。また(27)の例も、前述(21)のハラハラのように、「たくさんの人々によって立てられる音」を表すと考えられ、<音>の描写に関しては、ハラとホロの間にそれほど大きな違いは見受けられない。

他方、中世文献(28)を見ると、ホロホロは米の噛み砕かれる<音>というより、米粒がこぼれ落ちる<さま>を表すと考えられ、聴覚的意味合いは先の二例ほど強くない。これはホロホロの示す意味が、聴覚的側面から視覚的側面へとその焦

点をシフトさせつつあることを示す例であると言えよう。『日葡辞書』の記述⁸³を確認しても、中世においてはホロホロ・ボロボロとも「崩れたり砕けたりするさま」となっており、聴覚的意味の記述は見られない。

もちろん、中世文献『閑吟集』の用例(29)には以下のように、聴覚的意味を持つホロホロの用例も見られる。

(29) 衣々の、砧の音が、枕にほろほろほろほろとか、それをしたふは、涙よな
ふ、涙よなふ。(閑吟集182)

しかし、これは大系本『中世近世歌謡集』補注(閑吟集p.171:47)に「後朝の衣の音に同音の衣々の砧をかけながら頭韻をなしている。」とあるように、ホロホロが「衣」「枕」「涙」と並べられて後朝の様子を描写することにより、例えば中古の源氏物語に現れるハラ〜ホロ系オノマトペの様々なイメージ(例えば次項にて述べる「落涙」とその物語的背景)を想起させる装置としての役割を果たしていると考えら

⁸³ ホロホロは「**Foroforoto**. ホロホロト(はらはらと) 副詞. 卷いた糸が解けたり、ほぐれたりするとか、髪がほつれるとか、あるいは、木蔦が木からほどけて離れるとかするさま. ♪ また、土壁などのようなものが崩れたり、砕けたりするさま. ♪ **Namidaga foroforoto vochita**. (涙がほろほろとおちた) あの人の涙がぼろぼろと続いて落ちた. ♪ **Cazzura foroforoto toqi firogareba**. (葛ほろほろと解き広がれば) 木蔦が[絡まっていたのが]解けて、離れ広がるので.」、ボロボロは見出し語が二つあり、「**Boroboroto**. ボロボロト(ぼろぼろと) 副詞. 泥や土が崩れるとか、穀物や米が容器からあけられる時とかのように、物がこわれたり、崩れたりするさま.」(本篇)、「**Boroboroto**. ボロボロト(ぼろぼろと) 副詞. ♪ また、着物がひどく裂け破れているさま.」(補遺)とある。

れる。よって中世においては、中古文献において語基ホロが表していた擬音的なイメージは形骸化し、化石的に残っているに過ぎないと言えるのではないだろうか。

5.3.2.2 視覚的側面

5.3.2.2.1 語基ハラ～ホロ系派生語—＜動き＞、特に「落涙」に関して

上代文献に現れた副詞的用法ハラは、遠くに小さく見える舟があちこちに散らばっている静止画のような＜さま＞を表していた。一方で中古文献に現れるハラハラ～ホロホロは静的な状態というより、(30)(31)のように小さなものが「かかる・こぼれ落ちる」といった＜動き＞を描写するものへと変化している。

(30) 御まへのむめの木にゆきのいたうつもりたるをおりて、うちふせたまへり

しかば、御うへにはらはらとかかりたりしが、…(大鏡・卷三〔伊尹〕)

(31) 空うち曇りとして風のいとさわがしく吹きて、黄なる葉どものほろほろとこぼ

れ落つる、いとあはれなり。(枕草子・一九九)

中古文献に現れる「落ちる」描写の中でも、特に多いのは(32)(33)のような「涙」「泣くさま」を表す例である。中古文献においては特にホロホロがその描写を担い、(34)のように文中に「涙」という語が現れないにも関わらず、涙を流す描写であるこ

とが容易に読み取れる例もある。ここにホロホロと「涙」との間の強い結び付きが伺える。

(32) 時なりぬれば、今はとてすだれを引きあげて、うち見合はせて涙をほろ

ほろと落して、… (更科日記〔子忍びの森〕)

(33) 又ここなる硯に、文をおしまきてうちいれて、又ほろほろとうちなきていで

ぬ。(蜻蛉日記・上〔父の旅立ち〕)

(34) ひめ君の御ありさまを聞き給うひて、ををしく念じ給へど、ほろほろとこぼ

るる御けしき、いとあはれなり。(源氏物語・真木柱)

これに対して中世文献においては(35)(36)のようにハラハラが「落涙」を表す語として主に用いられるようになり、逆にホロホロと共起する例はほとんど見られなくなる。

(35) 持経者、目より大なる涙をはらはらとおとして、なくこと限りなし。(宇治拾

遺物語・一四一)

(36) 「只アリノ儘ニ云レヨ。斯ル夢ヲ見テ侍ルナリ。御坊ヲシバリタルガ仏ト見

ルゾ」ト云ヘバ、此法師ハラハラト泣テ申ケルハ、… (沙石集・卷十六6)

近世においてもハラハラが「落涙するさま」を表す語として最も多く用いられているが、注目すべきは用例(37)(38)に見られる涙とホロリとの結びつきである。

(37) エ、エ、丹さんト男の顔を見て、涙をホロリと膝のうへ、…（春色辰巳園・

初編 卷之二第三回）

(38) 明日の夜にても我等が内へそっと忍んで下されなば。打解け思晴さうと

しとと打ってぞ誑しける無智無學の床右衛門。一言に騙されほろりとなり。

（堀川波鼓・上之巻）

実は中世文献においてホロリは、『申楽談儀』に「軽い動き」を表す例として一例が見られるのみ⁸⁴であり、涙の落ちる描写を担っていたわけではない。しかし近世に入ると、用例(37)のようにホロリが涙を流す表現として用いられるようになり、出

⁸⁴「鬼の能、ことさら當流に變れり。拍子も、同じものを、よそにははらりと踏むを、ほろりと踏む、よそにはどうど踏むを、とうど踏む。」（申楽談儀・三）におけるホロリがこれに当たる。中世の口語資料では、オノマトペ標識「リ」の付加された形態が文中に効果的に用いられており、上の例の他にも「今ゆた髪が、はらりととけた、いか様心も、たそにとけた。」（閑吟集274）などが見受けられる。『申楽談儀』では母音交替関係にあるハハリとホロリが対照的に用いられているが、大系本(p.498; 頭注13)によると「ハハリよりもホロリが…(中略)…やわらかな踏み方」とされていることから、母音の違いがニュアンスの違いを表していたことが分かる。また、『閑吟集』の例に見られるハハリは、『日葡辞書』に「すっかり」という意味を表すとあるが、この『日葡辞書』においては、ハハリだけでなく濁音形バラリ・半濁音形パリのいずれも「すっかり」という意味を表すとされており、興味深い。近世文献にも「それ打て叩けと下知すれば。仲間共承り一度にははらりと取り廻す。」（出世景清・第一）などに「すっかり」という意味を表すリ接続形が見られるが、この用法は近代以降には見られなくなる。

現頻度もハラハラに次ぐほど多用されるようになる。

この「落涙」を表すハラハラとホロリの違いをコロケーションから考察してみると、ハラハラは主に「流す」と共起して涙を流し続けるという＜連続性＞を表す一方、ホロリは「涙ぐむ」などと共起して「わずかな涙・一粒の涙」という意味を示していることが分かる。ハラハラが「涙ぐむ」と共起しないことから、ハラハラは＜連続性＞に、ホロリは粒状の涙という＜形態＞に、焦点を当てた表現だという対比構造が確認できるであろう。

更にこの「ホロリ＝一粒の涙」という意味から生じたのが、上記(38)のような「ほろりとなる」という用法である。これは実際に「泣くさま」を描写するというよりも、何かに感じ入って憐れみ同情する気持ちを「一粒の涙＝ホロリ」で象徴的に表現したものであり、ホロリと流す涙から想起されるイメージによって具象的な意味が心理描写へと発展した例であると言えよう。(38)が近世中期に現れたものであることから、「ホロリ＝一粒の涙」という結びつきはこの時期には定着していたと考えられる。

近代文献を見ると、近世文献同様(39)のような心的描写の用例も見られるが、それ以外にも語基ホロ系派生語はホロリ・ボロボロ・ポロポロなど多様な形態で涙の流れる様子を表しており、特に(41)ポロポロは専ら落涙を表す語として現れる。これは、語基ハラ系派生語のうち落涙を描写するのが、ハラハラ・バラバラのみであることと対照的である。

(39) 山海の珍味でもあるように、舌鼓をうって食べるのを見ては、信之も思

わずほろりとなって、ついそんなお世辞めいた言を云わずにはいられなか

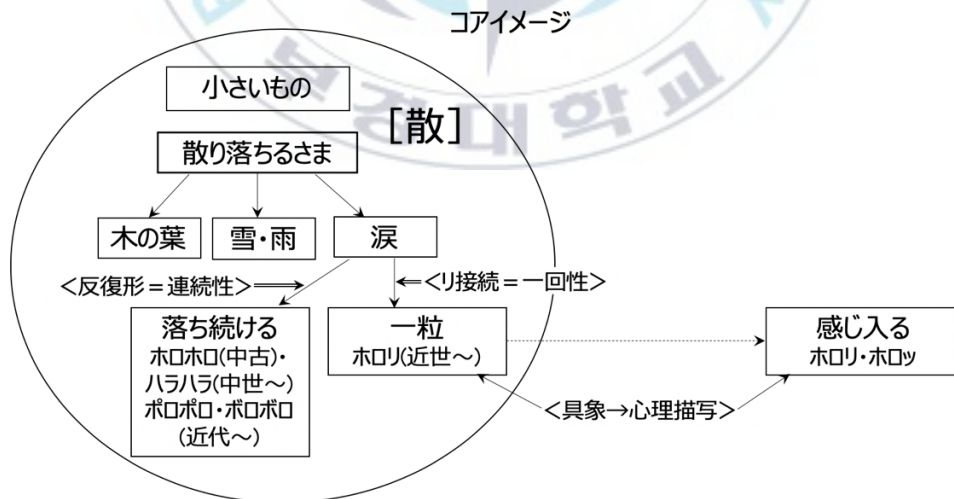
ったのだ。(多情仏心・後編)

(40) お島は口惜しそうにぼろぼろ涙を流しながら言った。(あらくれ・六十九)

(41)「宜御座んす。もう伺わないでも」と言った嫂は、その言葉の終らないうち

に涙をぼろぼろと落した。(行人・兄 三十一)

以上、落ちるさま、特に「落涙するさま」を描写する語基ハラ～ホロ系派生語の変化をまとめると、下記のようなになる。



<図 12> 落涙の<さま>を表すハラ～ホロ系派生語の意味変化の様相

5.3.2.2.2 語基ハラ系派生語—＜動き＞＜さま＞をプロフィール

前項では「落涙」を描写する意味用法について述べたが、語基ハラ～ホロの視覚的意味としては、[散]のイメージに即した「分裂・分散」や「散乱・乱れ」の意味が最も中心的な意味となる。

ここで論を先に進める前に、「分裂・分散」と「散乱・乱れ」の意味について整理をしておく。まず「分裂」と「分散」だが、どちらも「一つのかたまりから分かれる」という意味では共通している。ただし「分裂」はもともと一つの大きなかたまりである物が二つ以上に分かれる様子を表現する一方、「分散」は複数の個体の集合体としての「束」のイメージがあり、その束がまた個々に分かれていくという状況を描写している点で異なる。他方、「散乱・乱れ」にはそのようなかたまり意識がなく、単純にまとまりのない、不揃いな状況に焦点が置かれる。ただし、「散乱」は＜さま＞について、「乱れ」は＜さま＞だけでなく＜動き＞などについても言える点で違いがあると言えるであろう。

では、実際の用例を見てみる。中古文献においては「涙を落とすさま」を描写するホロホロに対し、ハラハラには髪や算木など「長い物が落下し散らばるさま」を描写する用例が見受けられる。

(42) 御髪の、乱れたるすぢもなく、はらはらとかかれる枕の程、ありがたきまで

見ゆれば、… (源氏物語・玉鬘)

(43) 箒ヲハラハト出セバ、女房共、此ヲ見テ「此ガ可咲キ事ニテ有ルカ、去
来然バ咲ハム」ト嘲ケルニ、入道、答モ不為シテ、箒ヲサラサト置キ居タリ。

(今昔物語集・卷二十四〔第二十二〕)

(44) 此ノ工ノ未ダ卒塔婆ノ上ニ有ル時ニ不下ズシテ、麻柱ヲ一度ニハラハラ
ト令壊メツ。(今昔物語集・卷十〔第三十五〕)

上記の例はいずれもハラハラの主体が長いものであるが、(42)は「乱れたるすぢもなく」という文からも分かるように、「整えられた髪から数本が枕にこぼれかかるさま」を描写している。これは髪が「落ちる」という下方の動きと同時に、「こぼれかかる」、即ち「分散」の意味を内包していると考えられる。(43)も『今昔物語集五』補注に「写音を主とすればサラサラ、擬態・描写に重点を置けばハラハラとなるのではなかろうか。」(p.479)とあり、ハラハラは視覚的側面にフォーカスが当たっていると考えてよいであろう。(44)は大系本『今昔物語集二』に「現今のサアットに当る」(p.333; 頭注5)とあるが、これではスピード感を表現した解釈になってしまうため適当ではないと考えられる。「問題はその足場がどのように解かれるかに係っている。」(『今昔物語集五』補注p.479)と言うのなら、このハラハラも「束から個々へ」と散らばっていく描写と捉えた方がいいのではないだろうか。そうすることで(42)～(44)はいずれも「束から個々へ」と散らばるさま、即ち「分散するさま」を描写したも

のであると言えるのである。

中古文献には、これ以外にも「分散」の意味を介して、以下のような意味用法が出現する。

(45) ものの調子ふきいづるほどに、わざはひかな、「あれはまはじ」とて、びづ

らひきみだり、御装束はらはらとひきやりたまふに、… (大鏡・巻四〔道兼〕)

(46) 若干ノ軍共馬ヨリハラハト下テ持行ク、風草ヲ吹クニ似タリ。(今昔物語集・巻二十五〔第九〕)

(47) 走り返テ板敷ノ下ニ深く這入ヌ。其ノ時ニ放免共ハラハト入ルニ入レ立テ、… (今昔物語集・巻二十九〔第六〕)

(45)は装束という一つのまとまりが散り散りになるという意味で、束ではなく「塊から個々へ」という「分裂」の意味に関連づけられる。一方で(46)(47)はいずれも「共」と共起していることから、人の集まりを束と捉え、その束を構成する人々が「分散するさま」を描写すると考えられるが、その視点は分かれた個々が別々に行動する面に向いている。

そしてこの意味が中世文献においてより明確になり、ハラ系派生語は個々へと分散する＜動き＞よりも、分散・分裂した結果としての「乱れ」、或いはそこから生

じる「纏まり・統一感のないさま」を表す意味用法へとシフトしていく。

(22)' 小法師二三十人トモシテ此堂ニ入ヌ。「小法師ドモ、庭ニ出テアソベ」ト

云ヘバ、バラバヲ打ツレテ出ヌ。(沙石集・卷七20)

(48) まことに、巳の時斗に、三十騎ばかりよりてくるあり。…(中略)…唯近に近

くなりて、はらはらとおるる程に、…(宇治拾遺物語・十八)

(49) 大方は、謡い出さん時と、云納めて後と也。ばらばらなるは悪し。(申楽談儀・十七)

中世文献においては(22)'や(48)のように、清濁交替関係にある語がいずれも「多くの人が纏まりなく動き、統制の取れないさま」を表しており、清濁交替により意味的対立が表されているとは言い難い。また(49)は形容動詞的に用いられている点がこれまでとは異なるが、やはり統制の取れていない、「乱れた動き」という意味がはっきりと表されている。

ところで、延慶本平家物語には先の(45)で見られたような「服の破れたさま」を、(50)のようにワラワラで表す用例が見られる。

(50) ヤセクロミタル法師ノカミキヌノキタナキカワラワラトヤレタルカウヘニアサ

ノ衣ノココカシコ結ヒ集メタルヲワツカニカケツツ片方ヤフレ失タルヒカサヲキ

タリ。(延慶本平家・六末85ウ)

ワラワラを『日本国語大辞典 第二版』で引くと「①乱れたさま、破れ乱れたさまを表わす語。②陽気なさまを表わす語。③たやすく燃えあがるさまを表わす語。④急いで行動するさま、統制がとれていないさまなどを表わす語。」とあり、①④は語基ハラの有する[散]の視覚的イメージに重なる⁸⁵。

このワラワラは音声学的な観点から見ても、ハラハラと関連性があると考えられる。山口佳紀(1985:146)は以下のように述べている。

ワシル>ハシル、ヒナカ>キナカ、ヲトリ>ホトリと並べて見ると、次の音節の子音が無声音であれば、w>fと無声音化し、有声音であれば、f>wと有声音化していることになる。

語基ハラの場合も、第二音節の子音が[r]という舌音、つまり有声音であるた

⁸⁵ 小学館『古語大辞典』(1983)には、「散り乱れたさま」を表すワラワラの用例として、(50)と並んで「大和物語にはしのぶ、忘れ草、同物なりといへり。ただし、わらわらとあるは忘れなり。」(八雲御抄・三)、「やせ衰へたる者わらわらとある綴りばかり着て、まことにあやしげなり。」(異本発心集・一)など、中世文献の用例が記載されている。また『日本国語大辞典 第二版』のワラワラの項にも「人の形にも非ず、やせ衰たる物のわらわらと有る、つづり許り被て実に奇しき也。」(私聚百因縁集〔1257〕九・一五)の例が挙げられている。

め、第一音節ハが[f]>[w]のように有声子音化したと考えられる。同氏の所論は上代日本語について言及したものだが、[f(=ϕ)]と[w]は共に両唇音であり、また調音方法も摩擦音と接近音で近似していることから、ハラハラの[fa]も[wa]に近かった可能性がある。よってハラハラは、バラバラだけでなくワラワラという子音交替も起こしたと考えることができるのである。ただし、このワラワラの意味用法は濁音形バラバラと特に変わらず、意味の分化を担うには至っていなかったようである。

さて近世文献における例を見ると、(51)(52)のように「一つのかたまりを細かく分ける」動作、即ち「分裂」を表す意味用法や、或いは(53)(54)のように中世にも見られた「纏まりのないさま」を表す用法のほとんどを、濁音形バラバラが担っている点に特徴がある。

(51) 又かうじ屋から蟬の大ききしたる油虫ども数千疋わたりきて、五器箱をか

ぶり、…(中略)…、屏風・扇をばらばらになし、…(西鶴織留・巻四)

(52) 木曾が胸板射通して。八本の肋骨ばらばらにしてくれんと。(ひらかな盛

衰記・第二)

(53) (北八) エエひつばるな。ソレまくぞまくぞ トよいかげんに、ばらばらとぜにをほうり出せば、

こつじきどもめいめいひろひて… (東海道中膝栗毛・五編追加)

- (54) とかく二人に死脈が打つどこもかしこも一時に。潮のさいて来る如くばら
ばらと首尾悪く。元より理をもつ女ども理窟を詰めて恨泣。(重井簡・中之巻)

この「語基バラ＝纏まりのないさま」という形態と意味との結びつきは、近世の早い段階で用例(55)のような名詞を伴った複合名詞を形成していることから分かるように、近世初期以前には定着していたと考えられる。また近代以降にも(56)(57)のような複合名詞や複合動詞が形成されている。

- (55) 佛神に詣でけるにも置綿・ばら緒の雪踏音高く、…(好色一代男・第三
〔是非もらい着物〕)
- (56) 保吉はばら銭を探りながら、「たけくらべ」、乙鳥口の風呂敷包み、燕子
花、両国、鐺木清方、一その外いろいろのものを思い出した。(あばばば
六)
- (57) 十四五人ばかりの客が、二つ三つの火鉢を中心にして、よごれた座布
団の上にすわっている。間々にばら蒔いてある座布団は跡から来る客を待
っているのである。(青年・六)

ところで近世以降、語基バラ派生語は専ら「具象的な状況」における「纏まりのないさま」を表していたが、これに対し「心的に纏まりなく、乱れるさま」を表す意味用法は清音形ハラハラが担うようになる。ハラハラは中世から近世に渡って「落涙」の意味との結びつきが強かったが、近世後期(58)のような用法が用いられ始めてからは徐々にその出現頻度が高くなり、現代文献においてはこの意味用法が最も一般的なものになっている。

(58) …廿四五のよめらしき女。七十あまりのめくらばあさま、姑と見えて、法体したる人の手をひき、さくろ口より付そひいづ

る。もつとも、手をあてて、はらはらするてい(よめ) おあぶなうございますヨ。(浮世風呂・二編
卷之下)

(59) 宗助は弟を見るたびに、昔の自分が再び蘇生して、自分の眼の前に活動している様な気がしてならなかった。時には、はらはらする事もあった。また苦々しく思う折もあった。(門・四)

近代以降、落涙の意味を担うオノマトペがハラハラからホロ系オノマトペへと移行する現象と対応するように、ハラハラを中心義は「落涙するさま」から「心的乱れ」へと移行しているが、この意味変化に影響を与えたのが「具象的乱れ」を表すオノマトペ、バラバラだったのではないだろうか。同じ「乱れ」を描写するにおいて「具

象的乱れ」と「心的乱れ」との差別化を図るため、既に「具象的乱れ」を表す語として定着していたバラバラの清音形であるハラハラに、新たな意味が付与されたと考えられるのである。

以上、これまで考察してきた「散らばるさま」を表すハラ～ホロ系オノマトペの意味変化の流れを図に示すと以下ようになる。



<図 13> ハラ系派生語の<動き><さま>に関する意味変化の様相

5.3.2.2.3 語基ホロ系派生語—<さま>をプロフィール

語基ホロ系派生語は中世頃まで、特に落下や分散・分裂という意味用法において語基ハラ系派生語と類似しており、前述の用例(18)’と(28)’のように、両者の意味の相違を明らかにするのは難しいものであった。もちろん、(28)’ホロホロは「こぼれる」との共起性が特に強く、また近世文献においては(37)’ホロリが一粒という

形状を表すようになる点から、語基ホロ自体に小さな(粒状の)ものの落下するイメージが内包されているとも考えられ、ここにハラとの差別化を一応図ることができる。しかし「分散・分裂」という大きな意味の枠において、両語基にはそれほど差異はなかったと考えられる。

(18)' しばし斗ありて、やをばかりなる猪のししの出でて、石をはらはらとくだ

けば、火きらきらといづ。毛をいらかして、走てかかる。(宇治拾遺物語・一

〇六)

(28)' 火針ヲ赤ク焼テ、頬ヲトヲシタレバ、米ノホロホロトコボレテケリ。(沙石集・

卷三〔二〕)

(37)' エ、エ、丹さんト男の顔を見て、涙をホロリと膝のうへ、… (春色辰巳

園・初編 卷之二第三回)

両語基の間に明確な違いが現れるのは、近世、特に近世中期頃から、語基ホロが濁音形語基反復形であるボロボロという形で度々「卑しい身分・みすばらしさ」を示すようになってからである。

(60) (手代二)「すてられる神あれば、たすけられる神もありがてへか。」(萬々)「をん

ぼろぼろ、びんぼうなりたや、そわか。」(莫切自根金生木・上一)

(61) 地もの好のぼろツ買といふ者が性悪でいかねへものさ。(浮世風呂・二編

巻之下)

用例(60)は金持ちの主人公が、貧乏になりたいがために陀羅尼真言の呪文⁸⁶に貧乏を象徴するボロボロという語を掛けて唱えている場面を表すが、「ほころび破れた服を着た人＝貧乏」というメトニーによる意味拡張が見られる点で興味深い。(61)も「ぼろツ買＝身分の低い女をもてあそぶ事」を指し、「貧乏＝卑しい身分」というメトニーによる意味拡張が見られる。

もちろん、中世文献においてもボロボロには衣服が破れ、ほころびた様子を表す用例が見られるが⁸⁷、近世中期以降は(62)のように語基形ボロの形で「ほころび破れた衣服」を表す名詞としても用いられており、「ボロ＝ほころび破れた服＝貧乏＝卑しい身分」というイメージの連鎖による意味拡張が行われたと考えられる⁸⁸。

⁸⁶ 大系本『黄表紙 洒落本集』(p.117; 頭注24)によると、陀羅尼(だらに)・真言の呪文は唵(おん)を最初におき莎婆訶(そわか)で結ぶとされる。用例(60)は、薬師如来の真言「唵呼盧呼盧旋荼利摩登祇莎婆訶(おんころころせんだりまとうぎそわか)」などに擬したものとされるが、真言の「(おん)ころころ」の部分に貧乏を彷彿とさせる「ボロボロ」を掛けて、祈願の呪文めかした文言となしている点が、笑いを誘う仕掛けとなっている。

⁸⁷ 「昔は人の装束もなへなへとして有ける。されば齋信の大納言の消息に、先代之時、節会袍借獻などかかれたんなるは、節会の袍とて、ぼろぼろとある物の人にかすなどがありけるとぞ。」(古今著聞集・巻第三〔政道忠臣・第三〕)

⁸⁸ 近世文献には「ソレお前の帷子は。どこもかしこも綻びて裾廻りがばらばら。」(夏祭浪

更にここから生れる「ひどく劣ったもの」というイメージは蔑みの心理を誘発し、(63) ボロクソという言葉をも生み出している。

(62) かかアどのは長屋中で評判の引ずりよ。うぬが嬰兒にはかまはねへで、
髪頭ばつかり作り立て、亭主にはぼろを下させるか、屎小便もかけながしで、
しめしを一つ洗ふではなし。(浮世風呂・二編 卷之上)

(63) あのお方の事を…(中略)…皆がぼろくそに言うて…(人情穴探意の裡
外・二)

ところで語基ボロは「ひどく劣ったさま」という意味を含むことにより、単純にほころび破れたさまを表すだけでなく、様々な名詞に掛かって「破れかぶれのひどい状態」を表すようになる。近代以降の用例を挙げる。

(64) けれども毀れかかったようなぼろ自動車だったのが、結句幸で、調子の
悪い機関の音に遮られて、その囁くつもりの声を、却って張らなければなら
ないくらいだった。(多情仏心・後篇)

花鑑・第八)のようにバラバラが衣服のほころびを表す用例も見られ、ボロボロとの区分が未だ明確でなかったようである。しかし、語基ハラは単純に分裂・分散の意味を表していたため、この用例も或いは前述の「乱れ」を表す意味用法であったとも考えられる。

近代以降の語基ボロは、(64)「ボロ自動車」の他にも「ボロ船、ボロ紙、ボロ毛布」といった複合名詞における接頭語的な用法が目立つようになる。これらはいずれも単純に破れてほころびのあるくさま>を表すわけではなく、そこに「古ぼけて薄汚い」というニュアンスが含まれている。

第二節で現代語の用例として挙げた(8)国内状況がひどいさま、或いは下記(65)のような精神的に傷つけられて破れかぶれのひどい状況を表すボロボロも、具体的描写から抽象的描写への意味拡張を示す用例であり、そのく程度のひどさ・はなはだしさ>に焦点が当たっていると言える。特に「ボロ儲け」や「ボロ負け」のような複合名詞におけるボロに、この意味が最も端的に現れている⁸⁹。同様に「ほころび」という具体的なくさま>を表す語の意味が、用例(66)のような行動におけるほころび、つまり人の短所や欠点、失敗という意味へと転化している点にも注目すべきであろう。

(65) しかし風間はもう待ちきれなかった。「警察に追い回されっぱなしで精神

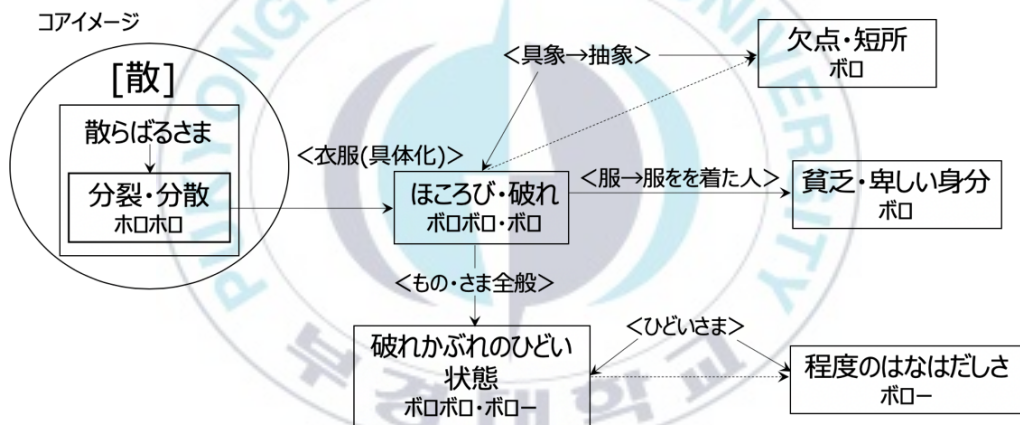
がボロボロなんだ。… (動く家の殺人)

⁸⁹ 『日本国語大辞典 第二版』には近世文献に「なんと、ぼろい仕事ぢやないかい。」(傾城三拍子・上)という用例が現れる。本研究では近代文献に「ぼろい金儲けの転がっていそうな上海行が、…」(あらくれ・七十九)が抽出できたが、これらの用法は『日本国語大辞典 第二版』でも言及されているように、ボロのく程度のひどさが「きわめて容易である」という意味へと拡張したものと考えられる。

(66) …美術を愛好する人々と膝を併べても、兎に角余りぼろらしいぼろは出さ

なかったが、… (或る女・後篇二十七)

以上、分裂・分散を担うボロ派生語のうち、特にボロボロについて「破れほころびたさま」という意味を基軸に、多様な展開を見せていることが確認できた。これを図式化すると、以下のようになる。



<図 1 4 > ホロ系派生語の<さま>に関する意味変化の様相

第6章 語基ユラ～ユル系派生語の意味変化

6.1 はじめに

上代文献における語基ユラ～ユル系派生語のうち、特にユラについては阪倉篤義(1966:350-351)や工藤力男(1998)⁹⁰らによる詳細な考察が行われており、既に論が出尽くしたようにも見える。しかし、語基ユラと母音交替関係にある語基ユルとの関係からその意味を再考することで、上代文献に現れる語基ユラ系派生語の意味について、これまでとは異なる捉え方ができると考えられる。また、現代語において似て非なる意味を有する語基ユラ～ユル系派生語同士が、元を辿れば同じコアイメージから派生していたということを明らかにし、その派生の様相を通時的に考察することで、両語基派生語の共通点や相違点をより明白にさせることができると考えられる。

⁹⁰ 工藤力男(1998)「象徴詞と接頭辞－ぬなともゆらに考－」『万葉』第166号

6.2 共時的観点からの考察

語基ユラ～ユル派生反復形オノマトペ、ユラユラとユルユルの意味を辞書で確認すると、両語は①動作や気持ちにゆとりがあるさま、②ゆれるさま、という二つの意味で共通している。しかし、ユラユラは②が主たる意味であるのに対し、ユルユルは①の方が一般的な意味となっており、両者は主軸となる意味を異にしている。またユルユルには①②以外にも「締まりのないさま」という、ユラユラには見られない意味が含まれており、この点も両語の違いを語る上で見逃せない。では、NLBによるコロケーション調査の結果はどうであろうか。

＜表 7＞ 現代語においてユラユラ・ユルユルと共起しやすい動詞

ユラユラ		ユルユル	
∅	～と	∅	～と
揺れる	揺れる	動く 歩く 話す 物語る 申し上げる 出かける 昇る 解ける 駆ける 遊ばす	走る
する 揺らす 動く	立ち昇(上)る		進む
	漂う		上げる 振る 登る 上る 降る
揺らめく 燃える 揺る 漂う 渡る	揺らす 舞う		

上の表を見ると、ユラユラが「揺れる・揺らす」のような「揺れ」に関わる動詞と共起しやすいのに対し、ユルユルの方は「歩く・走る」のような移動を表す動詞と共起する例が多いように見受けられる。コーパスで実際の用例を見てみよう。

- (1) 身体の中で、ほの暗く青い水がゆらゆらと所在なく揺れている。(プラチナ・ビーズ)
- (2) 啄かれた黒い土から、ゆらゆらと立ち昇っているのは、春の陽炎だけである。(達磨峠の事件)
- (3) 早足の人、ゆるゆる歩く人、黒い革ぐつ、青いパンプス、白いスニーカー…。(青い天使)
- (4) ゆるゆると走ってきた軽トラは私の横で止まった。(もうひとつのラブソング)
- (5) 今まで少しきつかった洋服も、もう間もなくユルユルになるハズ。(うつみ宮土理の根こんぶ健康法)

辞書的意味でも確認した通り、ユラユラは(1)のように「揺れる」(或いは「揺らす」)と共起する例が多く、(2)のような「揺れる」と共起しない例においても、「陽炎(かげろう)」の揺らぐ＜動き＞が想起される。他方、ユルユルは(3)(4)「歩く・走る」のように移動に関わる動詞と共起して「ゆっくり」という意味を表すものがほとんどで

あり、辞書で確認したような、「揺れ」に関わる語との共起性は見出しにくい。むしろ、(5)のように辞書的意味に見られる「締まりのないさま」を表す用例が見受けられる。

またユラユラ～ユルユルの有するこれらの特徴は、語基ユラ～ユル系派生動詞である(6)(7)ユラグと(8)(9)ユルムの例に、より顕著に表されているようである。

- (6) そのガラス面の影に何の反射か、仄かな光が揺らいでいる。(仮装)
- (7) また、専門の絶対性もすでに揺らぎ始めている。(日本とは何なのか)
- (8) 自分がアカデミー会員として遇せられるところを想像すると、自ずと頬が緩んだ。(葬送)
- (9) 自己に対する厳しさが必要とされる。ちょっと気がゆるむとすぐ何日分かのインタビュー結果が溜まってしまう。(時間の旅 空間の旅)

ユラグは(6)具象的、(7)抽象的な事柄に関わらず揺れる<動き>を表すが、ユルムは「揺れ」ではなく「締まりのないさま」を表す。特に本研究の調査では(8)(9)のようなイディオムが多く抽出された。また語基ユル派生語にはユルヤカという形容動詞も見られるが、こちらは(10)形態や(11)音などが「ゆったりしたさま」という抽象的な意味を表している。

(10) さらに進むと、古い運河があり、楼閣をのせた石造りのゆるやかな太鼓

橋がかかっている。(もっと知りたいベトナム)

(11) …無表情のまま唇を固く結び、看護婦の歌ってくれるゆるやかな日本の

子守歌に合わせて首だけを小さくゆらしていた。(冬物語)

ところが古語辞書類で語基ユラの意味を確認すると、『時代別国語大辞典 上代編』に「擬声語。玉や鈴などの触れ合う音をあらわす。」とあり、『角川古語大辞典』にもほぼ同じ意味記述がある⁹¹。また『岩波古語辞典』にも「①玉などがふれ合って鳴る音。②ゆるやかなさま。」と＜音＞を担うとする記述が見られるが、現代語の語基ユラにはそのような意味用法はなく、上代語と現代語の間に意味の乖離が見られる。ただし、「②ゆるやかなさま」は現代語における「ゆったり」という意味合いに通じており、聴覚的意味の実態を明らかにすることで、上代語における＜音＞という意味用法の違和感を解消できると考えられる。

上代文献に現れる語基ユラの聴覚的意味は何を指すのか、そしてその意味はいつ失われたのかを中心に、等価的交替関係にあるユルの意味と絡めて次節以降で考察することにする。

⁹¹ 擬声語。玉や鈴などが触れ合って立てる音。

6.3 通時的観点からの考察

6.3.1 上代文献に現れる各語基のコアイメージ

前述の通り、上代文献における語基ユラ〜ユル系派生語は聴覚的意味を有していたという点で、現代語とは異なる。まずは語基ユラ系派生語について、上代の用例を確認してみることにする。

(12) 足玉も 手珠もゆらに 織る機を 君が御衣に 縫ひ堪へむかも（万葉集・卷十2065）

(13) 遠近に 鳥踏み立て 白塗の 小鈴もゆらに 合はせ遣り（万葉集・卷十九4154）

(14) 海人少女ども 纓がせる 領布も照るがに 手に巻ける 玉もゆららに 白栲の 袖振る見えつ（万葉集・卷十三3243）

(12)のユラは「手珠をじゃらじゃらと鳴らして」⁹²、「手につけた飾り玉もゆらゆらと

⁹² 大系本『万葉集三』(p.99; 頭注)参照。

鳴るやうにして」⁹³、(13)も「ユラは擬声語。今日のジャラジャラにあたる」⁹⁴、『『ゆら』は鈴の音の形容」⁹⁵と、いずれも鳴る音そのものを表すとされている。これは(14)ユララの解釈においても同様である⁹⁶。

ただし『日本古語大辞典 語誌篇』にはユラ・ユララがいずれも「震揺の意」(p.1329)を表すとあり、阪倉氏(1966:350)もまた、ユラは「ゆれあひながらチラチラ映える、視覚的にとらへられた玉のすがたであり、そして、それと同時に、あひよつてチロチロなる、聴覚的なひびき」である故、「聴覚的な意味にかざるべき積極的な根拠はない。」と述べている。このような考え方は工藤氏(1998:45)にも見られるが、氏は(14)について「領巾と環がそれぞれに陽光を照り返すさまと見るべき」だとし、ユラユラは現代語でいうキラキラに相当すると解釈している。

上代語のユラユラを、チラチラやキラキラのように何かが照るさまを描写する語として捉えることができるかどうかについては更なる検討が必要だが、工藤氏の述べるように「かかる多彩な用法こそ、ユラの本性であったのだろう。」(同上)という意見については筆者も同意するところである。ユラが<音>を表すと言うのなら、その<音>が鳴るための<動き>が伴っていなければならず、語基ユラに関してはそ

⁹³ 澤瀉久孝『万葉集注釈 卷第十』(p.281)参照。

⁹⁴ 大系本『万葉集四』(p.324; 頭注)参照。

⁹⁵ 『万葉集注釈 卷第十九』(p.31)参照。

⁹⁶ 大系本『万葉集三』(p.347; 頭注)は「玉もゆららに」の現代語訳を「玉を鳴らして」としている。また山口仲美(2012:右17-18)は「ちんちん音を立てるほどに」という現代語訳を付して、やはり音を表す語として解釈している。特に山口氏は鈴を鳴らすことの呪術的意味や実用的役目(動物除け)について示し、音を立てることの意義について説いている。

れが「揺れ」であったということだろう。これは、上代文献において語基コロが回転という＜動き＞を表しつつ、その回転に伴う＜音＞まで想起させる語であったことと同じ構造(「音」⇔「動き」という力学関係)として、捉えることが可能である。

ところで上代文献のユラ系派生語について、オノマトペ以外の語を抽出しその意味を検討すると、必ずしも「揺れ」やそれに伴う＜音＞を表しているとは言えない意味用法が含まれていることに気付く。

(15) 初春の 初子の今日の 玉箒 手に執るからに ゆらく⁹⁷玉の緒 (万葉集・卷第二十4493)

(16) 即ち御頸珠の玉の緒母由良^{ゆら}邇 此の四字は音を以ゐよ。下は此れに效へ。 取り由良^{ゆらかし}迦志
て、… (古事記・上卷[三貴子の分治])

(17) 王の 心^{ゆら}を緩み 臣の子の 八重の柴垣 入り立たずあり (古事記・下卷
[清寧天皇])

⁹⁷ 土橋寛(1965)はこのユラクについて、正倉院にある玉箒(タマフリの呪物)の玉はビーズより小さい玻璃製で、「とても音を立てるようなものではないから、このユラクは揺れ動く意としなければならぬ。」(pp.168・169)と述べている。玉箒の揺れ動くさまは生命力を振るい立たせるものであり、ユラクがその音よりも動きに焦点の置かれた語であると捉えるのも、至極当然のことであろう。とすると、大系本に見られる「浅茅原 小谷を過ぎて 百伝ふ 鐸響くも 置目来らしも」(古事記・下卷[顕宗天皇])の「響く」のように、音のみに焦点を当てて訓読することの妥当性には疑問を感じざるを得ない。

『日本国語大辞典 第二版』によると(15)ユラクは「玉や鈴などが触れ合って音を立てる」とあり、その他動詞形(16)ユラカスも「音を立てさせる」という動きを伴う聴覚的意味を有している。しかし用例(17)ユラミ⁹⁸は揺れる動きや音ではなく「心がのんびりとしている」(大系本『古事記 祝詞』p.326; 頭注3)という意味で用いられており、これまで見た用例とは意を異にしている。また、この(17)と類似する意味用法を持つ語は日本書紀にも見られるが、こちらは(18)(19)のように語基ユル系派生語であるという点に違いが見られる。

(18) 此上宮の王等の性^{ゆる}順くして、都て罪有ること無くして、入鹿が爲に害されたり。(日本書紀・卷第二十四〔皇極天皇〕)

(19) (今皇子は)…性^{ゆるらか}是^{ひとなり}寛に和にして、務、矜び宥めたまふに存します。(日本書紀・卷第十九〔欽明天皇〕)

(18)ユルシも(19)ユルラカも性^{ひとなり}、即ち人柄が「ゆったりと温和なさま」を表し、上記(17)～(19)に現れる語基ユラ～ユル系派生語はいずれも「ゆったり・のんびり」という＜余裕のあるさま＞を内包していると捉えることができる。特に両語基から各々派生した形容詞(17)ユラシと(18)ユルシが同義であることから、両語は＜余

⁹⁸ 形容詞ユラシの語幹に接尾語ミの接続した形態。ミ語法とも言われる。

裕のあるさま>というイメージを共有した等価的交替関係にあると言えよう。

ところで上記以外にも上代文献には語基ユル系派生語が度々見受けられるが、それらはどのような意味を有しているのだろうか。

(20) …引き結へる 葛^{ゆる}目の緩び、取り葺ける 草の噪き 古語にそそきといふ。 なく、…

(祝詞・大殿祭)

(21) 梓弓 引きみ弛へみ 来ずは来ず 来ばそ其を何ど 来ずは来ば其を

(万葉集・卷十一2640)

(22) 今は吾は 侘びそしにける 氣の緒に 思ひし君を ゆるさく思へば (万

葉集・卷四644)

(23) 朝獵に 五百つ鳥立て 夕獵に 千鳥踏み立て 追ふごとに ゆるすこと

なく (万葉集・卷十七4011)

(24) 憤には ゆるふことなく 須加の山 すかなくのみや 戀ひ渡りなむ (万葉

集・卷十七4015)

(25) 常に備を設くべし。豈能く柝をゆるべむや。(日本書紀・卷第十九〔欽明天

皇〕)

上の用例におけるユルス・ユルフ(ユルブ)⁹⁹など、語基ユル系派生語の持つ意味には<緊張状態の緩和>というイメージが根底にあると考えられる。例えば(20)結んだ葛目(綱)や(21)弓の緩みは、固い結び目や張りといった“緊張”を前提にしたものであり、このイメージを基盤にして、(22)には命の綱と思っていた君を掴んでいた手を緩め、手放そうという一種のメタファー的意味拡張が見られる。同様の意味拡張は(23)においても見られ、ここでは「手を緩めること＝逃がすこと」という意味で用いられている。更に(24)心(=気)を緩めること(ユルフ)、(25)警護を緩めること(ユルブ)は、具象的な緩みから抽象的な緩みへの意味変化であり、上記の例はいずれも[緩]というイメージに収斂されると解釈できる。そしてこの[緩]は、前述の(18)ユルシ(19)ユルラカ、ひいては(17)ユラシの持つ<余裕のあるさま>のイメージとも重なる。

以上のことから、語基ユラ～ユルは<余裕のあるさま＝緩>をコアイメージとして有すると想定できる。また、そう捉えることで(15)(16)の音を表すユラも実は「余裕のあるゆったりとした音」を表していたと考えられるのではないだろうか。

我々は現代語の「ユラユラ＝揺れ」というイメージに拘泥し、上代文献における擬音語としてのユラに対してもまた、揺れるイメージから派生する<音>を表すものと考えてしまいがちである。もちろん、ユラは上代より揺れる<動き>、そしてそ

⁹⁹ ユルフ(四段・下二段)については注釈者によって清濁両様の形が見られるが、本研究では『時代別国語大辞典 上代編』に従い、清音形を認める。

れに伴う＜音＞までも包括した語ではあったが、母音交替形ユルとの関わりから考えると、必ずしも「揺れて鳴る音」のみを指し示したわけではなく、その「ゆったりと余裕のある、緩やかな音色」をも表していた、というこれまでとは異なる解釈が可能になるのである。

以上を踏まえ、等価的交替関係にある語基ユル～ユラのコアイメージとそのカテゴリー別の意味を記述すると、以下のようになると考えられる。

＜表 8＞ 上代文献に現れる語基ユラ～ユルのコアイメージ

	ユラ	ユル
コアイメージ	[揺(+緩)]	[緩]
音	揺れによる接触音 ゆったりとした音	—
動き	揺れる動き	—
さま	緊張の緩和・余裕のあるさま	

語基ユルは前述の通り、指示する語如何に関わらず専ら[緩]、即ち、＜余裕のあるさま＞を描写する。特に上代語において語基ユル系派生語は心の余裕や具象的な緩み、そこから派生した心的緩みなどを多様な状況について描写しており、派生する形態も多様で、意味拡張も早くから行われていた。しかしこの時点ではま

だ、現代語における「ゆるやかな坂道」というような形状を描写する意味用法は見られない。

他方、語基ユラ系派生語は語基ユル同様[緩]のイメージを有しつつ、動的な「揺れ」に関わる側面も描写しており、それ故、動きに伴う＜音＞に関わる描写も可能であった。しかし前述した通り、現代語の語基ユラ系派生語においては聴覚的意味は失われている。

これらのことを念頭に置きつつ、次項では本項で得た語基ユラ～ユルのコアイメージを元に、現代語において我々が用いる意味用法が形成されるまでの過程を通時的に観察し、意味獲得の様相を考察していこうと考える。

6.3.2 中古文献以降に現れる各語基派生語の意味変化

本項では、前項で抽出した上代文献における語基ユラ～ユルの[揺]と[緩]という二つのコアイメージを元に、特にオノマトペを中心とした派生語の意味が、中古文献以降どのように変化し、現代語における意味を獲得するようになったかについて考察する。

6.3.2.1 語基ユラ～ユル系派生語―[揺]に関わる意味の拡張

上代に[揺]に関わる意味を有していた語基ユラは、中古文献以降もやはり[揺]を核とした意味を担い、上代文献に見られたような、鈴を揺らす動きを描写する用例も見受けられる¹⁰⁰。しかし、ほとんどは(26)ユラユラのような髪揺れる動きを描写する例に現れ、『落窪物語』には(27)ユラメクという派生動詞も現れる¹⁰¹。ただしユラユラにもユラメクにも、上代文献においてユラが有していた<音>のイメージは既になく、専ら視覚的意味、即ち「揺れ」を表すのみとなっている。

(26) 髪は、扇をひろげたるやうに、ゆらゆらとして、顔は、いと赤くすりなして立てり。(源氏物語・若紫)

(27) …髪は此比しもつくろひければ、いとうつくしげにて、長に五寸ばかりあまりて、ゆらめきいこうしろで、…(落窪物語・卷之一)

中古文献で主に髪揺れる動きを表していた語基ユラ派生語は、中世文献においてはその主体が多様化し、(28)蛇の体をくねらせて進む動きや(29)波の上

¹⁰⁰ 「鈴は亮振る藤太巫女、目より上にぞ鈴は振る、ゆらゆらと振り上げて、…」(梁塵秘抄・卷第二)

¹⁰¹ 大澤(伊藤)理英(2018)は、(27)ユラメクについて「目には見えないユレ、例えば体感による揺れなどはユラメクでは表せない。」(p.240)と述べている。これは逆説的に、ユラメクが視覚に頼った表現であるということを意味し、語基ユラは視覚的意味の強い語基であったと考えることもできる。

の船が)揺れの描写などにも用いられるようになる。(29)に見られるリ接続形ユラリは中世文献が初出である¹⁰²。

(28) …此ふみ返したる女のしりに立ちて、ゆらゆらとこの蛇の行ば、… (宇治拾遺物語・五七)

(29) ゆらりさらりとなみのうへのさかもり、はうこぐさをさかなに、… (狂言歌謡)

近世以降は揺れる主体が更に多様化し、(30)尾の揺れや(31)螢の飛ぶさま、或いは(32)人が落ち着きなく体を揺らすさまについても用いられている。

(30) …老さらぼひたる狐の、ゆらゆらと尾を引て、五つ六つうちつれだちて、ひざのもとを過行。(新花つみ)

(31) 大螢 ゆらりゆらりと 通りけり (おらが春)

(32) ただ、そわそわして落ちつかず、絶えず身体をゆらゆら左右に動かして、酒ばかり呑んでいるのである。(善蔵を思う)

ところで語基ユラは中古の頃に(33)ユル(揺る:四段)という派生動詞を生み出す

¹⁰² ユラリは(29)のように揺れるさまを描写する例よりも、後述する「余裕のあるさま」の意で用いられることが多い。これについては次項で詳しく述べることとする。

が、その一方で上代文献に見られたユラクの母音交替形(34)ユルグ(中古以降ユルク→ユルグと濁音化されたと推定)という動詞も派生させている。いずれも[揺]のイメージを担うが、中世初期の文献『発心集』にはユルグと共起する語として(35)ユルユルというオノマトペが現れる¹⁰³。

(33) 御髪は…(中略)…隙なく揺りかかりて、玉光るやうに見え給フ。(宇津保

物語・蔵開上)

(34) 御輿の帷子のうちゆるぎたるほど、まことに、頭の毛など人のいふ、さら

にそらごとならず。(枕草子・二七八)

(35) この家ゆるゆると揺るぎて終に柱の根抜けぬ。(発心集・四)

先に確認した通り、語基ユルは上代文献において「揺れ」に関わる意味は担っておらず、専ら[緩]のイメージを基盤とした意味を表していた。だが、中世文献に見られる(35)ユルユルは、上代文献に見られる語基ユラ派生オノマトペ、ユラユラの母音交替形として現れたものと考えられ、それ故、語基ユラの持つ[揺]のイメージが反映されていると言えよう。ただし、ユルユルのこのような意味用法は近代文

¹⁰³ 『発心集』の例は大系本データベースには記載されておらず、用例は小学館『古語大辞典』より抜粋した。同辞典には近世文献『おあむ物語』の用例も挙げられているが、これも大系本データベースでは抽出できなかった用例である。

献以降、ほとんど見られなくなる。その原因としては、近代以降は語基ユラが[揺]を描写する語として定着しており、語基ユルと[揺]との繋がりが認められにくい状況にあったことが考えられる。

さて、この「揺れ」を表すユルユルという語が現れた中世には、これと母音交替関係にあり、且つ[揺]に内包される<不安定なさま>をスキーマとして派生した意味を持つ(36)ヨロヨロや、その動詞形(37)ヨロメクという語が生み出されている。ヨロヨロは人が揺れて「不安定に歩くさま」、即ち「おぼつかない足取り」を描写しており、(37)ヨロメク(四段)はまさにその動きを表す派生動詞である。

(36) 片手にはあらめをひろいもち、…(中略)…歩むやうにはしけれ共、はかもゆかず、よろよろとして出きたり。(平家物語・卷第三)

(37) …左へはよろよろ、右の方へはよろよろ、よろよろとよろめけば、…
(出家座頭狂言〔地藏舞〕)

近世以降、ヨロヨロの「おぼつかない足取り」は<弱々しいさま>というイメージに繋がり、(38)のように足に力が入らず、なんとか立ち上がる様子を表す用法が生じる。また近代文献では「足」以外のものを主体としたもの、例えば(39)弱ったドジ

ョウの動きや(40)弱々しい声を描写する用例なども現れる¹⁰⁴。更に現代文献(41)では飛行機の勢いのない飛び方という、生物以外のものを主体とした用例も見受けられ、＜弱々しいさま＞というスキーマを介した「力や勢いのないさま」という意味が、幅広く用いられていることが確認できる。

(38) 「エエ老ぼれめ、何をしやアがる。」ト宗助よろよろしながら、又立上るを、

… (小袖曾我薊色縫)

(39) 蓋を取ると、明日の仕込みにどじょうは生酒に漬けてある。まだ、よろりよ

ろり液体の表面へ頭を突き上げているものもある。(家霊)

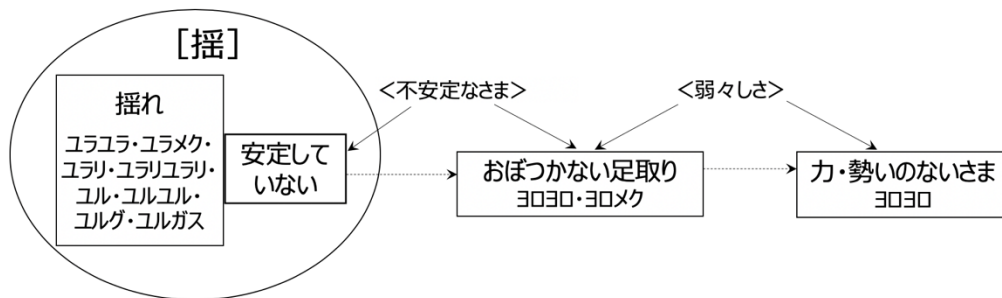
(40) 自分の声は威嚇されるたびによろよろする。そうして小さくなる。(永日小品)

(41) ギガントファルターの方は、そのままよろよろと低空で飛行を続けた。(アプサラスリターンズ)

[揺]に関わる語基ユラ〜ユル系派生語の意味拡張の様相を図式化すると、以

¹⁰⁴ 石川啄木『鳥影』には「慌しく凧笛が鳴つて、ガタリと列車が動き出すと、智恵子はヨラヨラと足場を失つて、思はず吉野に凭掛つた。」(筑摩書房本)にヨラヨラという特殊な語が見られる。これは足のおぼつかなさを表すヨロヨロから派生したものであろう。一方、ヨロヨロの「弱々しいさま」の主体が物の場合、近世以降はヨレヨレという語が用いられるが(「ヨレヨレのシャツ」など)、これは「弱々しさ」の持つく張りのなく、くたびれた感じ＞が、「古くなってしわだらけのさま」を指すようになったと考えられる。

下ようになる。



<図 15> ユラ～ユル系派生語の[揺]に関する意味変化の様相

以上、語基ユラ～ユル系派生語に見られる[揺]に関わる意味拡張の様相について考察した。上代から現代に至るまで「揺れ」に関わる意味を担っているのは主に語基ユラ派生語だが、中世にはユルグ・ユルユルのような語基ユル系派生語も[揺]を表す語として用いられるようになる。ただし、これは上代文献に見られた語基ユラ系派生語ユラクやユラユラの母音交替形として生じたものと考えられ、また近代以降は用例自体が見受けられなくなることから、一時的な事例として扱うべきであろう。

他方、中世には「揺れるさま」という意味を担うユルユルの母音交替形として、ヨロヨロという語が生じたが、これは[揺]の持つ<不安定なさま>をスキーマとした「おぼつかない足取り」、ひいては「力や勢いの弱いさま」という意味を獲得して、現代語に至るまで用いられ続けている。つまり、ヨロ派生語を含め、現代語にて用

いられる語基ユラ〜ユル系派生語は、上代の語基ユラから派生したものであるというのが、概略的な流れであると言える。

ところで、筆者は先に(26)'(28)'などは髪や蛇の体の「揺れるさま」を表すと述べた。しかし『角川古語大辞典』ユラユラの項には「髪の豊かさを表す」という意味用法の例として(26)'が挙げられており、また「ゆっくりと進み行くさま」という意味記述の例として(28)'が見受けられる。

(26)' 髪は、扇をひろげたるやうに、ゆらゆらとして、顔は、いと赤くすりなして

立てり。(源氏物語・若紫)

(28)' …此ふに返したる女のしりに立ちて、ゆらゆらとこの蛇の行ば、… (宇治

拾遺物語・五七)

確かに(26)'はただ揺れるのではなく、なみなみとした豊かな髪が想起され、(28)'も蛇のゆっくりと体を揺らしていくさまをイメージすることができる。つまり、ユラユラは単に「揺れるさま」だけでなく、上代文献に見られたもう一つのコアイメージ、即ち[緩]に起因する意味も意識されているということである。そこで小節を改め、次に[緩]に関わる意味について考察することにする。

6.3.2.2 [緩]に関わる意味の拡張

6.3.2.2.1 語基ユラ系派生語

中古文献に見られる語基ユラ系派生オノマトペには「揺れるさま」と解釈すると文全体の意味が把握できなくなる用例がいくつかある。例えば(42)(43)などがそれに当たる。

(42) くつは蟲ゆらゆら思へ秋の野の藪のすみかは長き宿かは（好忠集・八月はじめ）

(43) 神ならばゆららさららと降りたまへ、如何なる神か物恥はする（梁塵秘抄・巻第二）

上記の用例はいずれも語基ユラが上代より有していた[緩]のイメージに即して解釈しなければならないが、(42)(43)とも共起する動詞が「ゆらくり行われるさま」、即ち＜時間的な余裕＞を描写すると考えられよう。

これに対し、中世文献の語基ユラ系派生オノマトペを見ると、中古文献にも見られた髪の豊かさを表す(44)ユラユラの他、(45)弓を引くさまを表すユラユラや(46)飛び降りるさまを表すユラリ、その反復形(47)ユラリユラリなど、多様な形態、多様な意味用法を持つオノマトペが現れる。特に中世文献には(46)ユラリという形態が

多く見受けられるが、『日葡辞書』には「ユラリト(ゆらりと) 副詞. さっと軽やかに跳んだり, 登ったり, または, 馬に乗ったりするさま.」と記述されている。

(44) 御ぐしくろゆらゆらとして、御せなか過ぎさせ給へり。(平家物語・巻第十一)

(45) …三人張ニ十五束三伏、ユラユラト引渡シ、二引兩ノ旗立タル舟ヲ指シテ、遠矢ニゾ射タリケル。(太平記・巻第十六)

(46) 築地よりゆらりととびおり給へば、弁慶太刀打ちふりてづと寄る。(義経記・巻第三)

(47) …畏って候とて、やがて馬より飛んでおり、ゆらりゆらりと立ち越ゆる。(鬼山伏狂言〔朝比奈〕)

『日葡辞書』ではユラユラもユラリと同義であるとされているが¹⁰⁵、上記(44)「髪の毛の豊かさ」を表すユラユラと、(45)ユラユラや(46)ユラリとは全く異なる意味を表しており、同義とは言い難い。しかし筆者は、これらの語を＜余裕のあるさま＞というイメージで一つにまとめることができるのではないかと考える。つまり(44)のユラユラは髪の毛の豊かさという＜物質的(量的)に余裕のあるさま＞を示すのに対し、(45)の

¹⁰⁵ ユラユラト(ゆらゆらと) 副詞. Yurarito(ゆらりと)の条を見よ.

ユラユラや(46)ユラリは<動きに余裕のあるさま>を表すと考えることにより、これらが<余裕>という共通のイメージを介して重なると言えるのである¹⁰⁶。

先に見たように、『日葡辞書』においてユラリの意味記述に「さっと軽やかに」とあるため、中世文献に現れる(46)ユラリは「素早い動き」を示すと捉えられるむきがある。しかし実際は「もたつかず余裕のある、軽々とした動き」を示していると考えた方が、語基ユラのコアイメージを反映した自然な解釈となるのではないだろうか。そう考えると、(45)ユラユラも「弓を十分に引く」のではなく「弓を軽々と引く」という<動きに余裕のあるさま>の描写であると想定することが可能である。

ユラユラには中古文献で盛んに用いられた(44)のような「髪の豊かなさま」を表す用法が存在するため、用例(45)も<量的余裕＝十分に>の意で解釈されるのが定説であった。しかしユラリ同様<余裕のある動き>と捉えた方が、「三人張」という強弓(張りの強い弓)を「軽々と引く」というコントラストによる印象付けの効果も際立つのではないだろうか¹⁰⁷。

ところで中古・中世文献には、ユラ系派生語としてユラフ(下二段)という動詞も現れる。

¹⁰⁶ ユラリユラリは『日葡辞書』に「馬に乗るなり、徒歩で行くなりして、悠然と行くさま。」とあるが、これも「余裕のあるさま」に通じると考えられる。即ちこれは<時間的(或いは心的な)余裕>を指すと言える。

¹⁰⁷ 「余裕のある動き」を表すユラリとユラユラとの違いは、接続する動詞の違いに影響されると考えられる。ユラリは飛び乗る、飛び降りるといった一回性の動きを示す動詞と共起するのに対し、ユラユラは弓を引くというやや時間的な長さのある動詞に接続している。

(48) 守、兵等ヲユラへムガ為不責討。(今昔物語集・卷第二十五〔第十三〕)

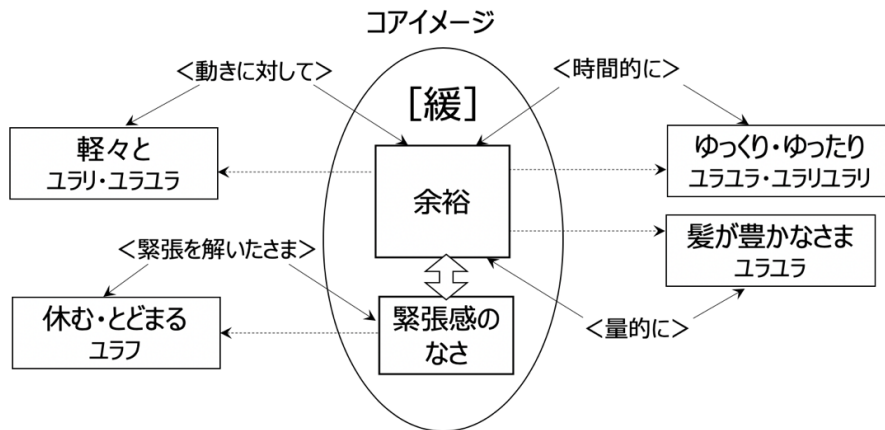
(49) けふは日暮ぬ、あすのいくさとさだめて、其日はよせでゆらへたり。(平家

物語・巻第一)

ユラフは「休む、とどまる」という意味で特に中世文献に度々見られるが、これは語基ユラの持つ[緩]のうち、＜緊張を解いたさま＞というイメージから展開した用法であると考えられる¹⁰⁸。

以上、中古から中世までの語基ユラ系派生語の[緩]に関する意味拡張の様相を図式化すると、以下のようになる。

¹⁰⁸ 工藤力男(1989)ではシヅクとシヅムという同じ語基から派生する動詞について「シヅムの動的に対してこちら(シヅク:筆者註)は静的な意味を表わすといわれている。」(p.117)と述べている。これは安藤正次(1924:266-267)を論拠とするものだが、このような動詞語尾の違いが意味の分化に影響するという考え方は、ユラフとユラクの間にも適用されうる。即ち、ユラクはユラの視覚的意味のうち動的な側面を動詞化し、ユラフは静的な面を動詞化したもの、という具合にである。



<図 16> ユラ系派生語の[緩]に関する意味変化の様相(中古～中世)

ただし近世以降、ユラフという動詞は見られず、また<余裕のある動き>をプロファイルした中世文献のユラリも、近世文献においては(50)など数例が残るのみでほとんど用いられなくなり、その意味は「揺れるさま」と融合して(30)’のように「ゆっくりと揺れながら動くさま」を表すものへと収斂されていく。そして語基ユラは、主に[揺]をプロファイルした語として定着し、[緩]のイメージは背景化する。

(50) 心よはくてかなはじとふり切て馬引寄。ゆらりとめせば巴御前も泣目をは

らひ。(ひらかな盛衰記・第一)

(30)’ …老さらぼひたる狐の、ゆらゆらと尾を引て、五つ六つうちつれだちて、

ひざのもとを過行。(新花つみ)

以上、[緩]のイメージを中心とした語基ユラ系派生語について考察した。上代より語基ユラは常に「揺れるさま」という意味を担っていたが、同時に[緩]というイメージも備わっていたため、中世文献にはこのイメージがプロファイルされた意味用法が、ユラリ・ユラユラの用例に現れる。しかし近世以降、ユラ系派生語の「揺れるさま」の意味合いが再び強まり、[緩]のイメージは背景化して、専ら「ゆったりと揺れるさま」を表すようになった。近世以降のユラ系派生語の意味は[揺]と[緩]の「融合物」(Lakoff1987:514)であり、どちらか一つの意味に限定できない。むしろそのことこそが、この語基の意味を如実に表していると考えられる¹⁰⁹。

6.3.2.2.2 語基ユル系派生語

次に語基ユル系派生語に関して、[緩]というイメージから意味が派生していく様相について考察する。上代文献において「心に余裕のあるさま」や「物が緩んでいるさま」など、多様な意味用法を有していた語基ユル系派生語だが、中古文献においてはそれらの用法も残しつつ¹¹⁰、様々な動詞に係って＜時間的に余裕のあるさま＞＝「ゆっくり」という意味で用いられる例が特に多く見られるようになる。

¹⁰⁹ 現代文献には「その男が拘束された胡座のまま、動けぬ俺と警部補を見て、ゆらりと笑った。」(SFバカ本)のように＜余裕のあるさま＞がプロファイルされている例も見受けられるが、一般的な用法ではない。

¹¹⁰ 「『…われをば人はいかがいふ』など人にとはせ給けるに、『<ゆるになむをはします>と、よには申す』とそうしければ、…」(大鏡・第六卷[太政大臣道長下])、「父おとどは、琴の緒も、いとゆるに張りて、いたうくだして調べ、…」(源氏物語・若菜上)などがそれに当たる。

(51) 網代ははしらせたる。…(中略)…ゆるゆると久しくゆくはいとわろし。(枕草子・三二)

(52) 花さそふ風ゆるに吹クタ暮に、…(宇津保物語・国譲下)

(53) 「月も日もかはりゆけどもひさにふる三室の山の」といふことを、いとゆる
るかにうちいだし給へる、…(枕草子・二三)

(54) 法ヲ説テ人ヲ教化スト云ヘドモ、自ノ勤ハゆる也ケリ。(今昔物語集・巻第十七〔第三十一〕)

(51)は車(網代)が「ゆっくり」通り過ぎるさまを¹¹¹、(52)は風が「ゆったり」と吹くさまを、(53)は古歌を「ゆっくり」と詠じるさまを意味しているが、(54)ユル(これは形容動詞・ナリ活用の例である)は時間的な余裕ではなく、＜緊張の解けたさま＞から導き出される「怠惰なさま」を意味している。

この＜緊張の解けたさま＞を基盤とした意味拡張は、中世文献におけるユル系派生語にも見られる。

(55) いかに者共、いくさをばゆるに仕るぞ。(平家物語・巻第八)

¹¹¹ ここではそれが「いとわろし」と評価されているので、現代語でいうノロノロのような意味であろう。

(56) 狩衣の時は、下になるとて、ゆるかせ成べからず。(申楽談儀)

(57) さて今も言うとおりの御普請もいまい少しになったほどに、仕舞うたならばみなゆるりと休息致そうぞ。(脇狂言[三本の柱])

(55)ユルは戦を「緊張感なく」行う者があるか、と兵の気を引き締める場面で用いられている。(56)ユルカセ(形容動詞・ナリ活用)は『日葡辞書』に「不注意・なおざり」を表す語として記載されており、(55)同様<緊張の解けたさま>というイメージから導き出されたものであろう。また(57)ユルリは近世文献以降、様々な動詞に接続して「ゆっくりと行うさま」を表すようになるが、特に「休む・くつろぐ」のような休息を表す語と共起する例が多く見受けられる点に特徴がある¹¹²。これは語基ユラ派生動詞ユラフが「休む」という意味を獲得したのと同様、ユルの持つ<緊張の解けたさま>というイメージが「休息」の意味に結びつきやすいことによるものと考えられる。いずれにせよ中世文献には(57)のような用例が多く現れ、近世以降は(58)(59)のように、後接する動詞が省略された「ごゆるり(と)」という形で定型文的に用いられるまでになる。それほど、ユルリと休息の意味との結びつきが強いということであろう。

¹¹² 中里理子(2010)における狂言台本の調査によると、ユルリという形態は狂言台本に56例現れ、それらは意志または勧誘表現と共起する場合が多いとされる。特に、ユルリという表現が「現在の『ゆっくり休んでください』のような慣例的表現となっているようである。」(p. 212)という指摘から、ユルリと休息に関わる語との共起性の強さは、中世には確立されていたと考えられる。

(58) てい「ハイ御ゆるりと トいいすててたつて行… (東海道中膝栗毛・初編)

(59) 「浅間の上」がきれて「花子」のかけあいやすむと、房さんは「どうぞ、ごゆるり。」と挨拶をして、座をはずした。(老年)

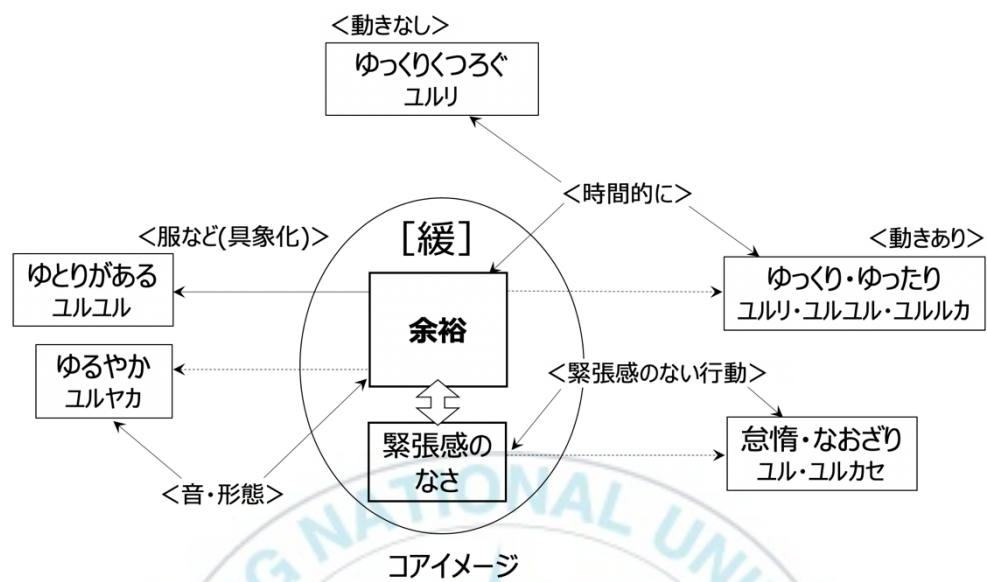
これに対してユルユルは、近世以降も(60)～(62)のように様々な動詞と結びつき「ゆっくり行うさま」を表す。特に近代文献においては(61)緩々や(62)寛々のような漢字を当てる例が散見される。

(60) 「…いざや此やうなるついでに、貴き御寺へ参りて、ちとゆるゆると御物語をも申さん」とて、… (竹齋・上)

(61) ゆるゆる 緩々話をするなんかは大嫌ひで、毎日昌作と共に川にゆく、吉野とも親んだ。(鳥影)

(62) 下枝は無念さ遣る方なく、身体を悶えて泣き悲しむをゆるゆる 寛々と打見遣り、… (活人形)

以上、[緩]に関わる語基ユル系派生語を中心に、意味の拡張する様相を考察した。以下に意味拡張の様相を示す。



<図 17> ユル系派生語の[緩]に関する意味変化の様相(中古～現代)

第7章 母音の属性と意味の派生

前章まで、上代から現代日本語に見られるオノマトペの二音節語基から派生した語を中心に、その意味の派生する様相について考察を行ってきたが、実は上代語には、第三章～第六章までに見られたペア以外にも母音交替関係にある語基のペアが存在する。しかしそれらは、どちらも、或いはどちらか一方が消えてしまい現代語に残っていないため、本研究においては考察の対象から除外した。

では、なぜ同じ母音交替関係にある語基同士であるにも関わらず、全ての語基派生語が現代語にまで生き延びている場合と、そうでない場合とが生じるのであろうか。本章では変化の過程で消えてしまった母音交替関係にある語基のペアにも目を向けて、両者の違いを音韻的な特徴から明らかにしていきたい。そして更に視野を広げて、語根から語基、そして単語へと新たに語が生まれる中で見られる意味の派生の様相についても指摘したい。

7.1 等価的交替関係にある語基のペア

山口仲美(2012)の研究に立ち戻り、上代文献に見られる65種のオノマトペを再

度確認すると、語基同士が等価的母音交替関係にあり、且つ意味の類似しているものが複数抽出できる。以下にその例を提示し、用例を検討することにする(該当オノマトペ及び派生語の万葉仮名表記は括弧に記す)。

7.1.1 サワ～サ𐤎～サエ

- (1) …千尋繩打ち延へ、釣為し海人の、口大の、尾翼鱸、さわさわ(佐和佐和)

邇、控き依せ騰げて…(古事記・上巻[大国主神の国譲り])

- (2) 珠衣の さゐさゐ(狭藍左謂)しづみ 家の妹に もの言はず來て 思ひかね

つも(万葉集・卷四503)

- (3) あり衣の さゑさゑ(佐恵々々)しづみ 家の妹に 物言はず來て 思ひ苦し

も(万葉集・卷十四3481)

サワサワは第四章で扱ったサヤ～ソヨと意味的に関連のある語として扱ったが、そのコアイメージは視覚的・聴覚的な[清]、即ちはっきりと見える、或いは聞こえるという状況であった。万葉集にはこのサワの母音交替形である(2)サ𐤎サ𐤎、(3)サエサエという語が見えるが、『時代別国語大辞典 上代編』を見ると、サ𐤎サ𐤎の項には「擬声語。物の動揺しさわぐさまの形容。サエサエとも。」とあり、サワグ・サワサワニのサワと同根であろうとされている。またサ𐤎の読みは、シホサ𐤎(潮

騒)¹¹³という語にも残っているが、これがサワとサキのコアイメージが同じであり、両者が母音交替関係にあることを裏付ける証拠となっている。しかし、語基サキ・サエのどちらも上記の用例以外には派生語も見受けられず、また現代語でも用いられるのは潮騒の読みのみとなっており、語基サワ派生語以外は消滅している。

7.1.2 タワ～トロ

(4) あしひきの 山道も知らず 白檀の 枝もとをを(等乎々)に 雪の降れば

或いは云わく、枝もたわわ(多和々々) (万葉集・巻十2315)

現代語においては「赤く色づいた実がたわわにみのっている。」(リビング)のように「枝がしなるほど豊かなさま」を表すタワワだが、上代文献にはタワワと語基を同じくする(4)タワタワが、やはり「枝のしなるさま」を表す語として用いられている。更に(4)では母音交替形トロワ(語基トロ反復形トロトロの縮約形)もタワタワと同じ意味で用いられることが示唆されており、ここから語基タワ～トロが同じコアイメージを有する母音交替関係にあることが分かる。上代文献に見られる語基タワ～トロ派生語の他の用例も見てみよう。

¹¹³ 潮騒(しほさゐ)は、「波が立ちさわ(騒)ぐ」「潮がざわざわと波立つ」という意味であり、サワとサキの語源上の関連性が推測される。

(5) 故、益見畏みて、山のたわ(多和) 此の二字は音を以みよ。より御船を引き越して逃

げ上り行でましき。(古事記・中巻〔垂仁天皇〕)

(6) …大夫の 情は無しに 手弱女の 思ひたわみ(多和美)て 徘徊り われは

そ恋ふる 船楫を無み (万葉集・卷六935)

(7) 橘の とを(登乎)の橘 彌つ代にも 吾は忘れじ この橘を (万葉集・卷十

八4058)

(8) 秋萩の 枝もとをを(十尾)に 置く露の 消なば消ぬとも 色に出でめやも

(万葉集・卷八1595)

語基タワには(5)山のくぼみを表す名詞タワや(6)動詞タワムなどの派生語が見られるが、(6)タワムについては大系本『万葉集』にて「思い屈して」(p.143; 頭注)という意味で解釈されており、現代語の意味とは若干異なるように感じられる。しかし、(4)タワタワが「枝のしなって下がっているさま」を指し、(5)タワが「山の(低く下がった)くぼみの部分」を指すことから、(6)も心がまっすぐ張らずに下がっているさま＝「屈している」と解釈されていると考えられる。つまり、三語とも根底にあるコアイメージは共通していると言えるであろう¹¹⁴。一方で、トヲは(7)(8)のように、枝のた

¹¹⁴ 「…わかき御心ども、乱れ給ひぬべきこと、多く侍るめれど、たわむべくも物し給はず…」(『源氏物語』総角)、「かたく辞してをととの顕宗にゆづり給けるあひだに、たがひにたわまずおはしましければ…」(『愚管抄』三・顕宗)などに見られるタワムもしなって下を向くイメージから派生した「心が弱くなる」という意味である。

わむさまを表すオノマトペとして万葉集に数例現れるが、中古以降の文献には用例が見受けられず、オノマトペ以外の派生語も見当たらない。

7.1.3 ヤラ〜ユラ

(9) 手掌も繆亮に 手掌繆亮、此をばたなそこもやらら(耶羅羅)にと云ふ。 拍ち上げ賜ひつ、… (日

本書紀・卷第十五〔顯宗天皇〕)

(10) 手に巻ける 玉もゆらら(湯良羅)に 白栲の 袖振る見えつ 相思ふらしも

(万葉集・卷十三3243)

語基ユラに関しては第六章にて、語基ユルとの対応関係からの考察を行ったが、上代文献には現代語には見られない語基ヤラが(9)ヤララという形で現れる。大系本『日本書紀』補注(p.639; 注釈卷第十五3)には「繆も亮も音や声の澄みとおるさま。ヤララは、さわやかなの意の擬音語」と記されており、また新編全集本『日本書紀②』(p.233; 頭注21)においても中国古典『文選』の例を引きつつ「ヤラはヤラヤラで、澄んださわやかな音をいう。」とされている。

ただし阪倉篤義(1966:351)や工藤力男(1998:41)は「繆亮」を本来の漢字の意味が既に忘れ去られているものとし、音に注目して「手掌も破ららに」(=手のひらも破れるほどに)と解釈しておられる。また「XもYに」という上代特有の構文から

「手掌をユララにさせて」と解釈されることもあり、ここからヤララはユララとコアイメージを同じくする母音交替関係にある、と見ることも可能である。しかし、語基ヤラ派生語はこの他に例が見られず、語基ユラ系派生語のみが現代語まで残っているというのは、前述の通りである。

7.2 母音の属性と意味分化の様相

前節の用例はいずれも、共通するコアイメージを有する母音交替関係にあるペアであるにも関わらず、現代語にまで残ったのはその一部のみであり、その他は中古文献以降には用いられなくなっている例である。これは、第三章～第六章までで見てきた母音交替関係にあるペアが、いずれも現代語にまで残っていることと対照的である。両者の違いはどこにあるのか。

この疑問を解くカギとして筆者は母音の属性に注目した。母音の属性とは、第一章の第二節でも触れた、上代日本語の母音における陽性母音と陰性母音の違いである。これまでに見てきた等価的母音交替関係にある語基のペアについて、その母音の対応関係を表に示すと、以下のようになる。

＜表 9＞ 等価的交替関係にある語基同士に見られる母音の対応関係

どちらも現代語まで残っている(A)		いずれか一方のみ残っている(B)	
カラ /-a-a/	コロ /-ö-ö/	サワ /-a-a/	サヰ /-a-ï/ ¹¹⁵
サヤ /-a-a/	ソヨ /-ö-ö/		サエ /-a-ë/
ハラ /-a-a/	ホロ /-ö-ö/	タワ /-a-a/	トヲ /-ö-ö/
コロ /-ö-ö/	クル /-u-u/	ユラ /-u-a/	ヤラ /-a-a/
ユラ /-u-a/	ユル /-u-u/		

前節で確認した、いずれか一方のみが残るペア(以下、「Bグループ」と称す)に対し、第三章から第六章までで検討したカラ～コロ、サヤ～ソヨ、ハラ～ホロ、ユラ～ユルのようなどちらも現代語にまで残るペア(以下、「Aグループ」と称す)には、陽性母音/a/と陰性母音/ö/とをまたいだ交替が見られる。そしてAグループにおける/-a-a/型の語基派生語は、いずれも現代語において＜音＞のイメージが伴う傾向がある一方、/-ö-ö/型の語基派生語は＜さま＞を示す傾向がある。このことから、逆に/a/系統の語は上代からその語の持つコアイメージの聴覚的な側面を担っており、/ö/系統の語は視覚的側面を担っていたのではないかと推察することが可能である。そしてそう捉えることで、等価的母音交替関係にある語の間には、元来視

¹¹⁵ ワ行音の中・エ・ヲにおける母音/i/le/lo/は、半母音/w/と結合して変異母音的になるので、乙類母音/i/ë/ö/に準ずるものとして認める。

点の相違により明確な意味分担がなされており、それ故、意味が干渉しあうことなくどちらも現代語にまで存在し続け得たと考えることができるのである。

因みに、クル～コロの間に見られる/u/～/ö/交替は、第一章の第二節(森山隆1964)でも触れた通り、一般語彙においてもそれほど多く見られたものではなく、上代日本語のオノマトペにおいては管見の限りこの一例のみであることから、やや特殊な例と考えることができよう。或いはユラ～ユル同様、動詞化という現象の中で捉えることもできるかもしれないが、これについては本研究においてはこれ以上言及することはしない。

他方、Bグループを見ると、サワ～サヰ・サエは/saw-/の二音節目に、ユラ～ヤラは/y-ra/のように一音節目に母音交替が見られるという点で、Aグループとは異なる様相を示す(ユラ～ユルに関しては動詞化という現象が考えられるので、これらとは別に考えなければならない)が、このような一部交替の見られるペアの場合、両語には意味的に視点の変化というような相違がなかったのではないかと考えられる。つまり、Aグループに見られるような明確な意味の分化を請け負わず、むしろレトリック的な用法の変化という類であり、それ故徐々に一つの語に纏められ、現代語まで残らず消えることとなったと推察できるのである。

ところがそう考えると、二音節とも母音交替しており、且つその母音が/-a-a/～/-ö-ö/交替となっているタワ～トヲは、Aグループと同じように両者とも現代語にまで

残らねばならないはずである。しかし実際には語基トヲ派生語というものは現代語には見受けられない。これは、語基タワが「低く下がったさま」という非常に具体的な、限定的な意味を有していたため、それに付随する<音>や<動き>を想起しにくかったことと関連があるかもしれない。Aグループに属する語基は、いずれも意味範囲の広い<動き>や抽象的な<さま>を示しており、それに付随する要素に幅があるため、様々な視点から意味を切り取ることが可能だった。それに対し、タワ〜トヲにはそのような余地が生じにくく、母音交替による意味の分化が明確でなかったため、一方が後世まで残らず消えてしまったと考えることもできるのである。

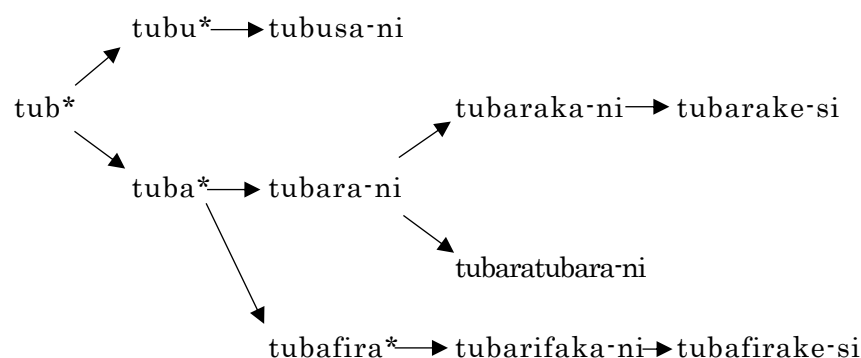
7.3 語基と派生語、語基と語根との関係

前節で、等価的交替関係にある語基同士は共通のコアイメージを有し、視点の違いによる意味の分化を母音交替が担っていた可能性のあることについて指摘した。もちろん、各語基のコアイメージにもタイプがあり、[清]のような抽象的な概念をコアイメージとしている語基サヤ〜ソヨの場合、語基サヤは[清]という概念を<音>の領域に、ソヨは<さま>の領域に投影してその具体的な意味を派生させている。これは、語基カラ〜コロが[接触]という具体的な<動き>をコアイメージとして有している場合に、その<音>の側面、或いは<動き>の側面から各々意味を

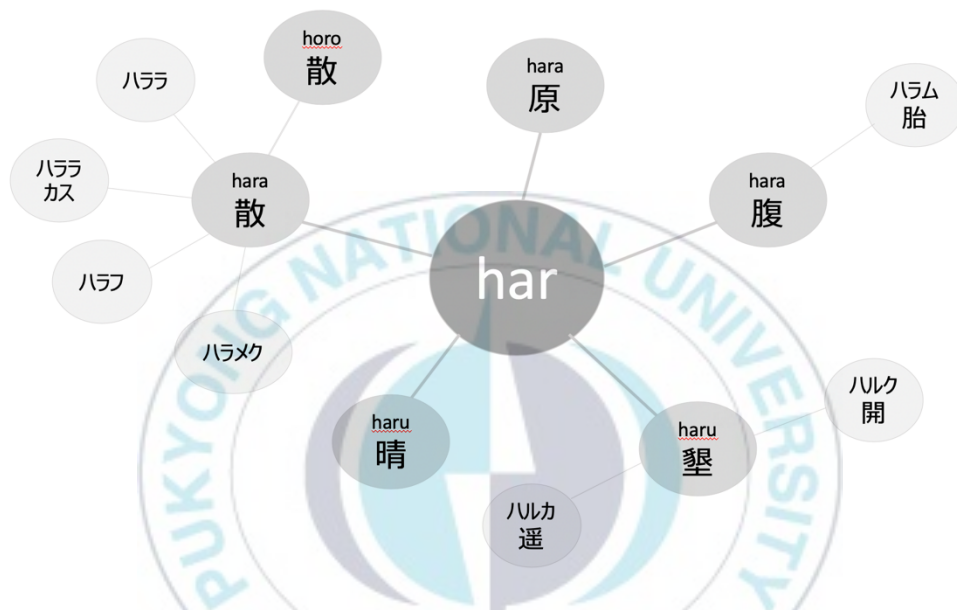
切り取って新たな意味を派生させているのとは様相がやや異なると言えよう。

しかしいずれの場合においても、コアイメージの持つ意味合いは新たな意味の派生に制約を与えており、語基派生語の意味は、語基が本来有しているコアイメージからは自由になれない。つまり、語基派生語(これは語基派生オノマトペだけに限らず、派生語の動詞や形容詞などにも言える)の意味には何らかの形でコアイメージの要素が残っているが、長い年月の中でメタファーやメトニミーなどによる意味拡張を経るうちに、それが見えにくくなっているだけなのである。

逆に、語基(base)より更に小さな単位である語根(root)の、或いは一音節語基の意味に目を向け、そこからの派生という語の繋がりを考えることもできる。語根とは工藤氏(1985)の挙げた例である語基ツバ〜ツブを同根と見なした時の最も小さな単位、tubに当たるものだが、氏によると語根tubは以下のような派生過程を経るとされている(推定形には*が施されることがある。図は筆者により修正を加えた)。



このような語根と語基の関係を、語基ハラに適用してみよう。ハラは辞書において語基ハルなどとの関わりが指摘されているが¹¹⁶、その繋がりは以下のようになっているのではないかと考えられる。



上の図は派生の時期やその過程などを考慮したものではないため、詳細な記述のためには更なる検討が必要となる。しかし、上の図のように語根harから語基ハラ・ハルが派生すると考えた時、上代文献に現れるそれらの語基派生語を広く集めて俯瞰することによって、語根harの意味を類推することが可能だということが示唆されている。即ち、図上に見られる派生語「壱」「晴」「原」「腹」「遥」「開」「散」「払」「胎」という一見何の繋がりもない語同士も、個々の持つイメージを重ね合わ

¹¹⁶ 『時代別国語大辞典 上代編』ハル(壱)の項には、「ハルク・ハラクが開く意であり、おそらく晴ルや、原・ハルカ・ハロハロなどと同源であろう。」とある。

せることで、＜広々として開けたさま＞というような漠然としてはいるが、共通する一つのイメージを抽出でき、より包括的な語のグループ化の可能性を見出すことができるのではないだろうか。

以上、語基の元となる語根の意味にまで触れるという新たな命題を提示したが、これを証明するためにはより綿密な調査及び考察が必要となる。よって、本研究においては「こういう考え方もできる」という例を提示するにとどめ、詳細は今後の課題として考えてみたいと思う。



第8章 結論

本研究は、上代文献に現れ現代文献に至るまで見受けられる、母音交替関係にある二音節語基を中心に、そこから派生する多様な形態のオノマトペ、或いは形容(動)詞や動詞などの用言といった様々な派生語を取り上げ、その意味変化の様相を辿ると同時に、各語基が本来有するコアイメージが、その派生語の意味にどのように関わっているのかについて考察したものである。本研究で対象とした語基は、従来の研究において「意味の分化と関わりがあると考えられる」とされてきた等価的母音交替関係にある語基のペアであり、これらの通時的意味変化を考察するに当たっては、認知意味論の理論を援用している。以下、本論で述べてきたものを各章毎にまとめた上で、今後の展望を示しつつ本研究の終わりとしたい。

第一章は導入部分であり、本研究の研究目的、本研究で扱う語基の基礎知識としての、上代語における語形成と意味との関係について述べられている先行研究の紹介を行った。

第二章では本研究の理論的枠組みとなる認知意味論の考え方についての諸研究を紹介しつつ、本研究でどのように組み込んでいくのか、その援用方法について述べ、本研究の立場について明らかにした。

第三章では、語基カラ～コロ系及びクル系派生語について取り上げた。上代文献の調査により、語基カラ～コロのコアイメージは本来[接触]であり、現代語の持つ[回転]のイメージは中古文献以降に中心的な概念となることを明らかにした。これは語基クルが上代文献から[回転]というコアイメージを有していたことと対照的である。

また、語基カラ～コロは上代文献において[接触]を意味の核としていたため、いずれも<音>の側面を表すことができたが、<高い音>をスキーマに「接触音」から「笑い声」へと意味が変化する際には、両者のベースにある<さま>の相違が影響して、各々高らかな笑い声(カラ)と女性・子供の笑い声(コロ)という異なる「笑い声」を表すようになったと考えられる。

<動き>については、本来聴覚的意味をプロファイルしていた語基カラも、「戸をカラリとあける」というスクリプトによって<聴覚的意味→視覚的意味>というメトニミー的拡張が行われ、「すっかり」という新たな意味を派生している。他方、元々視覚的意味をプロファイルしていた語基コロとクルは、<動き>の意味においては

[回転]のイメージから大きく外れることなく、ほぼその枠の中で意味を拡張させている。

<さま>に関しては、語基コロのベースにある「丸いもの」という意味がプロファイルされ、接尾辞化された例も見られたが、この「丸いものの回転するさま」における<力を入れずに簡単に動く>スキーマを介して、「あっけなさ」或いは「簡単に变化する」という意味へと変化する例も見られる。また語基クルは、コマが回転する際の速さが<滞りのなさ>に繋がり、「急ぎ立ち回るさま」という意味をも獲得した。

第四章では、語基サヤ～ソヨ系及びサワ系派生語を対象に考察を行った。現代語において「風が吹いて、何らかの軽いものが触れ合って生じる音やさま」を表すサヤサヤ・ソヨソヨ・サワサワだが、これらの語基サヤ・ソヨ・サワはいずれも上代語において[清]というコアイメージを有していた。特に記紀においては主にサワ(サワサワ)が、万葉集では主にソヨが聴覚的[清]のイメージを有しており、各々語基サヤと対応していたと考えられる。

このうち、語基サワは聴覚的な「はっきりと聞こえる」という意味を否定的に捉えた「騒々しさ」を表す派生動詞サワクを生み出す。そしてこれが定着したことから、現代語においても語基サワ系派生語は聴覚的側面を描写する用法が中心となっている。特に近世にはサワクから濁音形反復オノマトペ、ザワザワが派生している。

が、これは専ら「騒々しさ」という意味を担うのみとなっている。

これに対しソヨは、中古時代に和歌のレトリックとして「然よ(そよ)」という掛詞で多用されたことにより、「風による葉擦れの音」という意味が定着し、中世以降は柔らかに吹く風の様子を表すものとして意味が固定する。またサヤは、風の働きかけの有無に関わらず生じる、かすかな音を表す語として用いられ続けている。

一方、視覚的側面における[清]の意味は、オノマトペではなく語基派生形容動詞サヤカが担っていることが確認された。また[清]の「清澄」なイメージはサヤ系派生語が引き継ぎ、その「清澄さ」の裏にある「曇り(=滞りやわだかまり)のないさま」はサワ系派生語(中世においてはオノマトペであるサワサワ)が担うという意味の分化がサヤとサワとの間に見られた。しかし、「清澄さ」を表す語の代表格であったサヤカが時代の変遷と共に徐々に用いられなくなり、この意味をサワヤカが担うことで、両者の意味合いは近づいたと言える。

第五章では語基ハラ～ホロ系派生語を取り上げて考察した。上代文献に表れる両語基派生語から抽出されるコアイメージは[散]であると推測され、中古以降、この[散]の意味が拡張してハラ～ホロ系派生語の意味を作り上げていくが、語基ハラが本来持っていた聴覚的意味は、中世時代にはほぼ形骸化する。

一方で視覚的意味は、上代の「散らばっているさま」を描写する用法が中古時

代に散らばるさまに至る「落ちる動き」を示す用法へと変化し、更には「塊(束)」になっていたものが個々に散らばる」という＜分散＞のイメージを描写するようになる。中世文献においてもこの意味は保たれるが、「塊(束)から個々へ」という意味合いよりも、「不揃いな、統一感のないさま」に重点が置かれるようになる。特に、中世まで「落涙するさま」を表す語として最も多用されていたハラハラは、近世にホロリ(語基の持つ「粒」というイメージを元に、憐みの心を表す心的描写の用法にも転じる)という形態が落涙の意味で用いられるようになって以降、徐々にポロポロなどのようなホロ系オノマトペに、その意味を譲るようになった。

そしてこの流れと対応するように、ハラハラが心の落ち着かないさまを描写する用法へと移行することも指摘したが、ハラハラにこのような意味変化が生じた原因として、「具象的なものの分散・乱れ」を意味するバラバラの存在があったと推測される。つまり、具象的乱れを描写する語と心的乱れを描写する語とを区別するために、バラバラと清濁交替関係にあるハラハラに心的乱れという新たな意味が与えられたと考えられるのである。

一方、語基バラと意味的に近似する語基ボロは、本来有していた「破れほつれたさま」というイメージからのメニミーによる意味拡張により、「貧乏・卑しい身分」という意味を有するようになる。また具象的描写である「破れかぶれのひどい状態」

は、抽象的な描写に拡張して「心がボロボロ」という表現を生み出し、更には「ボロ負け」のような「程度のひどさ」を表す語としても用いられるようになる。

第六章では語基ユラ～ユル系派生語の意味変化について考察した。上代文献に現れる語基ユラ～ユル系派生語の意味分析によって、両語基には[緩]というコアイメージがあることが想定されるが、語基ユル系派生語が専ら[緩]のイメージを中心とした意味を表すのに対し、語基ユラ派生語は[緩]と[揺]という二つのイメージを内包している点に異なりが見られる。また本研究では従来「触れ合って立つ音」を表すとされていた上代文献に見られる語基ユラ派生オノマトペ、ユラについて、抽出されたコアイメージから「余裕のある、ゆったりとした音」という新たな解釈が可能となることを示した。

しかしユラユラなど語基ユラ系派生オノマトペの聴覚的意味は中古文献には見られず、むしろ[揺]の視覚的なイメージに即した「揺れるさま」を中心とする意味を担うようになる。中世文献においては、ユラユラ・ユラリが[緩]のイメージから派生する「余裕のある、軽々とした動き」を描写するようになったが、これは[揺]の側面の消失を意味するのではなく、[揺]の背景化した結果と考えた方がよいであろう。なぜなら中世文献に現れるユラユラには[揺]に関わる意味用法も存在し、また近世以降、ユラユラ・ユラリ共に[揺]に関わる意味が強くなっているからである。この

ことから、語基ユラには上代から常に[揺]と[緩]のイメージが共存していたことが分かる。

これに対して語基ユルは、上代文献以来専ら[緩]のイメージから派生する意味を描写し、その主体は変われど意味自体はコアイメージから大きく拡張することはなかった。一時的に、中世～近世文献に「揺れるさま」を表すユルグ・ユルユルという語が現れるが、これらも実際は上代文献に見られた語基ユラ派生語の母音交替形であると考えられ、上代文献に見られる語基ユルとの直接的な交渉はないと思われる。またこのユルユルの母音交替形として中世文献にはヨロヨロが派生し[揺]のイメージを受け継ぐが、これに対応する形でユルユルという語形は姿を消すことになる。

第七章では、第三章から第六章までで考察対象とした語基以外の、上代文献に見られる母音交替関係にある語基のペアを抽出し、それらのペアにおいては部分的に現代語では使われなくなる語がある点を指摘して、それまで考察してきた語基のペアと様相を異にしている理由について考察した。両者の違いを音韻的な側面から考えると、対になる語のどちらも現代語まで残る例では主に/-a·a/～/-ö·ö/交替のような母音全体の交替が見られる一方、どちらか一方が消滅するペアの場合は母音の一部のみが交替することが多かった。更に/-a·a/が現代語オノマト

ペにおいて、いずれも＜音＞を表すとされることから、母音交替による意味の分化においては、語基/**-a-a**/タイプが聴覚的側面を担い、/**-ö-ö**/タイプが視覚的側面を担っていたのではないかと推測される。逆に、一部の母音のみが交替するものは、レトリック的な、或いは一時的な用法であった、つまり意味の分化を担っていなかったため、どちらか一方が淘汰されてしまった、と考えることも可能である。

更にこの研究から一步進めて考えると、語基(**base**)ではなく語根(**root**)、或いは二音節語基ではなく一音節語基のレベルで、コアイメージが存在したのではないかという新たな仮説が生み出される。例えば、上代文献に見られる語基ハラ〜ホロ系派生語以外にも、語基ハラには語根**har**を同じくする語が多く見られるが、それらの語を集めると＜広々として開けたさま＞というような抽象的なイメージが抽出され、そのイメージから各々の語の意味が派生していると想定できるのである。これについては本研究ではその可能性について言及するにとどめ、今後の課題としたいと考える。

現代日本語のオノマトペに見られる外的派生と意味との関係に関しては、これまで数多くの研究がなされてきたが、母音交替によって新たな語を派生させるという上代語の内的派生とその意味との関係については見落とされてしまいがちであった。しかし上代より現代まで生き残った母音交替関係にあるオノマトペのペアに

は、現代語の外的派生による意味変化とは異なる様相、即ち視点の相違による意味分化が見られ、その視点の違いは、その後の時代における派生語の意味にも影響を及ぼしていることが明らかになった。その一方で、多くの語が派生され、多くの意味が派生される中でも、上代文献に既に見られていた語基のコアイメージは、変わらない部分として保たれ続けており、しかも、語基派生オノマトペだけでなく、その他の語基派生語の中にまで生き続けている、という事実は驚くべきものとして我々に受け入れられるであろう。「言葉は生き物である」というメタファーは、実は「言葉は生き物である。だから、変わらないところもある。」という裏の意味を持っているのかもしれない。

今後はそのような語の変わらない側面に注目し、それが繋ぐ言葉の輪郭を明らかにして、言葉の派生過程をより体系的に捉えていきたいと考える。

参考文献

【辞書類】

大野晋他編(1982)『岩波古語辞典』岩波書店

小野正弘編(2007)『擬音語・擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』小学館

佐佐木信綱(1941)『万葉辞典』中央公論社

小学館国語辞典編集部(2000-2002)『日本国語大辞典 第二版』(第1巻～第13巻) 小学館

上代語辞典編纂委員会(1967)『時代別国語大辞典 上代編』三省堂

土井忠生他編訳(1980)『邦訳日葡辞書』岩波書店

中田祝夫他編(1983)『古語大辞典』小学館

中村幸彦他編(1982-1999)『角川古語大辞典』(第1巻～第5巻) 角川書店

松岡静雄(1970)『日本古語大辞典 語誌篇(復刻二刷)』刀江書院

【論文/単行本】

尼ヶ崎彬(1988)『日本のレトリックー演技する言葉』筑摩書房

有坂秀世(1957)『国語音韻史の研究 増補新版』三省堂

安藤正次(1924)『古代国語の研究』内外書房 (安藤正次著作集刊行会編『安藤正次著作集第二巻 国語学論考Ⅱ』所収 雄山閣出版 1974年)

飯田武郷(1940)『増補正訓 日本書紀通釈 第三冊』日本書紀通釈刊行会 p.20

- 泉井久之助(1956)「上代日本語における母音組織と母音交替」『京都大学文学部研究紀要』第4号 京都大学文学部 pp.989-1020
- 泉邦寿(2017)「日本語オノマトペの『意味』に関するノート」『日本エドワード・サピア協会研究年報』第31号 日本エドワード・サピア協会 pp.45-56
- 伊藤理英(2002)「オノマトペに関する考察:擬音語と擬態語間の共感覚比喩表現について」『日本エドワード・サピア協会研究年報』第16号 日本エドワード・サピア協会 pp.55-66
- (2003)「中古の比喩表現について」『人間文化論叢』第6巻 お茶の水女子大学大学院『人間文化論叢』編集委員会編 pp.105-117
- (2005)「中古『～メク』におけるオノマトペの比喩による意味拡張について」『人間文化論叢』第7巻 お茶の水女子大学大学院『人間文化論叢』編集委員会編 pp.301-314
- 井上加壽子(2008)「文脈依存オノマトペの意味拡張に関する一考察—『統合的モデル』によるアプローチ」『日本語用論学会大会発表論文集』第4号 日本語用論学会 pp.1-8
- 浦部重雄(1987)「『宇士多加礼許呂呂岐豆』考」『訓点語と訓点資料』第76輯 訓点語学会 pp.91-96
- 大澤(伊藤)理英(2007)「オノマトペの意味拡張の事例に基づく共感覚的比喩表現の一方方向性における反例と考察」『日本認知言語学会論文集』第7号 日本認知言語学会 pp.365-374

- (2018)「中古・中世の日本語オノマトペの比喻による意味拡張を中心とした認知言語学的考察」山梨正明編『認知言語学論考No.14』所収 ひつじ書房 pp.217-264
- 大坪併治(1989)『擬声語の研究』明治書院
- 大野晋編(1968-1974)『本居宣長全集』(第九卷～第十二卷) 筑摩書房
- 荻原浅男(1977)「『塩こをろこをろに』考-『古事記』の旅から-」『駒沢短大国文』vol.7 駒沢大学 pp.1-7
- 澤瀉久孝(1982-1984)『万葉集注釈(普及版)』(巻第一～巻第二十) 中央公論社
- 小野正弘(2015)『感じる言葉 オノマトペ』 KADOKAWA
- 笈壽雄(2001)「変身するオノマトペ」『月刊言語』第30巻 第9号 大修館書店 pp.28-36
- 春日和男(1950)「古事記の擬音語」『福岡商大論叢』第1巻 第3号 福岡商科大学研究所 pp.55-80
- 角岡賢一(2003)「日本語オノマトペ語基の多義性について」『龍谷大学国際センター研究年報』第12号 龍谷大学国際センター pp.23-44
- (2007)『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性について』くろしお出版
- 釘貫亨(1996)『古代日本語の形態変化』和泉書院
- 工藤力男(1980)「形状言による副詞句の形成」『万葉』第103号 万葉学会 pp.22-32
- (1985)「古代日本語における畳語の変遷ーイトドからイトイトヘー」『万葉』第122号 万葉学会 pp.18-32

- (1989)「動詞と形状言との対応」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』第37巻 岐阜大学教育学部 pp.118-108(右1-11)
- (1998)「象徴詞と接頭辞－ぬなとももゆらに考－」『万葉』第166号 万葉学会 pp.34-48
- 国広哲弥(1994)「認知的多義論－現象素の提唱－」『言語研究』106号 日本言語学会 pp.22-44
- 倉野憲司(1974)『古事記全註釈 第二巻』三省堂
- 小島憲之他校注・訳(1994)『日本書紀①』(新編日本古典文学全集2) 小学館
- (1996)『日本書紀②』(新編日本古典文学全集3) 小学館
- 小林正憲(2008)「日本語の原初母音大系について－意味論的アプローチ－」『四天王寺国際仏教大学紀要』第45号 四天王寺国際仏教大学紀要編集委員会 pp.379-411
- 西郷信綱(1989)『古事記注釈 第四巻』平凡社 p.174
- 阪倉篤義(1966)『語構成の研究』角川書店
- 佐藤武義(1995)『概説日本語の歴史』朝倉書店 pp.172-182
- 鈴木丹士郎(1982a)「近世語彙の概説」『講座日本語の語彙 第5巻－近世の語彙』所収 明治書院 pp.1-21
- (1982b)「読本の語彙」『講座日本語の語彙 第5巻－近世の語彙』所収 明治書院 pp.215-245
- 鈴木泰(1994)「擬声語・擬態語」『古代文学講座7 ことばの神話学』勉誠社 pp.200-211

高木市之助他監修(1957-1967)『日本古典文学大系』(第1巻『古事記 祝詞』～
第100巻『江戸笑話集』)岩波書店

竹下知佳(2016)『小林一茶のオノマトペ』釜慶大学校大学院修士論文

竹下知佳・崔建植(2017)「ハラ～ホロ系反復形オノマトペの意味変化について
(Ⅰ)ー上代語～中世語における形態・意味用法の変化を中心にー」『日本研究』
第46輯 中央大学校日本研究所 pp.41-63

—————(2018a)「ハラ～ホロ系反復形オノマトペの意味変化について
(Ⅱ)ー近世語～現代語における形態・意味用法の変化を中心にー」『東北亜文
化研究』第54輯 東北亜細亜文化学会 pp.161-177

—————(2018b)「サヤ～ソヨ及びサワ系派生オノマトペの意味変化ー
上代語～現代語における意味の分化と相関関係を中心にー」『日本研究』第4
9輯 中央大学校日本研究所 pp.81-105

—————(2019)「認知意味論的観点から見るオノマトペの意味変化ーカ
ラ～コロ及びクル系派生オノマトペの通時的考察ー」『東北亜文化研究』第60
輯 東北亜細亜文化学会 pp.213-234

—————(2020)「ユラ～ユル派生語の意味変化についてー認知意味論
的観点からの考察ー」『東北亜文化研究』第62輯 東北亜細亜文化学会 pp.1
73-189

田中茂範(1987)「多義語の分析:コアとプロトタイプ」『茨城大学教養部紀要』第1
9号 pp.123-158

田守育啓,ローレンス・スコウラップ(1999)『日英語対照研究シリーズ6 オノマトペ』
くろしお出版

- 장진영(2006)「ハ행음의 변화와『はらはら』의 의미·용법 분화」『언어과학연구』제36집 언어과학회 pp.233-250
- 次田潤(1927)『古事記新講(増訂九版)』明治書院
- 土橋寛(1965)『古代歌謡と儀礼の研究』岩波書店
- (1972)『古代歌謡全注釈 古事記編』角川書店 p.212, p.253
- (1976)『古代歌謡全注釈 日本書紀編』角川書店 p.152
- 中里理子(2002)「オノマトペの多義性と意味変化－近世・近代の『まじまじ』を例に－」『上越教育大学研究紀要』第22巻 第1号 上越教育大学 pp.282-269 (右11-24)
- (2003)「近世演劇のオノマトペー浄瑠璃と歌舞伎の脚本を対象に－」『上越教育大学研究紀要』第22巻 第2号 上越教育大学 pp.682-671(右15-26)
- (2004)「『泣く』『涙』を描写するオノマトペの変遷－中古から近代にかけて－」『上越教育大学研究紀要』第24巻 第1号 上越教育大学 pp.316-303
- (2007)「笑いを描写するオノマトペの変遷－中古から近代にかけて－」『上越教育大学研究紀要』第26巻 上越教育大学 pp.1-14
- (2010)「狂言台本山本東本に見るオノマトペー浄瑠璃・歌舞伎脚本との比較とともに－」『上越教育大学研究紀要』第29巻 上越教育大学 pp.207-218
- (2015)「オノマトペにおける音と意味の関連－隣接するオノマトペの意味の重なり－」『表現研究』第102号 表現学会 pp.27-36
- ハイコ・ナロック(2005)「日本語の文法化の形態論的側面」『日本語の研究』第1巻 3号 日本語学会 pp.108-122

- 蜂矢真郷(1974)「語の文法的構成－疊語について－」『万葉』第86号 万葉学会
pp.38-54
- (1998)『国語重複語の語構成論的研究』塙書房
- 浜野祥子(2012)『日本語のオノマトペ 音象徴と構造』くろしお出版
- 林浩恵(2004)「上代に見られる形容詞語幹の副詞的用法」『待兼山論叢 文学篇』
第38号 大阪大学大学院文学研究科 pp.17-31
- 황규삼(2012)「説話集에 나타난 오노마토피아의 表現研究－『今昔物語集』
와 『宇治拾遺物語』를 中心으로－」『日本学報』第91輯 韓国日本学会 pp.
277-290
- プラシャント・パルデシ, 今村泰也(2015)「<共同研究プロジェクト紹介>基幹型: 述
語構造の意味範疇の普遍性と多様性 日本語と諸言語の対照研究から見えて
くるもの－プロジェクトの理論的・応用的な研究成果－」『国語研プロジェクトレ
ビュー』第6巻 第2号 国立国語研究所 pp.35-46
- 町田健編・靱山洋介著(2002)『認知意味論のしくみ』(シリーズ・日本語のしくみ
を探る⑤) 研究社
- 町田健(2015)『ソーシャルと言語学－言葉はなぜ通じるのか』講談社
- 松本曜(2003)『認知意味論』(シリーズ認知言語学入門<第三巻>) 大修館書店
- (2009)「多義語における中心的意味とその典型性: 概念的の中心性と機能
的中心性 (Syntax and Semantics)」『Sophia linguistica: working pap
ers in linguistics』57 pp.89-99
- 靱山洋介(2001)「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」山梨正明他編
『認知言語学論考No.1』所収 ひつじ書房 pp.29-58

- (2011)「多義語における統合的關係と多義的別義の關係」『名古屋大学
日本語・日本文化論集』第19号 名古屋大学留学生センター pp.67-87
- (2016)「ステレオタイプの認知意味論」山梨正明他編『認知言語学論考
No.13』所収 ひつじ書房 pp.71-105
- 森山隆(1964)「上代に残存するö-u対応について－意味の分化に関する一試論
－」『国語学』通巻第56号 国語学会(現、日本語学会) pp.1-11
- (1966)「上代語『うらうら』の語義について」『言語科学』第2号 九州大学教
養部言語研究会 pp.1-6
- 安井稔(1978)『言外の意味』研究社出版
- 山口仲美(1982)「源氏物語の語彙－象徴詞を中心に」『講座日本語の語彙 第3
巻－古代の語彙』所収 明治書院 pp.305-328
- (2012)「奈良時代の擬音語・擬態語」『明治大学国際日本学研究』第4
巻 第1号 明治大学国際日本学部 pp.170-151(右1-20)
- 山口佳紀(1985)『古代日本語文法の成立の研究』有精堂出版
- 他校注・訳(1997)『古事記』(新編日本古典文学全集1) 小学館
- 山田孝雄(1954)『平家物語の語法 下』宝文館 p.1398
- 呂佳蓉(2003)「オノマトペの多義性に関するスキーマ的分析」『言語科学論集』第
9号 京都大学大学院人間・環境学研究科言語科学講座 pp.83-117
- 渡辺知恵美・中村聡史(2015)「オノマトペロリ:味覚や食感を表すオノマトペによる
料理レシピのランキング」『人工知能学会論文誌』30巻 1号 一般社団法人 人
工知能学会 pp.340-352

G.Lakoff, and M.Johnson. (1980) *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press. (渡辺昇一・楠瀬淳三他訳(1986)『レトリックと人生』大修館書店)

G.Lakoff, (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. The University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作他訳(1993)『認知意味論』紀伊国屋書店)



付録

以下は本研究第三章～第六章にて扱った各語基派生語の辞書的意味をまとめたものである。具体的には語基派生オノマトペ(清濁含む)、派生動詞(動詞化の接尾語ーク、ーフ、ーム等の他、ーメク、ーツク動詞形も含む)、派生形容詞(ーシ)、派生形容動詞(ーナリ形容動詞)である。同じ語形が辞書見出し語として複数列举されている場合は、任意に「1」「2」と番号をふって抜き出した。

付録に掲載する辞書は、今日多くの研究者らが引用しており信頼度の高い、A『角川古語辞典』(角川書店)、B『岩波古語辞典』(岩波書店)、C『日本国語大辞典 第二版』(小学館)、D『(小野正弘編)日本語オノマトペ辞典』(小学館)の四種である。その他の辞書の意味記述については、本文にて適宜言及している。

引用方法としては、オノマトペの場合は、副詞用法・形容動詞用法の意味のみ抜き出して記す。またオノマトペ以外の語はDには掲載されていないため、この辞書以外の三つの辞書を調査した。用例はいずれも省略。未記載の場合は「ー」で示した。

1. 語基カラ系派生語

<カラカラ>

A	からから(と):擬声語。①堅い物どうしが触れ合う音、車が勢いよく回って行く音などの、さわやかによく響く音。古く、今日と同じく「ガラガラ」であったかは不明。②さわやかに高く大きな声で笑う声。「かんらかんら」とも。 からから(に):☐擬態語。物が乾ききっているさま。
B	①固いものがころがる時の音。がらがら。②大声で笑うさま。
C	からから1☐〔形動〕①物が乾ききっているさまを表わす語。②器物などの内がからで、何もないさまを表わす語。③無一文であるさまを表わす語。☐〔副〕物が乾ききっているさまを表わす語。 からから2〔副〕①(多く「と」を伴って用いる)さわやかに高く笑う声を表わす語。②金属の器など、堅い物が、ふれあってたてる音を表わす語。大きく、あかるく響く音を表わす。③特に、車などが、調子よく回る音を表わす語。④足音の高く響く音などを表わす語。⑤転げまわるさまを表わす語。
D	①金属製や木製のものなど、かたいものが、ふれ合ってたてる明るくひびく音。②高く笑う声。屈託なく笑うさま。③ものが、かわききっているさま。④中に何もなしさま。すっからかん。

<ガラガラ>

A	☐ 副 擬声語。堅い物どうしが触れ合う音、引き戸の開閉の音など、高く響く音。類語の「からから」に爽快感が伴うのに対して、これにはそれがない。また、「ぐわらぐわら」に比べると、重みが乏しくスケールが小さい。
B	—
C	☐ 〔副〕(多く「と」を伴って用いる。古くは「ぐわらぐわら」「ぐはらぐはら」とも表記した) ①物のくずれ落ちる音や、堅い物がぶつかり合う音などの、重く大きな響きを表わす語。②引戸の開閉や、車輪などの回転の音を表わす語。③からだの中から内容物が出たり、吐き出したりするときの音、またうがいをするときの音を表わす語。④空洞の中や大気中で堅い物がぶつかり合う音や、物のくずれ落ちる音の、軽くかわいた感じの響きを表わす語。近代では①との区別がはっきりしなくなる。⑤(多く「がらがらした」「がらがらしている」

	の形で用いられる) 遠慮しないで露骨に、大声でものを言ったり、笑ったりするさま。また、性質があげっぴろげで、がさつなさま。 ㉑〔形動〕①物が乾ききっているさま、乾いた音をたてるほど水気がすっかりなくなっているさま。②声などがしわがれて、にごっているさま。③内部になにもないさま、非常にすいているさま。④体のやせ細っているさま。⑤小事にこだわらないで、度量の広いさま。
D	①ものがぐずれ落ちたり、かたいものがぶつかり合うときなどの、重くひびく音。②露骨に、大声でものを言ったり、笑ったりするさま。性質があげっぴろげで、品のないさま。③引き戸の開閉や、車輪などの回転の大きくひびく音。④体の中から内容物が出たり、はき出したりするときの音。うがいをするときの音。⑤ものがかわききっているさま。かわいた音をたてるほど、水けがなくなっているさま。⑥声などがしわがれて、にごっているさま。⑦内部に何もなし。非常にすいているさま。⑧体のやせ細っているさま。がりがり。⑨柄をもって振ると、①のような音のする乳児用の玩具。⑩〔方言〕性質が快活なさま。朗らかなさま。

<カラリ>

A	①擬声語。硬い物どうしが触れ合う音。また、車が回る音などの、勢いよく短く響くさわやかな音。②擬態語。動作・作用がすっかり完全に行われているさま。また、水分や湿気のないさま。
B	—
C	(多く「と」を伴って用いる。古くは「くわらり」「くはらり」と表記した例もある) ①堅い物が触れ合って出す、高い音を表わす語。②戸、障子などを思い切りよくあける音、また、あけ放つさまを表わす語。③明るく晴れわたってさわやかなさま、また、明るく広々しているさまを表わす語。④性格などが明るくほがらかなさま、また、気持ちがはれるさまを表わす語。⑤ものがさっぱりとかわいているさまを表わす語。⑥物事、様子が一変するさまを表わす語。すっかり。⑦残ることのないさまを表わす語。
D	①かたいものが、ふれ合って出す、高く軽快な音。②戸、障子などを軽い力で思い切りよくあけるときの軽快な音。また、そのさま。③明るく広々としているさま。性格や気持ちが明るくいきいきしたさま。④湿りけがなく、気持ちよくかわいているさま。⑤ものごとやようすが一変するさま。すっかり。⑥残ることのないさま。すっかり。

<ガラリ>

A	がらり ㊦ 副 擬態語。動作が一気に急激に行われるさま。たちどころに。すぐに。即座に。ひょいと。 ㊧ 名 給金・契約金などを全額前渡しすること。また、その金など。一気に完全に支払う意味からいったもの。多く助詞「に」を下接して用いる。『好色貝合・下』に「分〔わき〕て見よいのは、かしらに給銀皆取〔とる〕をがらりといふ也」とある。 がらり(と) 副 擬声語。近世に「ぐわらり」と表記したものが多いが同語であろう。硬い物どうしがぶつかりあって発する音を表す。
B	㊦ 〔副〕 全部。そっくり。 ㊧ 〔名〕《全部の意から》近世前期奉公契約の時、給金や身請金などを全額前渡しすること。
C	がらり1 (多く「と」を伴って用いる。古くは「ぐわらり」「ぐはらり」と表記した例もある。) ①堅い物がぶつかり合って立てる音を表わす語。「からり」よりやや濁った感じがある。②そこにあるものを全部投げ出す音、また、物が崩れる音などを表わす語。③戸、障子などを急に勢いよくあける音、また、勢いよくあけ放つさまを表わす語。④明るく晴れわたるさま、また、すっかりあけたさま、明るく広々しているさまを表わす語。⑤物事、状態が、急にすっかり変わるさまを表わす語。⑥残るところのないさまを表わす語。すっかり。残らず。 がらり2 (「に」を伴うこともある) ①そっくりそのまま。全部。②即座に。ひょいと。
D	①かたいものが急激にぶつかり合ったり、ものがくずれてたてる重い音。②戸、障子などを急に勢いよくあける大きな音。また、そのさま。③ものごとや状態が、急激に変わるさま。④がっかりするほど残るところのないさま。すっかり。

<カラコロ>

A	—
B	—
C	(「と」を伴って用いることもある) ①堅い物のひびく音。多く下駄の音などにいう。からこん。からんころん。②蛙の鳴く声を表わす語。
D	かたいもののひびく軽い音。多く下駄の音についていう。

<カラリコロリ>

A	①硬い物どうしが触れ合って出る音を表す。②軀(ろ)をこぐ音を表す。
---	-----------------------------------

B	—
C	(「と」を伴って用いることもある) ①「からころ」①に同じ。②のらりくらりするさまを表わす語。
D	①かたいものが間をおきながら、ふれ合ってひびく音。からこん。からんころん。②[古]あれこれと態度を決めずにいるさま。

<カラグ>(動詞・下二段活用)

A	①紐をからませて束ねゆわえる。束ねて縛る。②着物の裾をまくり上げて帯にはさむ。はしおる。
B	《カラミ(絡)と同根》 ①巻きつけて縛りあげる。②上へまくる。
C	㊦からげる(絡) ①たばねてくる。ぐるりと巻きつける。縛る。②衣類の裾(すそ)をつまみ上げて帯にはさむ。はしよる。まくり上げる。③ある状況にある。

<カラム>(動詞・四段活用)

A	線状をなすもの甲が、乙に巻きついて、その結果乙が行動の自由を失うようになる、甲の動作をいう。「からぐ」と同根。㊥ 四段 ①巻きつく。からまりついて対象の行動を妨げる。②縄などを縦横に巻きつけて二つ以上のものを離れないようにくっつける。③対象につきまとう。まつわりつく。④難くせをつける。難題をふっかけて相手を困らせる。⑤巻きつける。①に使役的な意の加ったもの。⑥双六用語。『双六独稽古』に「敵の石、身方の内へ二つならぶをからむといふ」とある。そこへ自分の石を置くことができないので不利になる。㊦ 下二 ㊦を他動詞的にいう。①からみつかせる。②捕えて縄で縛る。縛って自由を束縛する。「臣等を捕へて圀圀{ひとや}に禁{カラム}(神功紀四七年・訓)」のように、牢に禁固する意にも用いる。③心をとらえる。執着させる。
B	《カラゲ(絡)と同根》 ①しっかりと巻きつく。②しつこく言いがかりをつける。
C	㊥ ①細長いものなどが、まわりに巻きつく。②言いがかりをつけてつきまとう。むり難題をしつこく言って困らせる。からまる。③事態がわかりにくく入り組む。こんがらかる。からまる。④(①の比喩的用法)(感情や欲望、事柄などが)つきまとってくる。密接に関連する。⑤登山で、山の中腹を回って進む。㊦ 細長いものなどを、まわりに巻きつける。からめる。㊦ ㊦からめる(絡)

<カラメカス>(動詞・四段活用)

A	「からめく」の他動詞。からからと音を立てさせる。 cf)がらめかす:「がらめく」の他動詞。がらがらと大きな音が出るようにする。がらがらと音を 立てさせる。
B	《カラメキの他動詞形。ガラメカシとも》 からから鳴らす。がらがらと鳴りとどろかせる。 ※見出し語は「カラメカシ」
C	(「めかす」は接尾語。「からめかす」とも。) がらがらと音を立てる。

2. 語基コロ系派生語

<コロコロ>

A	①小さいもの、丸いものが転がって行くさま。②小さく丸々としているさま。小太りで愛らし い子どものさまをいうにも用いる。③女・小児などの、玉を転がすような声で長く笑うさま。 笑い転げるさま。④鈴の音、蛙・小鳥の声など、小さいもののたくさん続いて、美しく高く響 く音や声のさま。
B	①ころがるさま。また、ころがる音。②笑いころげるさま。③犬を呼ぶ声。
C	(多く「と」を伴って用いる)①まるい物、また小さいものなどのころがって行く音、またはそ のさまを表わす語。また、車輪などがころがる音を表わす。②てんでんばらばらにあるさ ま、点在するさまを表わす語。③まるいさま、特に子供などの丸々と愛らしく太っているさま を表わす語。④鈴の鳴る音を表わす語。⑤明るく笑いころげるさまを表わす語。⑥よろこぶ さまを表わす語。⑦蛙の鳴く声を表わす語。⑧たやすく死ぬさまを表わす語。また、たや すく倒れるさまや、負けるさまを表わす語。
D	①丸いものや小さいもの、円筒形や車輪状のものなどが転がっていくときの軽く高い音。ま た、そのさま。②鈴の鳴るような高くすんだ音。高い声で、明るく笑いころげるさま。また、そ のように快活なさま。③カエルやコオロギの鳴く声。④水が軽やかにわき出したり、流れる 音。⑤丸いさま。ほほえましく思えるほど、丸々と太っているさま。⑥あちこちに点在するさ ま。⑦あっけなく状況や態度が変化するさま。⑧[方言]心中大いに喜ぶさま。⑨[方言]疲 れたさま。

<ゴロゴロ>

A	①  「と」を伴うこともある。①擬声語。雷のとどろく音を表す。②擬声語。車輪やひきうすの回転する音を表す。③擬声語。痰がのどにかかった音を表す。④擬態語。所々に物が転がっているさまを表す。
B	—
C	(「と」を伴って用いることもある) ①雷のとどろきひびく音、または雷のようにとどろきわたる音を表わす語。②車輪がころがり動く音、石うすを回す音など、丸いもの、大きいもの、重いものなどがころがってゆく音、またはそのさまを表わす語。③猫などが喉(のど)を鳴らす声を表わす語。④あちこちに、物が雑然と、または無造作にころがっているさまを表わす語。⑤(④から転じて)その価値が低く見えるほどに、あちこちに物が沢山あるさまを表わす語。⑥比喩的に、仕事をしないで、むだに暮らしているさまを表わす語。⑦角ばっていたり違和感があったりして、なめらかでないさまを表わす語。
D	①雷のとどろきひびく音。雷をさす幼児語。②ネコなどがよろこんでのどを鳴らす声。③丸いもの、大きいもの、重いものなどが転がってゆく音。また、そのさま。④あちこちに、物が雑然と、または無造作に転がっているさま。どこにでも見つかるほどありきたりなさま。⑤仕事をしないで、むだに暮らしているさま。⑥角張っていたり、小さいものが間に入って違和感があるさま。

<コロリ>

A	「と」を伴って用いるのが普通。①人や物が、ひょっと転がったり、倒れたりするさま。②そのまま簡単に横になるさま。③事があっけなく片付くさま。また、人が急に、あっけなく死ぬさま。④人の気持の、急に解けほだされるさま。⑤すっかり。全然。『浪花聞書』に「ころりとちがふ<さつぱりちがふたるなり>」とある。⑥硬いものの触れ合う音のさま。「
B	①ころころところがるさま。②もろいさま。あっけなくまいるさま。③不意に死ぬなどするさま。④謡曲で、拍子の音。⑤《かかるところりと死ぬというので》近世末期、コレラの異称。
C	(多く「と」を伴って用いる) ①小さい物がころがり落ちるさまを表わす語。②物、または人が転がるさま、横たわるさま、倒れふすさまなどを表わす語。③急に死ぬさま、たやすく死ぬさまを表わす語。④ことが容易に行なわれるさま、また、ことを容易に行なうさまを表わす語。⑤前の状態とまるきり変わってしまうさまを表わす語。すっかり。まったく。⑥丸みを帯

	びてかわいらしいさまを表わす語。 ㊦ [名] 銭高百文。駕籠昇、馬子などの用いた符丁。②㊦コロリ(「コレラ」に同じ。)
D	①小さいものが転がり落ちるさま。②ものや人が軽く転んだり、横になったりするさま。③かわいらしく感じられるぐらい丸みをおびているさま。④あつけなく死ぬさま。たやすく寝入るさま。⑤事がたやすく行われるさま。⑥前の状態から何の抵抗もなくかわってしまうさま。すっかり。まったく。⑦[古] 病名。コレラのこと。

<ゴロリ>

A	—
B	—
C	[副](多く「と」を伴って用いる) ①物が転がるさまを表わす語。「ころり」よりやや大きく、重い感じを表わす。②人が転がるさま、横たわるさまを表わす語。
D	①重たげにもものが転がるさま。②人が体重をかけて転がるさま。横たわるさま。③厚みや重みのあるさま。

<コロブ>(動詞・四段活用)

A	擬態語「ころ」からの派生。①回転しながら移動する。ころがる。②転倒する。直立しているものが弧を描いて倒れる。③女が男の求めに応じて肌を許す。特に、芸妓の売春、娘の野合、人妻や後家の密通など、社会的に容認しがたいような関係において、男に身をまかせることをいう。④金などのために、あらぬ方へ傾く。⑤キリシタンの宗徒が改宗する。慶長十八年(一六一三)の切支丹禁令後、京都所司代板倉勝重が信者を探索して俵に入れ、賀茂川原に積み上げて置いたが、転宗者は転んでその意を表示したことからいう。
B	①ころがる。ころげる。②倒れころがる。転倒する。③キリシタン宗徒が転向して改宗する。④男女が私通する。密通する。⑤芸者などがこっそり売春する。
C	①ころころと回転する。ころがる。まろぶ。②倒れる。現代では、人などがつまづいて倒れる場合にいう。こける。③横になる。臥す。寝ころぶ。④キリシタンがその信仰を捨てて仏教などに回収する。江戸時代、弾圧を受けたキリスト教徒についていう。転じて、自己の主義、主張を捨てて転向する。⑤男女が私通する。⑥芸者、遊女、しろうと女などがひそかに

	売色する。⑦物事のなりゆきが別の方向に変わる。ある事態になる。また、ある方向に気持ちが移る。なびく。⑧(「ころんでいる」の形で)何もしないでぶらぶらしている。
--	---

<コロロク>(動詞・四段活用)

A	「ころろ」は小さなものが触れ合ったり、のどが鳴ったりする音の擬声語。ころろと鳴る。
B	《コロロは擬音語。キはそれをうけて動詞化する接尾語。オドロキ・トドロキの類》声がしわがれて、ゴロゴロ鳴る。
C	(擬声語「ころろ」の動詞化) ころろ音をたてる。声がかれてのどが鳴る。

<ゴロツク>(動詞・四段活用)

A	①ごろごろと音を立てる。②雷がごろごろと鳴る。転じて、雷のようにがみがみ言う。③ごろごろと転がる。④ぶらぶらと目的もなくうろつく。⑤一定の住所職業を持たずに、他人の家に寄宿などしてごろごろする。働かずに無頼をしてまわる。
B	—
C	(「つく」は接尾語)①ごろごろと音をたてる。②雷がごろごろと鳴る。転じて、がみがみとしかる。③ごろごろと転がる。また、ものがごろごろする。④からだを横たえる。ごろりと横になる。⑤一定の職業も住所もなく、他家に奇食する。働かないでぶらぶら遊ぶ。⑥ぶらぶらと歩きまわる。また、目的もなくうろつく。⑦喧嘩(けんか)をすることをいう、てきや・盗人仲間の隠語。

3. 語基クル系派生語

<クルクル>

A	擬態語。小さな円を描いて回るさま。①物が速く回転するさま。回って止まらないさま。②幾重にも巻きつけるさま。また、巻き込むさま。動作が速いのというのが普通。③滞りなく事が進行するさま。すらすらと。するすると。④小回りがきいて、まめまめしいさま。こまねずみのように働くさま。
---	---

B	①物の回転するさま。②物事のすらすと運ぶさま。たどたどしくない様子。
C	(「と」を伴って用いることもある) ①物が軽やかにつづいて回るさま、また、何回も回すさまを表わす語。②幾重にも巻くさまやまるめるさま、また、巻いてあるものを解くさまを表わす語。ぐるぐる。③物事を滞りなく行なうさま、また、物事のすらすらと進行するさまを表わす語。④めめめしく、身軽に立ち働くさまを表わす語。⑤なめらかに丸い感じのするさまを表わす語。くりくり。
D	①ものが軽やかに続いて回るさま。ものを何回も回すさま。②ものが円を描いて移動するさま。③長いひも状のものや布などが、何重にも巻かれるさま。④ものごとが、めまぐるしく行われるさま。あちこちと動き回ったり定まらないさま。⑤丸くて愛らしい感じのするさま。くりくり。⑥めまいが続くさま。くらくら。

<グルグル>

A	擬態語 ①何回も回るさま。②幾重にも巻くさま。また、巻いたものを解くさま。
B	①ものの回転するさま。②幾重にも巻きつくさま。
C	(「と」を伴って用いることもある) ①物が何回もつづいて回るさま、また、つづけて回すさまを表わす語。②幾重にも巻いたさま、また、幾重にも巻いてあるものを解くさまを表わす語。くるくる。
D	①腹が大きく鳴る音。また、そのさま。②重みを感じさせながら続けて回るさま。続けて回すさま。③ものが何回も続いて円を描くように移動するさま。そのように、次々に移動するさま。④何重にも巻かれたさま。何重にも巻いてあるものを解くさま。くるくる。⑤[方言]動きが速いさま。

<クルリ>

A	①軽々と回るさま。軽快に回転するさま。②眼がつぶらなさま。③物を丸く包んだり、表皮などを速やかにむいたりするさま。
B	—
C	(多く「と」を伴って用いる) ①人や物がすばやく一回転したり反転したりするさまを表わす語。②人や物などが円を描いて動くさま、また、ある地域のまわりなどをめぐって移動するさまを表わす語。③丸いものの表面がむけたり剥がれたりするさまを表わす語。④物

	を包んだり丸めたりするさまを表わす語。⑤丸く、かわいらしいさまを表わす語。くりくり。 ⑥急に様子・状態の変わるさまを表わす語。すっかり。ぐるり。
D	①人やものがすばやく一回転したり、反対向きになったりするさま。②人やものなどが円を描いて動くさま。ある地域のまわりなどを巡って移動するさま。③丸いものの表面が容易にむけたり、はがれたりするさま。④手際よくものを包んだり丸めたりするさま。⑤丸く、かわいらしいさま。くりくり。

<グルリ>

A	①一点を中心にして回転するさま。②一地域の周囲を回るさま。また、ある物の周囲を人や物が取り囲むさま。③様子が一変するさま。すっかり。がらりと。
B	周囲。 cf)ぐるり高:顔のまわりが高く、鼻が低い醜い顔。中低(なかひく)。
C	(多く「と」を伴って用いる)①人や物などが一回転したり反転したりするさまを表わす語。②人や物などが円を描いて動いたり取り囲んだりするさま、また、ある地域のまわりなどをめぐって移動するさまを表わす語。③物を包んだり丸めたりするさまを表わす語。④急に様子が変わるさまを表わす語。がらりと。
D	①人や物などが大きく時間をかけて一回転したり反対向きになるさま。②人やものなどが大きく時間をかけて円を描いて移動するさま。ある地域のまわりをめぐるさま。③大きな動作でものを包んだり、とり囲んだりするさま。④状況や態度が急に大きく変わるさま。がらり。

<クルル>

A	ぐるぐるとまわるさま。くるくると。
B	—
C	物の回るさまを表わす語。くるくると。※見出し語は「くるるに」
D	—

<クルム>(動詞・四段活用、下二段活用)

A	㊦ 動マ四 周囲を覆って中へ包み込む。 ㊧ 動マ下二 ①一つにまとめる。また、大きなものを小さく巻き込む。包み込む。②だまして思いどおりにさせる。籠絡する。
B	〔四〕巻いて中につつまこむ。〔下二〕つつまこむ。
C	㊦ 〔他マ五(四)〕巻くようにして中につつまこむ。つつま巻く。つつま。 ㊧ 〔他マ下二〕くるめる(包)。

<クルメク>(動詞・四段活用)

A	「くる」は高速度で回転するさまを表す擬態語。「めく」は接尾語。「くるべく」とも。「転クルメク、眩目(クルメク)」〔黒川本字類抄〕 ①くるくると回る。②あわててうろうろと動き回ったり、体をくねくねと揺り動かしたりするさまをいう。
B	①「くるべき」に同じ。②あわて騒ぐ。騒ぎ惑う。
C	〔自カ四〕(「めく」は接尾語) ①くるくるとまわる。回転する。②(多く「めくるめく」の形で用いる。→めくるめく)目がまわる。目がくらくらする。目まいがする。③あわててさわぎまわる。せわしく立ちまわる。

4. 語基サヤ系派生語

<サヤ>

A	もと硬く薄いものが触れ合う音を表す擬声語。『古語拾遺』に「あなさやけ」に対して「竹葉声也」と注する。その昔の澄みきった感じから、視覚的、聴覚的に混じりけのない清潔なさまを表す擬態語としても用いられる。「さやに」「さやかなり」「さやけし」の語根。
B	さや1 《動詞サヤギの語幹》ざわめくさま。ざわざわ。そよ。 さや2 ①すがすがしいさま。一説、物がすれ合って鳴るさま。②「さやか」(1)に同じ。
C	(多く「に」を伴って用いられる)①あざやかなさま、はっきりしているさまを表わす語。②清らかなさま、さっぱりしたさまを表わす語。③音が静寂を乱してひびくさま、木の葉などがざわめくさまを表わす語。ざわざわ。さらさら。④音色などの澄んでいるさま、また、澄んで快いさまを表わす語。

D	—
---	---

<サヤサヤ>

A	軽くて硬い物どうしが軽く触れ合う、清澄な音を表す。ただし、『記歌謡』の二例については、ゆらゆらと揺れ動くさまを擬態語的に表現したとも見られる。
B	物がふれあって鳴る音。
C	①物がすれ合って鳴る音を表わす語。②物がゆれ動くさまを表わす語。
D	ものがすれ合って鳴る音。また、こすれ合うようにゆらぐさま。

<サヤカ>(形容動詞・ナリ活用)

A	「さや」は擬声語。「か」は接尾語。清らかで混じりけのないさま。聴覚にも視覚にも用いる。①音が高く澄んで、はっきり聞えるさま。②明るく、対象の姿が、はっきりしているさま。余すところなく感覚にとらえられるさま。
B	《サエ(訝)と同根。冷たく、くっきりしているさま。類義語アキラカは、はっきりして、限なく見えるさま》①よく分かるように際立って、はっきりしているさま。②さえてくっきり見えるさま。
C	(「か」は接尾語) ①はっきりとしているさま。明るく清らかであるさま。明白に、よく見えるさま。あきらか。はっきり。明瞭(めいりょう)。まさやか。②音声が高く澄んでいるさま。さえてよく聞こえるさま。③さわやかなさま。爽快であるさま。

<サヤグ>(動詞・四段活用)

A	擬声語「さや」の動詞化。①さやさやと音を立てる。植物の葉などが触れ合って音を立てるのにいう。②騒ぐ。やかましくする。平穏でないことにいう。
B	ざわざわと音がする。ざわめく。
C	①さやさやと音がする。ざわざわという音がする。風にそよぐ。ざわめく。②騒ぐ。騒がしくなる。また。不穏になる。

<サヤケシ>(形容詞・ク活用)

A	形容動詞「さやか」からの派生。混じりけなくはっきりしていて快いさま。「きよし」に対して、対象から受ける主体の情意や感覚についていうことが多く、また聴覚について用いることも多い。①音が高く澄みきっていて気持ちいいさま。川音について用いることが多く、その場合はおおむね視覚的印象も含んでいる。②余すところなく、すっきりと見えて美しいさま。③汚れなく、まざれもないさま。余すところなく知れわたっているさま。
B	《サエ(冴)と同根。冷たく、くっきりと澄んでいる意。視覚にも聴覚にも使う。類義語キヨシは汚れのない意》①さえて、はっきりしている。②くっきりと際立っている。
C	(「けし」は接尾語) ①はじめがはっきりしている。はっきりしていて明らかである。あざやかである。見た目に分明である。②清らかである。さっぱりしている。気分的にさわやかである。すがすがしい。③音、声などがはっきりとしてさわやかである。快い響きである。耳に快く感じられる。

<サヤム>(動詞・下二段活用)

A	—
B	—
C	けがれを去る。きよめる。

<ザヤメク>(動詞・四段活用)

A	—
B	ざわざわと音を立てる。ざわめく。
C	(「めく」は接尾語) ざわざわと音がたつ。ざわめく。

5. 語基ソヨ系派生語

<ソヨ>

A	擬声語。物が軽く触れ合って生じるかすかな音や、風が物に静かに当る音などのさま。置語で「そよそよ(と)」とも。
B	《サヤの母音交替形》葉などが動いてかすかに立てる音。
C	(多く「と」を伴って用いる) しずかに風の吹く音、また、物が触れあってたてるかすかな音などを表わす語。
D	静かに風の流れる音。ものがふれ合ってたてるかすかな音。また、そのさま。

<ソヨソヨ>

A	①風のかすかに吹くさま。②物が触れ合って発する騒がしい音を表す。がさがさ。ざわざわ。あるいは「ぞよぞよ」と発音されることもあったか。
B	そよそよ1 《ソヨをかさねた語》物が軽く触れ合って立てる音。 そよそよ2 《其よを重ねた語》 そうだそうだ。歌では風にそよぐ音にかけていうことが多い。
C	(副詞「そよ」を重ねた語。多く「と」を伴って用いる) 物がしずかに触れあってたてる、かすかな音を表わす語。さやさや。古くは、風に草木のそよぐ音、きぬずれの音、物の動くけはいなどにいい、現代では一般に、風がしずかに吹くさまを表わす。
D	①風が静かに吹き続けるさま。やさしい風が草木などをそよがす音。また、そのさま。さやさや。②〔古〕静かに水の流れる音。また、そのさま。③〔古〕薄く軽いものがしずかにふれ合ってたてる、かすかな音。また、そのさま。

<ゾヨゾヨ>

A	—
B	—
C	(「と」を伴って用いることもある) ①小さな虫などが多く群がり集まっているさま、また蚤や虱などが肌をはう不快な感触などを表わす語。②「そよそよ」よりもいくらか大きく、さわがしい音を表わす語。

D	①小さな虫などが多く群がり集まったり、集まってくるさま。小虫などが肌をはうような不快な感触。②ものがふれ合ってたてる騒がしい音。また、そのさま。ざわざわ。
---	---

<ソヨリ>

A	擬声語。物の軽く触れ合う音を表す。多く、風の吹くさまに用いる。
B	「そよる」に同じ。
C	(多く「と」を伴って用いる) 物がかかるく触れあってたてる、かすかな音を表わす語。風が静かに吹きすぎていくさまをいうことが多い。
D	ものが軽くふれ合って一瞬たてる、かすかな音。風が静かに吹きすぎるさま。

<ソヨロ>

A	擬声語。物に触れて軽く立てる音の形容。がさっと。ごそっと。
B	物と物とが触れ合ってたてる音。かさり。
C	(多く「と」を伴って用いる) 物がかかるく触れあってたてる、かすかな音を表わす語。
D	ものが軽くふれ合ってたてるかすかな音。

<ソヨグ>(動詞・四段活用)

A	①木の葉や草の葉などが風に吹かれてそよそよと音を立てる。また、風が物に当ってそよそよと音を立てる。②鹿などが落葉を踏んで、ざざと音を立てる。
B	《サヤギの母音交替形》そよそよと鳴る。
C	風が吹いたりして木の葉などがそよそよと音をたてる。わずかにゆれ動く。また、鹿などが草を分けながら行く。

<ソヨメク>(動詞・四段活用)

A	「そよ」は擬声語。「めく」は接尾語。そよそよ、さやさや音がする。風やきぬずれの音などに用いる。
---	---

B	そよそよ、さやさやと音がする。
C	(「めく」は接尾語)①そよそよと音がする。②衣(きぬ)ずれや人のざわめきなどのかすかな音がする。

6. 語基サワ系派生語

<サワサワ>

A	さわさわ 「さわ」は物騒がしい音を表す擬声語で、「さわく」などの語基。ざわざわとやかましいさま。耳障りな音や声を立てるさま。気持が落ち着かないさま。 さはさは(と) 擬態語。「さはやか」「さはやぐ」と同根。混じりけや屈折がなく、純粹整一であるさま。①残りが全くないさま。きれいさっぱりと。②病気や気分が完全に回復したさま。さっぱりと。すっきりと。③障害や躊躇がなくて事が順調に進むさま。すらすらと。さらさらと。歌論などで、滞りのない、なだらかな表現をいうために用いることが多い。④事柄が明瞭であるさま。はっきりと。⑤否定表現と呼応して用いる。まったく。全然。
B	さはさは1 落ち着かないさま。そわそわ。 さはさは2 《サハヤカのサハを重ねた語》さっぱり。はっきり。もやもやのないさま。 さわさわ 《サワキ(騒)のサワと同根》さわがしく音を立てて動きまわるさま。ざわざわ。
C	さわさわ1 (歴史的かなづかいは「さわさわ」とも。「さわやか」と同根。多く「と」を伴って用いる) ①気分のはれわたるさま、とどこおるところのないさまを表わす語。さっぱりと。さわやかに。明瞭に。すっきり。②草や木の葉をそよがせて、さわやかに風が吹くさま、またその音を表わす語。→次項「さわさわ2」。③(下に打消の語を伴って)まったく。全然。④手順よくすらすらとしたさま、とどこおりなく事のはこぶさまを表わす語。すらっと。すらすらと。 さわさわ2 (多く「に」または「と」を伴って用いる) ①騒々しい音のするさま、物などが触れ合って音をたてるさまを表わす語。ざわざわ。②物が軽く触れあつてたてる音を表わす語。さらさら。③落ち着かないさま、軽率なさまをいう語。そわそわ。
D	①風が草木をそよがせたり、湯がわいたりする際にかすかにたつ軽くこまやかな音。また、そのさま。②[古]気分の晴れわたるさま。とどこおるところのないさま。さわやかに。明

	瞭に。すっきり。さっぱり。③[古]騒々しい音のするさま。ものなどがぶつかり合って音をたてるさま。ばしゃばしゃ。⑤[古]落ち着かないさま。軽率なさま。そわそわ。
--	---

<ザワザワ>

A	①擬声語。物音や人の声が騒々しく聞えるさま。『俚言集覧』に「ざわ／＼ ザ濁言。騒を云、濁るは俗言なれば也。水の流るゝ声」とある。大勢が鳴動するさまで、旋律的でない物音の形容。②期待や不安で心が落ち着かないさま。「そはそは」に同じ。
B	—
C	(多く「と」を伴って用いる)①声や音がさわがしく聞えるさま、大勢がさわぎ動くさまを表わす語。②そわそわと落ち着かないさまを表わす語。③病気の熱などで寒けがするさまや、気味が悪く鳥肌がたつようなさまを表わす語。ぞくぞく。
D	①声や音が騒がしく聞こえるさま。大勢が騒ぎ動くさま。②不安や、いやな予感などで心が波立つさま。③病気の熱などで寒気がするさまや、気味がわるく鳥肌がたつようなさま。ぞくぞく。

<サワグ(ク)>(動詞・四段活用)

A	上代は「さわく」。「さわ」は擬声語。やかましい状態を呈する意。①風・波などが、ざわざわと音を立てる。②人や動物が大きな声を出す。特に、大勢が口々に声を出す。声とともに動きを伴っている場合が多い。③②に伴われた動きの面を主とするもの。入り乱れて忙しそうに立ち働く。せわしく動き回る。④あれこれと噂する。うるさく言う。⑤騒動が起る。事を起す。⑥驚いたり恐れたりして、混乱する。あわてふためく。うろうろする。⑦心が動揺する。気持が乱れる。⑧にぎやかに遊ぶ。歌や三味線や踊りを交えて遊興する。⑨躍動する。「血がさわぐ」の形で用いる。
B	《奈良時代はサワキと清音》①多数のものが集まってやかましい音を立て、形も入り乱れて見える。②大勢が声をあげ、入り乱れて立ち働く。③心の平静を失う。あわてる。④あわただしい様相を示す。ただならぬ動きを見せる。▽サワは擬態語。キは擬態語をうけて動詞化する接尾語。

C	(上代は「さわく」)①④やかましい声や音をたてる。ざわめく。⑩やかましい音や声をたてて動きまわる。騒々しくする。③風、波、草木などがざわざわと音をたてて動く。②忙しく動きまわる。忙しく立ち働く。奔走する。③多くの人が不平不満などを訴えて事が起きる。騒動が起きる。④やかましく苦情を言う。うるさく不平を言う。⑤驚きおそれて混乱する。あわてふためく。うろたえる。⑥心が動揺する。不安、驚きなどで気持が乱れる。落ち着かない。また、思い悩む。⑦ある事柄や人のことを多くの人々があれこれ言う。評判する。あれこれと噂する。また、人々がもてはやす。⑧酒宴などで、にぎやかに遊ぶ。歌舞音曲ではやしたてる。うかれ興ずる。
---	---

<ザワメク>(動詞・四段活用)

A	「めく」は接尾語。ざわざわと騒がしい感じになる。ざわつく。
B	—
C	(「めく」は接尾語) 声や音がさわがしい感じになる。また、多くのものがどことなくさわぎ動く感じなる。

<サワヤカ(サハヤカ)>(形容動詞・ナリ活用)

A	形動ナリ「さわやか」という表記もあり、仮名遣いは未詳。①気分がさっぱりするさま。さっぱりして気持ちがよいさま。②はっきりしているさま。③思いきりのよいさま。きっぱりしているさま。④きびきびしているさま。
B	①気分のさっぱりしたさま。②いかにも明快なさま。③気持にためらいがなく、すっぱりと思い切ったさま。④美しくさっぱりしているさま。清潔感があるさま。きれい。
C	(歴史的かなづかいは「さわやか」とも。「やか」は接尾語) ①さっぱりとして気分のよいさま。気持よくすがすがしいさま。爽快。俳句では秋の季語とする。②はっきりしているさま。明快なさま。分明。③思い切りのよいさま。すっぱりとしているさま。こだわりのないさま。④あざやかなさま。鮮明。⑤きれいなさま。美しいさま。

<サワヤク(グ)>(動詞・四段活用、下二段活用)

A	「さはやか」と同根。㊦ 動ガ四 気分がさっぱりする。さわやかになる。多く病気が快方に向うことにいう。㊦ 動ガ下二 ①病気を回復させて、病人の気分をさっぱりさせる。病人の回復を待つことをいう。②さっぱりときれいにする。
B	気分が良くなる。多く病気回復にいう。
C	(歴史的かなづかいは「さわやく」とも) ㊦ 〔自ガ四〕 気分がさわやかになる。こころよく清々する。㊦ 〔他ガ下二〕 さわやかにする。さっぱりした気分にする。

<サワラカ(サハラカ)>(形容動詞・ナリ活用)

A	『前田本字類抄』は「正サバラカ」とする。うるさくなくて、さっぱりとしているさま。
B	《サハヤカと同根。髪の毛の状態に使うことが多い》①(髪の毛がそう多くなく)すっきりとしているさま。②こざっぱりとしたさま。
C	(歴史的かなづかいは「さわらか」とも) ①さっぱりしているさま。さわやかなさま。きよらかなさま。②はっきりとしているさま。きっぱりとしたさま。

7. 語基ハラ系派生語

<ハラハラ>

A	①擬声語。衣服などが連続的に擦れ合って生じる音を表す。また、風が連続的に物に当たったり、物が空気を切ったりして生じる音を表す。②擬声語。物が次々と砕けるときに生じる音を表す。ぱりぱりと。③擬声語。物が焼けたり煮えたりしてはぜる音を表す。ぱちぱちと。④擬態語。髪が垂れかかっているさま。⑤擬態語。次々と連続的に事があるさま。露や木の葉などが次々ととめどなく落ちるさま。また、雨が小やみなく降るさま。涙がとめどなく流れ落ちるさま。また、涙をとめどなく流して泣くさま。多くの者がいっせいに次々と行動するさま。のちに「ばらばら(と)」とも。⑥擬態語。多くのものを対象とした行為が一気に終るさま。すらすらと。さっと。⑦擬態語。物が破れたり壊れたりしているさま。ぼろぼろであるさま。⑧擬態語。心配や不安で気がもめるさま。
---	--

B	①物と物とのふれあうさま。また、その音。②髪などのこぼれかかるさま。③乱れ散るさま。 ④涙・雨・木の葉などの落ちるさま。⑤次々と物を閉じ、また、扇を使うなどの音。⑥裂け破れてぼろぼろになっているさま。⑦物の焼けてはねる音。⑧あれこれと気をもむさま。
C	☐ 物の音にいう。①布、紙などが連続してすれ合う音を表わす語。②いっせいに動く音、また、そのさまを表わす語。③物が砕けたりこわれたりする音、また、そのさまを表わす語。④物が焼けてつぎつぎにはぜる音を表わす語。ぱちぱち。⑤物が壊れたり、破れたりするさまを表わす語。 ☐ 物が落ちたり、下がつたりするさまにいう。①長い髪がきれいにそろってとかれているさまを表わす語。②髪が乱れるさまを表わす語。③涙の流れるさま、また、泣くさまを表わす語。④雨のこやみなく降るさまを表わす語。⑤木の葉などが、静かに舞い落ちるさまを表わす語。 ☐ 気をもみ危ぶむさまを表わす語。
D	①小さくて粒状のものや薄いものが、散らばりながら落ちる音。また、そのさま。②長い髪が乱れるさま。③いっせいに動く音。また、そのさま。④気をもみ、危ぶむさま。⑤[古]ものが砕けたりこわれたりする音。ものが焼けて次々にはぜる音。また、そのさま。ぱちぱち。 ⑥[古]ものが連続してすれ合って立てる音。また、そのさま。

<バラバラ>

A	☐ 副 擬態語。濁点を表記しない「はらはら(と)」の中には「ばらばら(と)」かと思われるものもある。①多くの者がいっせいに次々と行動するさま。古くは「はらはら(と)」であったか。②物が次々とこぼれ落ちるさま。③髪がまとまらずに乱れているさま。 ☐ 形動 ナリ 一つにまとまらずに離れ離れになっているさま。「ばらばらに」の形を多用する。
B	乱れ散るさま。
C	☐ [副](多く「と」を伴って用いる) ①多数が、勢いよくいっせいに、あるいは次々に立ったり動いたりするさまを表わす語。②粒状のものが、散らばりながら勢いよく落ちる音、また、そのさまを表わす語。③一つのまとまりをもった物が、細かく分離切断されるさま、また、細かくなって落ちるさまを表わす語。④一つにかたまらないで分散するさまを表わす語。⑤「ばらばら ☐ ④」に同じ。 ☐ [形動] ①まとまっていたものが分散するさま。また、細かく分断されるさま。②それぞれ思い思いに違っていてまとまりのないさま。それぞれが互いに関係なく、独立しているさま。

D	①粒状のものが、散らばりながら勢いよく広がって、ものにぶつかる音。また、そのさま。 ②多数が、勢いよくいっせいに、あるいは次々に立ったり動いたりするさま。③一つのまとまりをもったものが、こまかくわかれるさま。また、こまかくなって落ちるさま。④一つにかたまらないであちこちにあるさま。それぞれが独立していてまとまりのないさま。⑤本などのページが乱暴に次々とめくれる音。また、そのさま。
---	--

<パラパラ>

A	擬声語。霰(あられ)が物に当る音などを表す。『俚言集覧』に「はらはら …又、濁りて呼ぶ時は、雨の声にも物の散落る声にもなるなり。又は、文字半濁バラバラと呼ぶ時は、乾燥の物の散音になるなり。濁も半濁も皆俗言にていづれも同意也」とある。
B	—
C	☐ [副](多く「と」を伴って用いる。「ばらばら」よりも軽く、また、まばらである感じをいう) ①雨や霰(あられ)や木の葉など軽いものがまばらに落ちてくる音、また、そのさまを表わす語。②小さな物や光が一面に飛び散って広がるさまを表わす語。③まばらであるさまを表わす語。④本などを手早く、あるいは漠然とめくるさまを表わす語。 ☐ [形動] 頭髮の乱れるさま。
D	①雨や霰や木の葉など軽いものがまばらに落ちてくる音。また、そのさま。②一つのまとまりをもったものが散らばって広がるさま。③まばらであるさま。一つにかたまらないで、分散しているさま。まとまりのないさま。④本などのページが軽く次々にめくれる音。また、そのさま。

<ハラハラ>

A	擬態語。散らばって存在するさま。ばらばらに。散り散りに。
B	《ハラと同根》散り散りになるさま。ばらばら。
C	ちりちりにあるさまを表わす。ばらばらに。
D	[古]ちりちりにあるさま。ばらばら。

<ハラリ>

A	擬声語。「ぱらり」、「ばらり」との相違は正確には分らないので、ここに一括しておく。『日ポ』には、「Fararito」について「すべて、あるいは、すっかり」と説き、「Pararito fararito」について「穀物など、何か物の落ちる際に立てる音の形容。また、すべて余すところなく」と説いて、「Pararito たつた 〈一人残らずみな立ち上がった〉 Pararito うちくづす 〈全部残る所なく破壊する〉」の例を挙げ、また「Bararito」についても「すべて、すっかり」と説いていて、これによれば「すべて、すっかり」の意が、この三者に共通してあるらしい。しかし、「はらり」あるいは「ぱらり」が、物が軽やかに散り落ちるさまや、その音の形容、さらには、動作や動きの軽快なさまをいうのに対して、「ばらり」は、いまいし重い感じで、物が急に落ちてばらばらになるさま、特に琵琶の撥(ばち)の音を表したりもする点で異なる。具体的に髪などが解けるさまをいっている場合に、それが果して「ぱらり」か「ばらり」かを決めることは困難である。ただし、「はらり」「ぱらり」「ばらり」が、現代語では物の分散するさまをいうことが多いのに対して、古語では全体をまとめていう場合のあったことが注意される。
B	①ものが軽快に、たやすく解けたり、散ったり、離れたりするさま。また、その音。②未練・執着することのないさま。あっさり。
C	(多く「と」を伴って用いる)①軽い物が他の物にかすかに当たったり落ちたりするさまを表わす語。②髪などが乱れてさがったり広がったりするさまを表わす語。③軽く素早い動作や動きを表わす語。④いっせいに動くさまを表わす語。⑤例外なくその状態であるさまを表わす語。のこところなく。まったく。すっかり。ぱらり。ばらり。⑥おろかなさまをいう、人形浄瑠璃社会の隠語。
D	①軽いものが他のものにかすかに当たったり落ちたりするさま。②髪などが軽く乱れてさがったり広がったりするさま。③軽くすばやい動作や動きをするさま。④[古]例外なくその状態であるさま。残るところなく。すっかり。ぱらり。ばらり。

<バラリ>

A	—
B	—

C	(多く「と」を伴って用いる)①物が落ちるさまを表わす語。ばらばら。④花などの散り落ちるさま。⑤さかんに涙が流れるさま。②糸や紐、或いは紙の継ぎ目などが切れるさまを表わす語。③琵琶などの撥の音を表わす語。④「はらり⑤」に同じ。
D	①重みを感じさせながら、ものが落ちるさま。花びらや涙などの落ちるさま。②髪などが乱れてさがったり広がったりするさま。③糸や紐、あるいは紙の継ぎ目などが切れるさま。④[古]琵琶や琴を一度かき鳴らす音。⑤[古]例外なくその状態であるさま。残るところなく。まったく。すっかり。はらり。ばらり。

<パラリ>

A	—
B	—
C	(多く「と」を伴って用いる)①軽い物が落ちるさまを表わす語。②まばらに散らばっているさまを表わす語。③「はらり④」に同じ。④「はらり⑤」に同じ。
D	①軽いものが落ちるさま。はらり。②髪などが軽く乱れてさがったり広がったりするさま。③まばらに散らばっていたり散らすさま。④紙や布などがめくれるさま。⑤[古]例外なくその状態であるさま。すっかり。

<ハラフ>(動詞・四段活用、下二段活用)

A	はらふ 1 動ハ四 ①邪魔になるものを取り除く。掃除する。②敵対する者を排除する。駆逐する。追い出す。③人を遠くへ追いやる。貴人の行列などで、先払いをする。「あたりをはらふ」といえば、人を寄せつけないようにしたり、周りを圧倒して遠ざけることをいう。④刀などを、左右にはたくように振る。⑤売って処分してしまう。⑥代金を渡す。⑦算数の用語。ある数を減ずる。引く。「引きはらふ」ともいう。 はらふ 2 ㊦ 動ハ下二 祓(はらへ)をする。 ㊧ 動ハ四 穢(けがれ)や物怪(もののけ)などを、身体から取り除く。
B	はらふ 1 [四段] 《ハラはハラシのハラ(晴)と同根。いらないものをすっかり捨て去るように、振ったり、ゆすったりする意》①(ごみなどを)振って散らす。②刈ってすっかり除く。③賊を追散らす。④すっかりきれいに片づける。⑤追放する。また、追放の刑に処する。⑥渡すべき金銭を渡す。支払う。

	はらふ2〔下二段〕《ハラはハラシのハラ(晴)と同根。何もひっかるものが無い意。へはアへ(合)の約。事の軽重に合わせる意。自己の犯した罪過や、受けた穢(けがれ)・災(わざわい)を無くすために、事の度合いに応じて、相手や神に物を差し出して、罪過穢災をすっかり捨て去る意》神に祈って、災や罪を捨て去る。
C	はらふ1〔他ワ五(ハ四)〕①有害・無益・不用のものを取り除く。除去する。㊦取り捨てる。取り除く。退ける。㊧ちりなどのよごれを除き捨てて清める。㊨罪やけがれを除き去る→祓う。㊩雪、霜、露などを取り除く。また、涙をぬぐう。㊪服従しないものを打ち退ける。乱をしずめる。㊫放逐する。追いやる。㊬目前の人を引き下がらせる。先払いをする。また、人払いをする。②(「あたりをはらう」などの形で)まわりのものを圧倒する。威圧する。③人に売り渡す。売りはらう。処分する。④上下または左右にはたくような動作をする。㊭軽くたたく。かすめ打つ。はたく。㊮刀などを左右に振る。横ざまに切る。なぎ倒す。㊯軽くはたくようにして、眉づけをする。眉を作る。⑤代金を渡す。支払う。⑥(注意、関心、尊敬、または犠牲、努力をはらう、などの形で)自らの気持をそちらに向けたたり、力を傾けたりする。⑦(「そろばんをはらう」の形で)そろばんの玉を、計算する前の御破算の状態にもどす。 はらふ2 ☐〔他ワ五(ハ四)〕神に祈って、災いや罪、けがれを払い除き、清める。 ☐〔他ハ下二〕☐に同じ。

<ハラメク>(動詞・四段活用)

A	「めく」は接尾語。①ばらばらと音を立てる。雨の降る音などにいう。「Barameku 〈雨やこれに似たものが地面にあたるときに音を立てる〉(日ポ)」とあり、「ばらめく」ともいう。②ばらばらになる。
B	①ばらばらと音をたてる。②ばらばらと散乱する。乱れ飛ぶ。③ぼろぼろになる。
C	(「めく」は接尾語)①はらはらと音を立てる。雨の降る音、鳥の乱れ飛ぶ音、布の風に翻る音などにいう。②ばらばらになる。布などが、ぼろぼろになって切り裂ける。切れ切れになる。③煮かたが足りなくて一粒一粒がばらばらである。ばさばさする。

<ハラカス>(動詞・四段活用)

A	「かす」は接尾語。散らす。ばらばらにする。
B	ばらばらにする。

C	(「はららく(散)」の他動詞。後世「はららがす」とも)ばらばらにする。ばらばらに散らす。四方に追い散らす。
---	---

<ワラワラ>

A	①破れ乱れたさま。②快活であるさま。「わららか」と同じ。
B	—
C	(多く「と」を伴って用いる) ①乱れたさま、破れ乱れたさまを表わす語。②陽気なさまを表わす語。③たやすく燃えあがるさまを表わす語。④急いで行動するさま、統制がとれていないさまなどを表わす語。
D	①余裕がなく急いで行動するさま。統制がとれていないさま。②見る間に燃え広がっていくさま。③[古]ひどく乱れたさま。破れ乱れたさま。④[古]陽気なさま。にこやかなさま。

8. 語基ホロ系派生語

<ホロ>

A	ほろと 副 ①擬態語。少し涙がこぼれるさま。少し泣くさま。ほろりと。②擬声語。「ほろほろ(と)②④」に同じ。 ほろに 副 ばらばらに、などの意の擬態語であろう。「ほど(ろ)・はだ(ら)・ほの」などと共通性のある語か。
B	《ハラの母音交替形》ばらばらなさま。
C	(多く「と」を伴って用いる)①雉子・山鳥・杜鵑(ほととぎす)などの鳴き声を表わす語。②涙を一滴こぼすさまを表わす語。
D	—

<ホロホロ>

A	①擬態語。落ち散ったり、欠け落ちたりするさま。涙のこぼれ落ちるさま。ぼろぼろ。木の葉などの散り落ちるさま。はらはら。人がちりぢりに分散したり、物が欠け落ちたりほころび
---	---

	たりするさま。ものの状態がゆっくりと変化するさま。ぼちぼち。炎の揺らめくさま。②擬声語。山鳥(やまどり)、雉(きじ)の鳴く声のさま。もとは、山鳥が涙を流して泣くさまの意であるが、それを鳴き声と誤解し(山鳥はほとんど鳴き声を発しない)、近縁の雉の鳴き声にも類推した。琵琶の音のむせび泣くように聞こえるさま。ぼろんぼろん。物を食べる音のさま。ぼりぼり。砵(きぬた)を打つ音のさま。ぽんぽん。
B	①木の葉などがはらはらと落ちるさま。②人がちりぢりになって別れるさま。③涙の流れるさま。④着物などが、たやすくほころびたりするさま。⑤歯でものをくたくさま。⑥山鳥などの鳴き声。
C	①葉や花などが散るさまを表わす語。②涙がこぼれ落ちるさま、また、激しく泣くさまを表わす語。③集まっていた人人が分かれ散るさまを表わす語。④物が裂け破れるさま、こなごなになるさまを表わす語。ぼろぼろ。⑤雉子(きじ)、山鳥などの鳴く声を表わす語。⑥砵(きぬた)を打つ音を表わす語。
D	①キジ・ヤマドリなどの鳴く声。②尺八や琵琶の音。砵を打つ音。③葉や花などが軽やかに散ったり落ち続けるさま。涙や水滴などがあとからあとからこぼれ落ちるさま。④集まっていた人々が別れ散るさま。⑤ものが砕け破れるさま。こなごなになるさま。⑥炎のゆらめくさま。

<ボロボロ>

A	☐ 副「と」を伴って用いる。①擬態語。濁音表示のないものは、「ほろほろ」の可能性もある。衣服・紙などの破れほころびているさま。②擬態語。物の欠け落ちるさま。ぼろぼろ。③擬声語。尺八(しゃくはち)の音のさま。 ☐ 形動ナリ 衣服の破れほころびているさま。
B	—
C	☐ 〔副〕①くだけた物や粒状の物が激しくこぼれ落ちるさまを表わす語。②涙が激しくこぼれ落ちるさまを表わす語。③破れているさまを表わす語。 ☐ 〔形動〕①物がひどくこわれているさま。また、衣服などがひどく破れているさま。転じて、心身が疲れきっているさま。②水分が不足で粘りけがなかったり、ばらばらになったりしているさま。
D	①砕けたものや粒状のものが次々に大量にこぼれ落ちるさま。大粒の涙を流すさま。②水分が不足でねばりけがなく、もろいさま。③ものがひどくこわれているさま。衣服などがひどく破れているさま。心身が疲れきっているさま。

<ポロポロ>

A	—
B	—
C	㐁[副]「と」を伴って用いることもある) ①小さい粒状の物がこぼれ落ちるさまを表わす語。②涙がつづけてこぼれ落ちるさまを表わす語。③粘りけがなくばらばらなさまを表わす語。㐂[形動] 固い物がもろくこなごなにくだけるさま。また、水分を失った物などがくだけるさま。
D	①小さい粒状のものが次々にこぼれるさま。涙がこぼれ続けるさま。②水けとねばりけがなくもろいさま。③かたいものがもろく砕けるさま。水分がなくなってくだけるさま。

<ホロリ>

A	擬態語 ①物が本体から離れて欠け落ちるさま。ぼろっと。②物に感じて心が動くさま。また、涙がこぼれるさま。③「はらり(と)」よりもやわらかなさま。ふわっと。
B	①花や木の葉などが、はらはらと落ちるさま。②涙がこぼれ落ちるさま。
C	(多く「と」を伴って用いる)①物がもろく散り落ちるさまを表わす語。②涙が一滴落ちるさまを表わす語。③ゆるやかに足を踏むさま、軽やかに身をこなすさまを表わす語。④何かに感じいって心が動くさま、また、相手に同情するさまなどを表わす語。
D	①ものがもろく散り落ちるさま。②涙が一滴落ちるさま。③何かに感じいって心が動くさま。相手に同情するさま。④いい気持ちになる程度に酒に酔うさま。⑤口の中でもろくくずれるさま。⑥[古]ゆるやかに足を踏むさま。軽やかに身をこなすさま。

<ボロリ>

A	擬態語。ひっそりとしてももの寂しいさま。
B	—
C	(多く「と」を伴って用いる)①人がまばらなさまを表わす語。②「ぼろり」に同じ。

D	①重たげに何かをとり落とししたり、何かの一部が欠け落ちるさま。②[古]人がまばらで静かなさま。
---	---

<ボロツク>(動詞・四段活用)

A	ぽつりぽつりと雨が落ちる。ばらつく。
B	—
C	(「つく」は接尾語。「ぼろつく」とも)雨がぽつりぽつりと振り出す。ばらつく。

<ホロボ>(動詞・上二段活用)

A	①世に存在するものが消滅する。人や建物のような具体的なものが死亡、廃亡するのにも、国や氏族のような組織体が破滅、解体するのにもいう。②勢力が減退する。また、落ちぶれ、沈淪する。③罪などが消滅する。
B	《ホロはホロホロのホロ。ばらばらになる意》①崩れ消え去る。②破滅する。滅亡する。③おちぶれる。零落する。
C	☐ 「ほろびる」に同じ。

9. 語基ユラ派生語

<ユラ>

A	「に」「と」を下接して用いる。擬声語。玉や鈴などが触れ合って立てる音。「ゆらく/ぐ」「ゆらかす」「ゆらら」などの語を派生する。
B	①玉などがふれ合って鳴る音。②ゆるやかなさま。
C	(「に」「と」を伴って用いる) 玉や鈴などの触れ合って鳴る音、硬い物がぶつかりあって鳴る音などを表わす語。
D	[古] 玉や鈴などがふれ合って鳴る音。かたいものがぶつかり合って鳴る音。もゆら。ゆらら。

<ユラユラ>

A	①髪などの量が豊かにあるさま。ふさふさと。ふつくと。②せかせかせずに落ち着いてするさま。ゆるゆると。ゆつくりと考えるさま。③ゆつくりと事をなすさま。④ゆつくりと進み行くさま。⑤線状のものが揺れ動くさま。
B	ゆれ動くさま。
C	①ゆれうごくさま。ゆりうごかすさまを表わす語。②動作や気持などがゆるやかであるさまを表わす語。ゆるゆる。ゆつくり。ゆったり。③(髪などが)たつぷりと豊かであるさまを表わす語。
D	①やわらかく何度もゆれ動くさま。ゆり動かすさま。②間のびするほど急がずにものごとを行うさま。気持ちなどに余裕のあるさま。ゆるゆる。

<ユララ>

A	「ゆら」の畳語の転か。①擬声語。玉などが触れ合って立てる音を表す。②擬態語。動作がゆつくりしているさまゆると。
B	「ゆら」を重ねた語。
C	(多く「に」や「と」を伴って用いる) ①鈴や玉が触れ合って鳴る音を表わす語。②ゆとりがあってゆったりしているさまを表わす語。③ゆつくりゆれうごくさまを表わす語。
D	①[古]鈴や玉がふれ合って鳴る音。②[古]やわらかくゆれ動くさま。③[古]ゆとりがあるさま。

<ユラリ>

A	①軽やかに体を動かすさま。さっと。ひらりと。②緩やかに揺れ動くさま。ゆつくりと。
B	①ゆとりがあってゆったりしているさま。②のんびりとゆれ動くさま。③軽やかにゆれ動くさま。

C	(多く「と」を伴って用いる) ①軽くすばやく体を動かすさまを表わす語。ふわり。ひらり。②ゆっくりとゆれうごくさまを表わす語。③動作や気持などにゆとりがあつてゆったりとしているさま。
D	①やわらかく一度ゆれ動くさま。落ち着くことのないさま。②動作や気持ちなどにゆとりがあるさま。ゆったり。③やわらかくすばやく体を一度動かすさま。ふわり。ひらり。

<ユラグ(グ)>(動詞・四段活用)

A	玉や鈴などが触れ合つて音を立てる。
B	《ユラは擬音語。キは擬音語を受けて動詞化する接尾語》音を立てる。
C	(古くは「ゆらく」) ①玉や鈴などが触れ合つて音を立てる。②物や光がゆれる。ゆれうごく。③物事の基盤がぐらつく。④組織などの基盤や勢力が安定しなくなる。ぐらつく。⑤確固としていた人の信念・気持などが安定しなくなる。動揺する。ぐらつく。

<ユラフ>(動詞・下二段活用)

A	「ゆる(揺)」「ゆるし(緩)」「ゆるふ」と同根。「ゆらゆ」とも。多く軍記物語に用いる。①進行させずにとどめる。ひかえる。②進行せずにとどまる。また、進むのをためらう。
B	①進まずに一つ所に停滞する。ためらいとどまる。②抑える。控えとどめる。
C	《「ゆる(緩)と同語源》 ☐ 緊張を解いて、とどまって休む。進まずにとどまっている。また、進むことができずにいる。ゆらゆ。 ☐ 緊張を解いた状態にする。ゆるくする。休める。また、ひかえとどめる。

<ユラシ>(形容詞・ク活用)

A	「ゆるし」に同じ。
B	—

C	ゆるやかである。→ゆらみ
---	--------------

10. 語基ユル系派生語

<ユル>(形容動詞・ナリ活用)

A	①ゆるんでいるさま。糸などがびんと張っていないさま。②穏やかな様子。のんびりしているさま。③怠けているさま。おろそかにするさま。ゆるがせ。④寛大であるさま。
B	《ユルシ(許)と同根》①引き締められず、ゆとりがあるさま。②おろそか。怠慢。③寛大であるさま。
C	①びんと張りつめていないさま、しめつけ方がきつくないさま。ゆるいさま。②速くないさま。ゆっくりしているさま。また、勢いの弱いさま。③厳格でないさま。寛大なさま。おおらか。④ゆるがせにするさま。手を抜くさま。おこたるさま。怠慢。おろそか。
D	—

<ユルユル>

A	☐ 副「と」を伴って用いることが多い。①動作がゆっくりしているさま。また、急がず念入りであるさま。②精神的にのんびりしているさま。気持ちにゆとりのあるさま。③物が豊富なさま。たっぷりあるさま。ゆったりしているさま。④経済的に余裕のあるさま。⑤凝り固まった状態から弛緩するさま。二・形動・穏やかでゆったりしているさま。
B	ゆるゆる1【緩る緩る】 ①ゆとりのあるさま。②やわらかいさま。③ゆっくりしたさま。そろそろ。④おだやか。のんびり。 ゆるゆる2【揺る揺る】 揺れ動くさま。ゆらゆら。ぐらぐら。
C	☐ 〔副〕(多く「と」を伴って用いる) ①動作や気持ちにゆとりがあるさま、のんびりとくつろいださま、ゆったりとしたさまを表わす語。ゆっくり。②動作が遅いさま、急がないさまを表わす語。③しだいに伸びひろがるさまを表わす語。④髪の毛などが、ふさやかに豊かであるさまを表わす語。⑤やわらかいさまを表わす語。 ☐ 〔形動〕 ①穏やかなさま。平穏なさま。②ゆるんださま。締まりのないさま。

D	①動作や気持ちにゆとりがあつてくつろいださま。②動作が遅く落ち着いているさま。ゆっくり。そろそろ。ほどけたり、ゆるんだりして、締まりのないさま。しばられた状態から解き放たれるさま。④小さく遅くゆるるさま。ゆらゆら。⑤[古]しだいに伸びひろがるさま。
---	--

<ユルリ>

A	空間的、時間的、あるいは物質的に余裕があり、ゆったりしているさま。また、精神的にくつろいで、のんびりしているさま。
B	ゆっくり、ゆったりとしているさま。また、のんびりとくつろいでいるさま。
C	(多く「と」を伴って用いる) ①心おきなく、くつろいでいるさま、心にゆとりがあつて、のんびりとしたさまを表わす語。ゆっくり。ゆるゆる。②余裕が十分にあるさま、ゆったりとしたさまを表わす語。不足なく、らくらくと。③動作が遅いさまを表わす語。ゆっくり。ゆるゆる。
D	①心おきなく、くつろいでいるさま。心にゆとりがあるさま。のんびり。②余裕がじゅうぶんにあるさま。③時間がかかるさま。

<ユルガセ>(名詞/形容動詞・ナリ活用)

A	「いるかせ」の転。「ゆるかせに」の形で副詞的に用いることが多い。①いいかげん。なおざり。②緩やかなさま。
B	《イルカセの転。室町時代末頃までユルカセと清音》物事をいいかげんにすること。なおざり。おろそか。また、のんびりかまえてあくせくしないこと。
C	(「いるかせ(忽)」)の変化した語。古くは「ゆるかせ」①物事をいい加減にするさま。なおざりにするさま。おろそか。②きつくないさま。ゆるやかなさま。寛大なさま。また、のんびりしたさま。

<ユルク(グ)>(動詞・四段活用、下二段活用)

A	ユルク(グ)1 ☐ ゆったりする。ゆったりとくつろぐ。 ☐ ①ゆるめる。ゆるくする。②ゆるくなる。たるむ。
---	---

	ゆるく(ぐ)2 ①物や形が不安定に揺れ動く。ゆらぐ。②心が揺れ動く。揺れ動くて他へ移る。
B	《ユルはユリ(揺)と同根の擬態語。キは擬態語を受けて動詞化する接尾語。トドロキ・サワキの類。古くはユルキと清音か。》①全体が振動する。②身体をゆさぶる。威風あたりをはらう様子にいう。③心が動揺する。ぐらつく。
C	①ゆれる。ゆれ動く。動揺する。ゆらぐ。②心が動く。気が変わる。心が移る。③悠然とする。ゆったりとしてせこせこしない。

<ユルス>(動詞・四段活用)

A	「ゆる(許)」「ゆるふ／ぶ(緩)」「ゆるし(緩)」と同根。『名義抄』は「仁、優、可、聴、賞、免、与、許、容、寛、開、放、赦、釈」などに「ユルス」の訓を付す。①ゆるくする。④張っているものをゆるめる。㊤緊張している心をゆるめる。気をゆるめる。多く警戒心をゆるめて安心することをいう。⑥大まかに扱う。②持っているものを放す。束縛をゆるめる意からいう。④手もとから放す。手放す。「夕狩りに千鳥踏み立て追ふごとに由流須(ゆるす)ことなく(万葉・四〇一一)」などは、鷹が自分の支配下においた獲物を逃がすことをいう。㊤特に、拘束されているものを解き放つ。⑥持っているものを手放して他者に与える。譲る。 ③当事者にとって厳しい内容のものを、他者が恩恵をもってなくなるように計らう。厳しさをゆるめる意からいう。④課役・義務などを免ずる。免除する。㊤束縛された状態を解く。解消する。⑥当人の望まぬ事を、他者が当人の思いをいれてやめにする。堪忍する。事を表す語を省いて言うこともある。④本来とがめるべきものを、心をゆるめてとがめずに済ます。許容する。④罪や過失をとがめずに済ます。なかったこととしてそのままにする。㊤不十分だとは思いますが、それでよいとする。大目に見る。⑤他者の望む事を、受け入れる、希望をかなえる、聞き入れる。禁をゆるめる意から、上位者が下位者の願いに対して、恩恵をもって認めることをいう。④望む事柄を示す用法。その事を「…を」と明示しなくても文脈から判断できる用法も多い。㊤事柄を表す語を省いて、物を表す名詞のみを「…を」と示す用法。「いとま(=暇ヲトルコト)をゆるす」「御前(=御前ニ出ルコト)をゆるす」などと多用された。⑥特に、資格を認める。水準に達したとして、上位者が下位者に一定の位につくことなどを認める。「色(=禁色ノ着用)をゆるす」「殿上(ノ交ワリ)をゆるす」などと多用された。⑥とても優れていると認める。高く評価する。「天ゆるす」「人ゆるす」「世ゆるす」などの形で用い、多く受身表現でいう。
---	--

B	㊦〔四段〕《ユル(緩)と同根》①緊張や束縛の力を弱めて、自由に動けるようにする。①十分に引き締めた力を抜く。②(しっかりと捕えたものを)手放す。逃がす。③赦免する。放免する。④身から離れさせる。放す。②他のものの権利・自由などを認め、受け入れる。 ①(気持をゆるめて)相手を受け入れる。②行為を許可する。③相手を認める。認めて一目置く。④我慢する。堪忍する。
C	《「ゆる(緩)」「ゆるい(緩)」と同語源》①引き張ったものをゆるめる。②捕らえたものを逃がす。解放する。また、身からはなす。③罪、とが、あやまち、欠点などをとがめないですませる。また、罰したものを赦免する。釈放する。④ある行為をさしつかえないとして許可する。禁を解く。⑤気持をゆるめる。また、相手を信頼し、うちとける。⑥願いを聞き入れる。聞き届ける。⑦女が男に身をまかせる。⑧義務や負担を免ずる。⑨すぐれていると認める。⑩自分やまわりの状態などが、ある物事を行うことを可能にする。

<ユルフ>(動詞・四段活用)

A	古くは清音「ゆるふ」。のち「ゆるむ」の形を用いる。一、〔動ハ／バ四〕ゆるくなる意。①ものの張りや締りがなくなる。「うはごほりあはにむすべるひもなればかざす日かげにゆるふばかりを(枕・九〇)」のように氷が解けることや、「昼になりてぬるくゆるひもていけば(枕・一)」のように寒気が和らぐことなど、広く用いる。②心の緊張がなくなる。油断する意にもゆったりとくつろぐ意にもいう。
B	《ユルシ(許)と同根。後世ユルビと濁音化》①締めたものが解けかかる。ゆるみが出る。②(氷などが)溶ける。③(寒さなどが)やわらぐ。④気持にゆるみが出る。油断する。⑤気持に余裕が出る。寛大になる。
C	㊦①「ゆるむ(緩)㊦①」に同じ。②「ゆるむ(緩)㊦②」に同じ。③「ゆるむ(緩)㊦③」に同じ。④「ゆるむ(緩)㊦④」に同じ。⑤くつろぐ。ゆったりとした気持になる。うちとける。⑥心にゆとりをもつ。寛大でおおらかな心を持つ。おっとりとする。

<ユルフ>(動詞・下二段活用)

A	一(四段)の他動詞。①ものの張りや締りを弱くする。②厳しさを緩和する。手かげんする。また、ゆったりさせる。
---	--

B	《ユルヒ(緩)の他動詞化》①ゆるくする。ゆるみをもたせる。②力を抜いて手加減する。
C	⇒ゆるべる(緩)。

<ユルラカ>(形容動詞・ナリ活用)

A	「らか」は接尾語。「ゆるるか」とも。①物がたっぷりあるさま。十分にあって、ゆったりしているさま。②きつく、あるいは厳しくなくて、ゆるんでいるさま。③時間的にゆっくりしているさま。のんびり。④性格的にのんびりしているさま。鷹揚であるさま。
B	①ゆとりのあるさま。たっぷり。②ゆっくりしたさま。
C	(「やか」は接尾語)①締め方、張り方、また、着用の仕方などがきつくないさま。たるみやすきまのあるさま。ゆったりしたさま。②動きが急でないさま。勢いが激しくないさま。ゆっくりしたさま。緩慢なさま。③傾きや曲がり方が急でないさま。なだらかで、陰しくないさま。変化がゆっくりしているさま。④心に余裕のあるさま。気持のくつろいださま。のんびりしたさま。⑤規律、制限、規制などがきびしくないさま。寛大なさま。⑥物が水気を含んでやわらかいさま。

<ユルルカ>(形容動詞・ナリ活用)

A	「ゆるらか」の母音交替形。「奢オゴル、ホコル、ユルハカナリ」〔名義抄〕 ①「ゆるらか①」に同じ。②「ゆるらか②」に同じ。③「ゆるらか③」に同じ。④「ゆるらか④」に同じ。
B	《ユルユルカの約》ゆとりあるさま。ゆっくりとしたさま。
C	①「ゆるらか(緩―)①」に同じ。②「ゆるらか(緩―)②」に同じ。

<ユルシ>(形容詞・ク活用)

A	①密接・緊迫・ひたむきではなく、余裕・弛緩・穏やかであり、可変的、緩衝的要素を持つことをいう。①作用する力や備る性質が穏やかであるさま。②速やかでないさま。緩慢であるさま。遅い。③厳格でないさま。寛容なさま。法の適用に手心を加える場合などという。④締りのないさま。物事の締り方が不十分である場合にも、精神的に緊張していない場合
---	---

	にもいう。⑤外側と内側とのすきまが大きすぎるさま。中身に比して、入れ物が大きすぎることにいう。
B	《ユル(緩)の形容詞形》①ゆるやかである。ゆるんでいる。②間を置いている。ゆっくりしている。③心の緊張がたるんでいる。油断している。④おおらかでのんびりしている。また、寛大である。
C	《「ゆる(緩)」「ゆるす(許す)」と同語源》①糸やひもなどを張ったり結わえたりした時に、たるみやすきまがあつてきっちりしていない。また、まわりからしめつけたときの度合が弱い。たるんでいる。②入れ物が大きくて中身とびったり密着しない。③水分が多くて、十分に固まってない。ねばりけがない。④激しくない。勢いが弱い。ゆるやかである。⑤動きが緩慢である。ゆっくりしている。のろい。⑥厳しさがいいかげんである。たるんでいる。てぬるい。油断している。⑦寛大である。おっとりとしている。おうようである。おおらかである。⑧変化する度合いが急激でない。傾斜の角度、曲線の円弧などがなだらかである。

<ヨロヨロ>

A	擬態語。足もとが定らずふらふらしているさま。
B	《擬態語ヨロを重ねた形》足もとが定まらず、ふらふらしているさま。
C	☐ (「と」を伴って用いることもある) 足どりが確かでなく、よろめくさまを表わす語。 ☐ ⊖に同じ。
D	①足どりが確かでなく、体が安定しないさま。体がゆれて倒れそうになるさま。②動きや態度などが迷ったり不安定なさま。③弱々しいさま。

<ヨロメク>(動詞・四段活用)

A	「めく」は接尾語。足もとがふらついて倒れそうになる。よろよろする。また、よろよろしながら歩く。
B	足もとが定まらずよろよろする。
C	①足どりがふらついてよろよろする。よろける。よろぼう。②浮気をする。誘惑にのる。